

宇土城跡（西岡台）Ⅸ

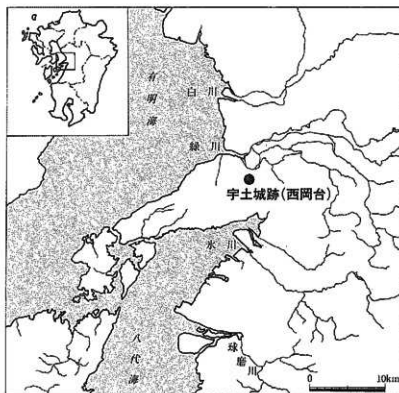
— 史跡宇土城跡保存修理事業に伴う発掘調査報告書 —

2007

熊本県宇土市教育委員会

宇土城跡（西岡台）Ⅸ

— 史跡宇土城跡保存修理事業に伴う発掘調査報告書 —



2007

熊本県宇土市教育委員会



宇土城跡（西岡台）周辺
航空写真（上が北東）



宇土城跡（西岡台）航空写真（南より）

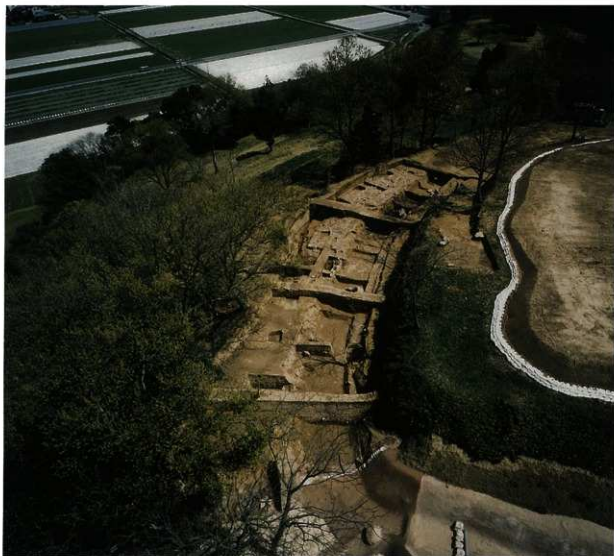
巻頭図版 2



主郭・千量敷南及び西側
横堀跡 SD02発掘調査状
況（南西より）



千量敷北側横堀跡 SD02
周辺発掘調査状況（上が
北）



千畳敷北側の堀底に段差を有する横堀跡 SD02 (西より)



堀底に堆積した基盤層掘削土 (南より)

巻頭図版 4



大量に出土した土師質土器と瓦質土器の楕鉢や火鉢などの雑器類



様々な種類の陶磁器

序 文

宇土市が位置する宇土半島基部や周辺地域には、中世に築城された数多くの城跡が残されており、地域の大切な文化遺産として保存・継承されています。なかでも宇土城跡（西岡台）は宇土氏や名和氏の居城として広く知られており、その規模は県下の中世城跡のなかでも最大級を誇ります。

宇土城跡は昭和54年3月に国の史跡に指定され、56年度より保存整備事業を開始しました。現在、第1ブロック（西岡神社北側地区）と第2ブロック（千畳敷及び周辺地区）の発掘調査及び整備工事を完了し、平成18年度から第3ブロック（三城及び周辺地区）の発掘調査に着手しました。

宇土城跡の主郭・千畳敷の発掘調査では、多数の掘立柱建物跡や柵列跡、門跡などを検出しました。また、千畳敷を囲む横堀跡が未完成で掘削単位（小間割）の跡が残されていたことや、石塔を用いた城破り跡が九州で初めて確認されるなど極めて重要な成果が得られています。また、調査で出土した土師質土器や瓦質土器、中国製や朝鮮製などの貿易陶磁器は、宇土城跡の往時の様子を今に伝える貴重な資料といえます。

以上の調査成果を反映し、正しい歴史的事実に基づいた整備を行うため、史跡宇土城跡保存整備検討委員会の協議を経て事業を進めています。これまでに掘立柱建物跡の平面・立体表示や堀跡の復元、城破りに用いられた石塔の野外展示などの遺構整備、トイレや花木広場などの便益・休養施設の整備を実施しました。

最後になりましたが、発掘調査ならびに整備工事にあたってご指導・ご協力いただきました文化庁記念物課ならびに熊本県教育委員会文化課、保存整備検討委員会の先生方をはじめ、関係各位の皆様にご心より感謝申し上げます。

平成19年3月

宇土市教育長 根本忠昭

例 言

- 1 本書は熊本県宇土市神馬町に所在する宇土城跡（西岡台）の第1・9・10次発掘調査報告である。なお、2～8次調査及び11次調査以降については、平成19年度より数年にわたり刊行する予定である。
- 2 1次調査は市立鶴城中学校建設に伴う緊急調査で昭和49・50年度に宇土市教育委員会が実施、9・10次調査は史跡宇土城跡保存修理事業（国庫補助事業）に伴い、平成9・10年度にかけて同教育委員会が実施した。
- 3 調査地は宇土市神馬町579、407ほかに所在する。
- 4 発掘調査は平山修一・高木恭二（1次）、瀬上真行（9次）、木下洋介（9・10次）、藤本貴仁（10次）が担当した。
- 5 発掘調査に伴う遺構実測図は、1次は主に平山・高木、9次は梅田亞耶・瀬上、10次は藤本が作成した。なお、9・10次調査に関しては実測図作成の一部や遺構図化を株式会社埋蔵文化財サポートシステム及び株式会社スカイサーベイに委託した。
- 6 発掘調査時の写真撮影は上記各担当者が行い、遺物写真は藤本が撮影した。
- 7 遺物実測図作成および遺構・遺物実測図の製図は瀬上幸恵・山口陽子・境美和・柿原和美・藤本、出土遺物一覧表の作成は林和美・村上洋子・山口・藤本が行った。なお、本編の挿図と図版の遺物番号は対応する。
- 8 出土陶磁器については、大橋康二氏・美濃口雅朗氏・森本朝子氏にご指導いただいた。なお、備前焼及び中国製の白磁・青磁・染付の分類は以下の文献によった。
間登忠彦 1991『備前焼』ニューサイエンス社
森田 勉 1982「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」同上
小野正敏 1982「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」同上
なお、文中の陶磁器の胎土や釉薬の色調については、小山正忠・竹原秀雄編新版『標準土色帖』日本色研事業株式会社を基本としたが、該当する色がない場合は『標準色カード230』同を使用した。
- 9 本編で用いた平面直角座標は日本測地系を使用し、方位は座標軸（日本測地系）を基準とした北をあらわす。また、レベルは標高を示す。
- 10 遺構は横列をSA、独立柱建物跡をSB、溝跡・堀跡をSD、井戸跡をSE、土坑をSK、柱穴などをPその他の遺構をSXと略表記する。
- 11 本書の執筆と編集は藤本が行った。
- 12 出土遺物・その他の関連資料は、宇土市教育委員会（宇土市新小路町95）に収蔵・保管している。

本文目次

第1章 序章	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 調査の組織	1
第2章 位置と環境	5
第1節 地理的環境と歴史的環境	5
第2節 宇土城跡に関する歴史	8
第3節 縄張りと発掘調査について	9
第3章 第1次発掘調査	13
第1節 調査の概要	13
第2節 検出遺構	18
第3節 出土遺物	27
第4節 小結	53
第4章 第9次発掘調査	55
第1節 調査の概要	55
第2節 検出遺構	55
第3節 出土遺物	59
第4節 小結	79
第5章 第10次発掘調査	81
第1節 調査の概要	81
第2節 検出遺構	83
第3節 出土遺物	93
第4節 小結	107
第6章 まとめ	109
第1節 横堀跡 SD02について	109
第2節 宇土城跡出土の土器・陶磁器について	110

挿図目次

図1 宇土城跡(西岡台)周辺の主な中・近世城跡 (1/500,000、1/100,000)	6	図12 H-T3、H-T3N遺構配置図(1/100)	23
図2 宇土城跡周辺遺跡分布図(1/25,000)	7	図13 H-T4、H-T5、H-T7、H-T8遺 構配置図(1/100)	24
図3 宇土城跡縄張り図(1/3,000)	10	図14 H-T6遺構配置図(1/100)	25
図4 1次調査区位置図(1/5,000)	13	図15 SX02位置図(1/3,000)	28
図5 三城周辺遺構配置図(1/400)	15	図16 SX02土師質土器出土状況(1/20)	28
図6 千疊敷周辺旧地形図(1/1,000)	16	図17 SD02出土遺物1(1/3)	29
図7 千疊敷周辺1次調査区(H-I地区)遺構配置図 (1/800)	17	図18 SD02出土遺物2(1/3)	30
図8 H-1区遺構配置図(1/100)	19	図19 SD02出土遺物3(1/3)	32
図9 H-2区遺構配置図(1/100)	20	図20 SD02出土遺物4(1/3)	34
図10 H-3区遺構配置図(1/100)	21	図21 SD05・SD06・SD07・SX01出土遺物(1/3)	35
図11 H-T1、H-T2、H-3区T6遺構配置 図(1/100)	22	図22 SX02出土遺物1(1/3)	37

図23	SX02出土遺物 2 (1/3).....	38	図41	SD02出土遺物10 (1/3).....	70
図24	SX02出土遺物 3 (1/3).....	39	図42	SD02出土遺物11 (1/3).....	71
図25	SX02出土遺物 4 (1/3).....	40	図43	10次調査区位置図 (1/1,000).....	81
図26	SX02出土遺物 5 (1/3).....	41	図44	10次調査区遺構配置図 (1/400).....	82
図27	SX02出土遺物 6 (1/3).....	42	図45	10次調査区西側遺構配置図 (1/100)	85・86
図28	遺構外出土遺物 (1/3).....	43	図46	10次調査区東側遺構配置図 (1/100)	87・88
図29	9次調査区遺構配置図 (左図: 1/400、右図: 1/1,200).....	56	図47	SD02土層断面図 1 (1/60).....	89
図30	SD01、SD02土層断面図 1 (1/60).....	57	図48	SD02土層断面図 2 (1/60).....	90
図31	SD01、SD02土層断面図 2 (1/60).....	58	図49	SD02土層断面図 3 (1/60).....	91
図32	SD01出土遺物、SD02出土遺物 1 (1/3).....	60	図50	開渠状遺構 SD17土層断面図 (1/60).....	92
図33	SD02出土遺物 2 (1/3).....	61	図51	配石遺構 SX03実測図 (1/30).....	92
図34	SD02出土遺物 3 (1/3).....	62	図52	SD02出土遺物 1 (1/3).....	94
図35	SD02出土遺物 4 (1/3).....	63	図53	SD02出土遺物 2 (1/3).....	95
図36	SD02出土遺物 5 (1/3).....	64	図54	SD02出土遺物 3 (1/3).....	97
図37	SD02出土遺物 6 (1/3).....	66	図55	SD02出土遺物 4 (1/5、1/3).....	98
図38	SD02出土遺物 7 (1/3).....	67	図56	SD02、SD18出土遺物 (1/3).....	99
図39	SD02出土遺物 8 (1/3).....	68	図57	遺構外出土遺物 (1/2、1/3).....	100
図40	SD02出土遺物 9 (1/3).....	69			

表 目 次

表 1	宇土城跡 (西岡台) 発掘調査の経過.....	4	表 3	1次調査出土遺物観察表.....	44
表 2	宇土城跡における名和家当主と歴史的事象	8	表 4	9次調査出土遺物観察表.....	72
			表 5	10次調査出土遺物観察表.....	102

図版目次

巻頭図版 1	宇土城跡 (西岡台) 周辺航空写真 (上が北東) 宇土城跡 (西岡台) 航空写真 (南より)			南より) 同上南側 SD02土層断面 (東より)	
巻頭図版 2	主郭・千畳敷南及び西側横堀跡 SD02発掘調査状況 (南西より) 千畳敷北側横堀跡 SD02周辺発掘調査状況 (上が北)		図版 2	千畳敷南西側コーナー SD01とSD02の重複状況 (H-T 3、西より) 同上西側 SD01とSD02の重複状況 (H-T 4、北より)	
巻頭図版 3	千畳敷北側の堀底に段差を有する横堀跡 SD02 (西より) 堀底に堆積した基盤層掘削土 (南より)		図版 3	千畳敷西側 SD01とSD02の土層断面 (H-T 6南セクションベルト、北より) 同上SD01の土師器出土状況 (H-T 8、南より)	
巻頭図版 4	大量に出土した土師質土器と瓦質土器の 裾鉢や火鉢などの雑器類 様々な種類の陶磁器			千畳敷北西側コーナー付近の堀底の段差 (H-T 6、西より)	
図版 1	宇土城跡遠景 (北西より) 千畳敷南西側コーナー調査状況 (H-T 3、		図版 4	三城西側遺構調査状況 (B地区、東より) 三城南側 SD07・SD08調査状況 (東より) SD07土層断面 (西より)	

- 図版5 C地区 SX02土師質土器出土状況(北より)
- 図版6 SD02出土遺物1
- 図版7 SD02出土遺物2
- 図版8 SD02出土遺物3、SD05～SD07・SX01出土遺物
SX02出土遺物1
- 図版9 SX02出土遺物2
- 図版10 遺構外出土遺物
- 図版11 千疊敷近景(西より)
千疊敷南・西側発掘調査空中写真(南西より)
- 図版12 千疊敷南側SD02完掘状況(東より)
同上完掘状況(西より)
千疊敷西側SD01・SD02セクションベルト調査前状況(北より)
- 図版13 千疊敷南西側コーナー付近調査状況(南より)
千疊敷西側完掘状況(北より)
同上完掘状況(南より)
- 図版14 SD02出土遺物1
- 図版15 SD02出土遺物2
- 図版16 SD02出土遺物3
- 図版17 SD02出土遺物4
- 図版18 10次調査区空中写真(上が北)
千疊敷北西側SD02土層断面(1区、西より)
SD02上層遺物出土状況(2区、北より)
SD02、井戸跡SE01調査状況(2区、東より)
SE01埋土半葺状況(北より)
- 図版19 SD02突出部2・3検出状況(2区、南より)
千疊敷北側SD02土層断面(2区、西より)
SD02検出状況(3・4区、西より)
- 図版20 千疊敷北側SD02及び平場調査状況(3区、南より)
SD02、堅路跡SD18埋土掘り下げ状況(3区、西より)
SD02底面検出のピット(3区、北より)
SD02、SD18調査状況(3区、西より)
SD18及び平場検出のピット群(西より)
- 図版21 SD02、SD18調査状況(南より)
SD18埋土掘り下げ状況(東より)
SD18南側の投棄された安山岩塊石(東より)
SD18調査状況(南より)
- 図版22 千疊敷北東側SD02土層断面及びSX03(4区、西より)
SX03(東より)
SD02突出部6検出状況(4区、南より)
千疊敷北東側平場検出のピット及び土坑群(4区、西より)
千疊敷北東側SD02及び平場調査状況(4区、南より)
- 図版23 千疊敷北西側SD02、開渠状遺構SD17調査状況(1区、南より)
SD17調査状況(北西より)
- 図版24 SD02出土遺物1
- 図版25 SD02出土遺物2
- 図版26 SD18出土遺物
遺構外出土遺物

第1章 序 章

第1節 調査に至る経緯と経過

昭和49年1月、宇土市立鶴城中学校の改築移転計画に伴い、その移転用地として宇土城跡¹⁾の所在する独立丘陵（通称：西岡台）をあてることが市関係機関の協議で決定した。本地は柏蒼殿屋敷跡として昭和47年12月23日に市の史跡に指定されていたため、宇土市教育委員会が主体となり49年3月から51年3月まで発掘調査を実施した。その結果、古墳時代の首長居館を囲む巨大な壕跡、主郭（千畳敷）の横堀跡、掘立柱建物跡などの数多くの遺構を検出し、古墳時代や中世を中心とする多量の遺物が出土した。これを受けて遺跡保存の気運が高まった結果、宇土城跡は恒久的に保存されることになり、中学校移転は中止されて史跡公園として整備・活用する方針が打ち出された。

昭和54年（1979）3月12日の官報告示によって国史跡に指定され、56年度には保存整備の基本計画である「史跡宇土城跡環境整備計画」を策定し、同年、保存整備工事に着手した。

本計画では宇土城跡を第1～5ブロックに地区別し、ブロックごとに遺構表示・休憩施設などを計画立案した。第1ブロック（西岡神社北側地区）は平成元年度におおむね整備を完了した。9年度には学識経験者で構成される史跡宇土城跡保存整備検討委員会が発足し、宇土城跡の調査成果や歴史的背景、歴史公園としての位置付けを考慮した整備を進めている。本委員会の指導・助言に基づき、10年度に「史跡宇土城跡保存整備基本計画書」を策定した。

第2ブロック（千畳敷及び周辺地区）の整備に関しては、平成元年度より着手したが、その動きが本格化したのは9年度からである。第2ブロックの主な整備施設を挙すれば、千畳敷を囲繞する堀跡の復元（9・10・13・15・17年度）、16・17号建物跡の平面表示（11年度）、休憩施設を兼ねた19号建物跡の整備（12年度）、トイレ建設（14年度）、案内板（15年度）、城門と櫓の設置（17年度）などで、17年度におおむね同地区の整備を完了した。なお、第3～5ブロックは、一部で防災工事が行われたほかは未着手である。

史跡整備を目的として第2ブロックの発掘調査を開始したのは、平成2年度の4次調査からである。現在までは毎年調査が行われており、千畳敷において多数の掘立柱建物跡を検出したほか、虎口や城門跡、横堀跡、塹堀跡の調査を実施した。また、千畳敷を囲繞する横堀跡が未完成であることや、虎口周辺部で石塔を用いた城破り跡を確認するなど注目すべき成果が得られており、その成果については報道機関への発表や現地説明会の開催、発掘調査概要報告書で公表している。

本書はこれまで実施した計19回にわたる発掘調査（平成18年度現在）のうち、上述した中学校建校に伴う第1次調査、史跡宇土城跡保存修理事業に伴い平成9・10年度に実施した第9・10次調査の発掘調査報告書である。第1次調査に関しては、『宇土城跡（西岡台）』本文編、宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集（宇土市教育委員会）で概要の報告がなされているため、本書では未発表資料を中心に報告する。

第2節 調査の組織（敬称略、役職は当時）

一第1次調査（昭和49・50年度）

調査責任者 宇土市教育委員会

調査団長 原口長之（熊本県文化財専門委員）

調査員

- 発掘調査 富樫一郎 (日本考古学協会・肥後考古学会会長)、大田幸博 (熊本県立大津産業高校教諭)、平山修一 (宇土市教育委員会主事)、高木恭二 (宇土市教育委員会主事補)
- 文献調査 井上正 (宇土市文化財専門委員)、阿蘇品保夫 (熊本市立高等学校教諭)、卯野木盈二 (熊本県立宇土高等学校教諭)
- 調査協力者 澤山収蔵・平野三代喜 (宇土市文化財専門委員)、坂田邦洋 (長崎大学医学部)、山崎純男 (福岡市教育委員会)、高木正文・丸山武水・松村道博 (熊本県教育庁文化課)
- 調査補助員及び協力者
熊本県教育庁文化課、宇土高校社会部、宇土高校社会部OB、轟地区婦人会、轟地区住民
- 調査担当課 宇土市教育委員会社会教育課

一第9・10次調査一 (平成9・10年度)

- 調査主体 宇土市教育委員会
- 調査責任者 坂本光隆 (宇土市教育長)
- 調査総括 今村謙二 (宇土市教育委員会文化振興課長)
- 調査担当 木下洋介 (文化振興課文化振興係参事、9・10年度)、瀧上真行 (同主事、9年度)、藤本貴仁 (同技師、10年度)
- 調査事務局 上妻房子 (文化振興係長)、野田恵美 (文化振興係参事)、阿田幸子 (同主事、9年度)
- 発掘調査及び整理作業員

浅川義男、浅川レイ子、石田ムツエ、梅田亜耶、小畑律子、釜賀ヨウ子、斉藤アサ子、坂田昭男、白石節子、園田佳代子、田中真佐子、中村次則、西谷完治、西谷美智子、野添重友、橋本チエ子、福島弘、福田フミエ、古山節子、本田栄子、本田亘、前田昭三、前田房子、村山鈍子、村山初夫、山形ユキコ、山田勇夫、山田敏江、山本忍

史跡宇土城跡保存整備検討委員会

北野隆 (委員長、熊本大学工学部)、服部英雄 (九州大学大学院比較社会文化研究科)、千田嘉博 (国立歴史民俗博物館考古研究部)、加藤允彦 (奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター)、高野茂 (熊本中世史研究会)

調査指導及び協力者

田中哲雄 (文化庁記念物課)、島田敏男 (奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部)、徳江秀夫 (群馬県埋蔵文化財調査事業団)、池田光雄 (中世城郭研究会)、大田幸博・松本健郎・古城史雄 (熊本県教育委員会)、鶴田倉造・富樫一郎・舟田義輔・村田房夫・吉田恒 (宇土市文化財保護審議会)、高木恭二 (宇土市教育委員会文化振興課市史編纂室)

一整理作業、報告書作成一 (整理作業：平成13～15年度、整理・報告書作成：18年度)

- 責任者 坂本光隆 (宇土市教育長、13～15年度)、根本忠昭 (同、18年度)
- 総括 吉永栄治 (宇土市教育委員会文化振興課長、13年度)、高木恭二 (同、14・15、18年度)、
- 事務局 高木恭二 (文化振興課長補佐、13年度)、船田貞明 (同、18年度)、山本和彦 (文化振興

課文化財係長、14・15年度）、松田安代（文化財係参事、13～15年度）、一安隆正（文化財係主事、13・14年度）、下田志穂里（文化財係参事、15年度）、宮田尚子・春木咲子（同、18年度）、村上淳子（文化財係主事、18年度）

執筆・編集 藤本貴仁（宇土市教育委員会文化振興課参事）

整理作業員 柿原和美、境美和、林和美、平木君代、淵上幸恵、山口陽子

史跡宇土城跡保存整備検討委員会

北野隆（委員長、熊本大学名誉教授）、服部英雄（九州大学大学院比較社会文化研究科）、千田嘉博（奈良大学文化財学科）

調査指導及び協力者

本中眞・市原富士夫・白崎恵介（文化庁記念物課）、大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）、大田幸博・木村元博・帆足俊文（熊本県教育委員会）、森本朝子（福岡市教育委員会）、林田和人・美濃口雅朗（熊本市教育委員会）、鶴嶋俊彦（人吉市教育委員会）、黒田裕司（三加和町教育委員会）、佐藤伸二・辻誠也・濱口俊夫・村田房夫・吉田恒（宇土市文化財保護審議会）

註

- 1) 西岡台の東約300mの低丘陵には、戦国大名小西行長が近世に築城した宇土城跡（城山）が所在し、混同を避けるため、通常、中世の宇土城跡は「宇土城跡（西岡台）」や「宇土古城」と呼ばれている。本書では特別のことわりが無い限り、「宇土城跡」とは「中世の宇土城跡」を指すこととする。

表1 宇土城跡（西岡台）発掘調査の経過

年度	次数	調査地点	調査地点及び 主な検出遺構	備 考
昭和49・ 50年度	1次	千畳敷周辺、三城周 辺ほか	堀跡（古墳時代）・横堀 跡・溝跡・掘立柱建物 跡・横跡・門跡・土坑部 （中世）	市立錦城中学校移転に伴う発掘調査。古墳時代の首長居館と 中世城跡の重複を確認。古墳時代首長居館の確認は全圖で2 番目。調査成果を受けて中学校の移転中止。
51年度				『宇土城跡（西岡台）』本文編・史料編刊行
62年度	2次	三城周辺	堀跡・溝跡（中世）	遺跡状況把握のための発掘調査。『宇土城跡（西岡台）』Ⅱ刊 行
63年度	3次	三城周辺	掘立柱建物跡（中世）	遺跡状況把握のための発掘調査。
平成2年度	4次	千畳敷北東側、同東 側遺道	掘立柱建物跡・溝跡（中 世）	保存整備に伴う発掘調査開始。以後継続する7次までの千畳 敷の調査で、重複する多数の掘立柱建物跡を検出。
3年度	5次	千畳敷南側	掘立柱建物跡・虎口（中 世）	千畳敷において、平面プラン「L」の字形の切通し状を呈す る虎口を確認。
4年度	6次	千畳敷北西側、同南 西側帯曲輪	築跡（古墳時代）・掘立 柱建物跡（中世）	
5年度	7次	千畳敷西側、同東側 及び北側帯曲輪	横堀跡・溝跡・門跡？ （中世）	虎口前面の堀跡から大量の石塔残欠出土。
6年度	8次	千畳敷記念碑跡、同 西側及び東側帯曲輪	虎口	
9年度	9次	千畳敷南側平場、同 西側帯曲輪	堀跡（古墳時代）・横堀 跡（中世）	千畳敷及び周辺地区の遺構表示開始。
10年度	10次	千畳敷北側帯曲輪	堀跡（古墳時代）・横堀 跡・固築状遺構・塼堀跡 （中世）	千畳敷北側横堀跡で小圓割（掘削単位）確認。掘削途中で中 止されたことが基土の堆積状況から判明。掘削途中の中世城 の堀跡が確認されたのは全圖初。宇土城跡で初めて鉄鍬玉出 土。
11年度	11次	千畳敷東側帯曲輪	横堀跡・塼堀（中世）	千畳敷北東側で大規模な塼堀跡を検出。『宇土城跡（西岡台）』 Ⅲ刊行
12年度	12次	千畳敷東側、千畳敷 東側帯曲輪	塼堀跡・虎口・門跡（中 世）	千畳敷の切通し虎口の路面は、地山掘削面をそのまま路面と するⅠ期と盛土整地上面とするⅡ期の2時期あることが判明。 Ⅱ期に伴う門跡を確認。『宇土城跡（西岡台）』Ⅳ刊行
13年度	13次	三城南側平場	溝跡（近世以降？）	史跡指定地に隣接する個人住宅建設に伴う発掘調査。
	14次	千畳敷北東側、同南 東側帯曲輪	築跡・方形張り出し（古墳 時代）、横堀跡（中世）	虎口前面の堀から多量の石塔残欠出土。これを意図的に地山 土を多量に含んだ土砂で虎口周辺の堀を埋めていることが判 明。7・12次調査の成果をあわせ、虎口周辺で行われた城破 りと考えられる。石塔を用いた城破りは九州では初めて確認。 また、1次調査で確認された千畳敷南西側の張り出しと同規模・ 同形態の張り出しを同南東側で確認。『宇土城跡（西岡台）』Ⅴ 刊行
14年度	15次	千畳敷北東側、同南 側帯曲輪	築跡（古墳時代）・塼堀 跡（中世）	古墳時代の首長居館の規模をほぼ確定。千畳敷北東側の塼堀 跡が丘陵部まで延びる可能性高まる。『宇土城跡（西岡台）』 Ⅵ刊行
15年度	16次	千畳敷北側、同南東 側、南西側帯曲輪	塼堀跡・横堀跡（中世）	10次調査で検出した塼堀跡は、千畳敷北側に向かって延びる ことが判明。同北東側の塼堀の規模・深さをトレンチ調査で 確認。『宇土城跡（西岡台）』Ⅶ刊行
16年度	17次	千畳敷北西側帯曲輪	塼堀跡	千畳敷北西側で大規模な塼堀跡を検出。『宇土城跡（西岡台）』 Ⅷ刊行
17年度	18次	千畳敷南側平場、同 東側帯曲輪	横堀跡・塼堀跡	千畳敷東側で塼堀跡を検出。また、千畳敷南側平場で道とし て利用されていた経路を発掘し、SD02を検出。
18年度	19次	三城南側帯曲輪、同 南東側帯曲輪	道路跡・溝跡（中世）	三城南東側で側溝を伴う道路跡、同東側平場で上段からの曲 輪から続く溝跡SD07を検出。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境と歴史的環境

(1) 地理的環境 (図1)

熊本県宇土市は、熊本県の中央沿岸部から西側に突出した宇土半島北側から同基部に位置し、東西24.8km、南北約7.6kmで面積は約74.19km²である。宇土半島は北側に有明海、南側に不知火海（八代海）と面し、先端部に天草諸島が連なる。山地群は木原山や主峰の大岳（477.6m）を中心とする大岳火山系山地と三角岳火山系山地に分けられ、基盤となる地質は、安山岩類や凝灰角礫岩類などの大岳火山岩類である。半島に占める平野部の割合は比較的小さい。

宇土市の北側には熊本県三大河川の一つである緑川が東西に貫流しており、その南側には緑川の支流である浜戸川が東西に流れている。流域周辺は両河川によって形成された沖積平野が広がっており、北に熊本平野、南に八代平野をのぞみ、古代から現在にいたるまで交通の要衝である。

宇土城跡は、熊本県の中央部を貫流する緑川によって形成された沖積平野西側、通称「西岡台（にしおかだい）」と呼ばれる標高約39m、東西約750m、南北約400mの独立丘陵に位置する。本丘陵及び周辺には、後述するように縄文時代から歴史時代までの数多くの遺跡が点在している。

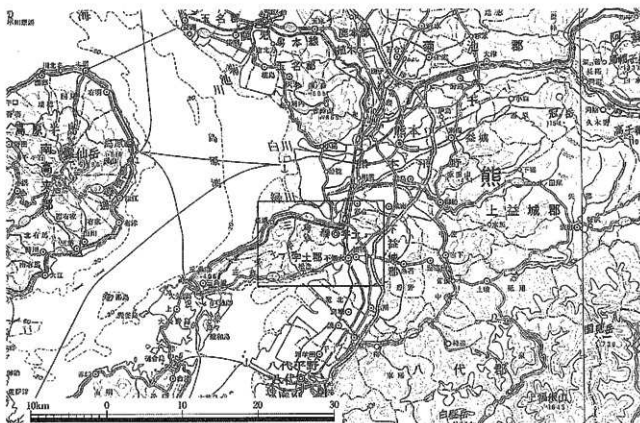
(2) 歴史的環境 (図1・2)

宇土城跡（1）周辺は、縄文時代から歴史時代までの数多くの遺跡が残されている。宇土城跡周辺の主な縄文時代の貝塚・遺跡として、石ノ瀬遺跡（2）、轟貝塚（3）、西岡台貝塚（4）、馬場遺跡（5）、北園遺跡（6）がある。

石ノ瀬遺跡では、道路建設に伴う発掘調査で縄文時代早期の押型土器（早水台式）が出土しており（高木・木下ほか2001）、近くに集落の存在が想定されている（古森2002）。轟貝塚は縄文早期末から前期の礫式土器の標式遺跡として著名である。大正から平成までの計8次におよぶ発掘調査によって縄文時代から中世にかけての土器・陶磁器、人骨、貝製品、石器、漁具、骨角器など多種多様な遺物が出土している。轟貝塚の東約60mの距離にある西岡台貝塚は、西岡台の西側裾部に位置している。貝層は2つに大別され、下層が轟・曾畑式土器などの前期の土器を主体とし、上層は出水式や北久根山式などの後期前半の土器を主体とする。1983・1984（昭和58・59）年の発掘調査で、ドングリなどの堅果類の貯蔵穴が5基検出された（木下・高木ほか1985）。馬場遺跡からは曾畑式土器が出土しており、北園遺跡は縄文時代から中世の包蔵地である。また、時期は明確ではないものの野鶴貝塚（7）や樺原貝塚（8）がある。

縄文時代の遺跡として、中期後半の黒髪式の甕形土器が出土した北平遺跡（9）、後期の集落とみられる下松山遺跡（10）がある。また、城山遺跡（11）は、前期から後期まで継続する拠点集落の可能性が高く、前期の環濠や中期の甕棺墓が発見されており、終末期の土器群が多量に出土している（富樫卯三郎ほか1982、高木・木下1985）。

古墳時代になると、前期に巨大な首長居館が造営された西岡台遺跡（1）があり、城山遺跡には本首長居館と同時期に一般成員の集落が形成されていたとみられる。また、首長居館と対応するように、熊本県最古の前方後円墳で船載三角縁神獸鏡が出土した城ノ越古墳（12）や追ノ上古墳（13）、スリバチ山古墳（14）、天神山古墳（15）など前期の前方後円墳が相次いで築造された。これらの前方後円墳は、



宇土市管内図5万分の1地形図（承認番号：平6大規第07号）を引用

- 1 宇土城跡（西岡台） 2 田平城跡 3 権后城跡 4 大岳城跡 5 白山 6 城ノ巻（陣跡） 7 宇土城跡（城山） 8 石ノ瀬城跡 9 高城跡 10 木原城跡 11 阿高城跡 12 壘福城跡 13 竹崎城跡 14 花園山城跡

図1 宇土城跡（西岡台）周辺の主な中・近世城跡（上図：1/500,000、下図：1/100,000）

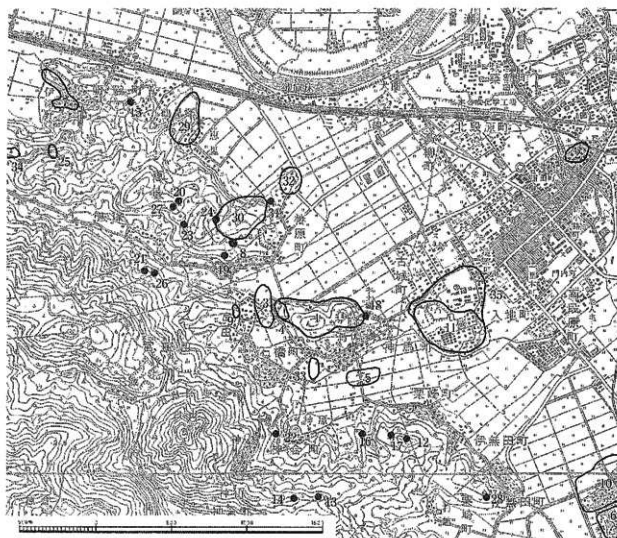


図2 宇土城跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)

西九州を代表する前期の首長墓系譜であり、当時、宇土半島基部が肥後地域の政治的中心地であったと考えられる。しかし、中期以降、前期以来の首長墓系譜は断絶し、前方後円墳は築造されなくなる。前方後円墳以外では、前期の円墳とみられる神倉古墳(16)や猫ノ城古墳(17)、西岡台箱式石棺(18)、中期の所産とみられる椿原石蓋土塋墓(19)がある。

後期から終末期になると横穴式石室を主体部とする東畑古墳(20)、仮又古墳(21)、山王平古墳(22)、金嶽山古墳(23)などの円墳や、県下で唯一の終末期の方墳である椿原古墳(24)などが築造された。多量の須恵器が出土した神ノ木山古墳群(25)や仮又2号墳(26)、東畑2号墳(27)も後期に属するとみられる。その他、前期の築造と推測される久保1・2号墳(28)があり、恵里遺跡(29)や椿原遺跡(30)は古墳時代の包蔵地である。

古代には西岡台遺跡や城山遺跡で須恵器や土師器が出土しており、前者では故意に破碎された土馬が出土している。中世になると宇土氏・名和氏が居城した宇土城跡(西岡台)が築城された。主郭(千畳敷)やその西側に位置する曲輪(三城)の発掘調査で、掘立柱建物跡や横堀跡、門跡などが検出され、大量の土師質土器や瓦質土器、青磁・白磁・染付などの貿易陶磁器が出土した(平山・高木ほか1977)。

椿原遺跡では方形居館の溝とみられる箱堀が検出されており、本遺跡に隣接する名和家菩提寺の曹洞宗宗福寺跡(31)には、名和武顕や同行興の位牌、同行直の墓石が残されており、眼下の椿原宇船津周

辺には中世の港湾施設である宇土津(32)が存在したとみられている。また、陳の前遺跡(33)や伊津野遺跡(34)でも中世の土器・陶磁器が出土している。

近世になるとキリシタン大名小西行長によって宇土城跡(城山)(35)が築城されたが、関ヶ原の戦いで敗れて処刑された後、肥後一円を支配した加藤清正によって改修された。本丸や堀跡の発掘調査で、城破りに伴うとみられる故意に破壊された石垣や門跡などを検出し、大量の瓦や貿易陶磁器が出土した(木下1981・1982、高木・木下1985)。

第2節 宇土城跡に関する歴史

宇土城跡は中世宇土に拠点を置いた在地領主の宇土氏と名和氏の居城である。「三宮社記録」(『増補訂正肥後国誌』下巻)によれば、永承3年(1048)に築城され、以後、菊池氏の一族が相次いで宇土城に在るとの伝承があるが、それを証明する同時代の文献や考古学的根拠は残されていない。一方、廃絶時期は小西行長が天正16年(1588)に宇土城主となり、翌年に近世宇土城(宇土城跡城山)の工事を着手した天正17年(1589)から関ヶ原の戦いで敗死した慶長5年(1600)の間と推察される。

宇土氏は宇土荘の荘官の地位にあった菊池氏一族と伝えられる在地武家領主であり、宇土高俊が文献上での初見である。正平3年(1348)、征西將軍懐良親王を宇土津に迎え入れており、南朝方として活動した。以後、宇土氏については引き続き本拠を維持したとみられるが、文龜3年(1503)、宇土為光が守護職をわかって守護菊池能運と争い失敗、滅亡した。

名和氏は代々伯耆国長田邑(鳥取県)を領した有力武家である。名和長年の孫頼興は正平13年(延文3年、1358)、一族を挙げて伯父義高が建武の恩賞として得た肥後国八代庄に移り、南朝方として活動

表2 宇土城跡における名和家当主と歴史的事象

当主 (家督相続時期)	歴史的事象
名和 顯忠 (1504-1516)	文龜4年(1504)宇土城跡に入る。 永正8年(1511)相良長母、豊福城跡で宇土の兵・豊福の守兵と久具川を隔てて防ぐ。
名和 重年 (1516-1517?)	※重年は家督継承疑問
名和 武頼 (1517-1546)	大永7年(1527)相良氏、豊福城を退出し、家臣の皆吉伊豆守が豊福城に入城。 天文4年(1535)相良氏との和解直後、豊福・大野の合戦に名和氏の兵数百人討ち死し、豊福城落城。皆吉伊豆守は宇土に退散し、相良氏、豊福城に入城。 天文5年(1536)相良・名和両家の婚儀執り行われる。 天文7年(1537)宇土城焼ける。 天文11年(1542)宇土城再び焼け、城下段原も頭火にあった。
名和 行興 (1546-1562)	天文18年(1549)名和行興、木原大蔵宮椽門を建築、領内長浜に天満宮三社、神山に白山権現を建立。 天文19年(1550)豊福城代皆吉武真が、宇土城を攻め、行興敗走し、武真宇土城に入るが、その後退去し、行興は宇土城に帰る。 天文20年(1551)大友義綱、肥後に侵攻、竹迫城・隈本城を降し、宇土城を攻める。 天文22年(1553)名和氏、宇土氏を称す。
名和 行憲 (1562-1564)	永祿7年(1564)行憲9歳で死亡。
名和 行直 (1564-1571)	永祿8年(1565)相良氏、豊福城を攻める。
名和 頼孝 (1571-1587)	天正7年(1579)川尻を領する。 天正14年(1586)頼孝、筑前岩屋城攻めに参戦。 天正15年(1587)豊臣秀吉、九州平定のため大阪城を出発。頼孝、宇土城を開城し退去。

した。以後、八代を中心として南北に勢力を伸張したが、文亀4年(1504)、名和顯忠は居城の古籠城(八代市)を菊池氏・相良氏によって追われ木原城(下益城郡富合町)に一時的移るが、その後、宇土氏滅亡後の宇土城に入った。

以後、名和氏は木原城のほか田平城(宇土市)・阿高城(下益城郡城南町)・豊福城(宇城市、旧下益城郡松橋町)・矢崎城(同、旧宇土郡三角町)など陸上・海上交通の要衝に支城を配した(図1)。名和氏が宇土を拠点としてからも相良氏とは争いが絶えず、豊福城をめぐる幾度となく争ったことが相良氏八代支配時代の日記風記録『八代日記』から知ることができる。その大きな要因として、豊福城が八代と宇土のほぼ中間地点に立地すること、甲佐から宇土半島へと通じる街道と八代から隈本へと通じる街道との交錯地という交通の要衝に位置したことがあげられる。

また、『八代日記』によれば、天文19年(1550)に名和行興と豊福城代皆吉武真との内紛や、永祿5年(1562)の行興死去後、その弟で豊福城代行直と幼主行憲の後見役の内河氏との対立があり、行直は宇土城に討入って名和氏継承を果たし、内河氏は堅志田城に逃れたことが記されている。また、永祿9年(1566)には行直と老者の一人賀(加)悦氏との間に争いが起こり、「宇土取乱」れたとの記述がある。

天正15年(1587)、豊臣秀吉の九州平定によって名和顯孝は宇土城を開城した。その後、顯孝は筑前国内に替地入替となって小早川氏の家臣となり、江戸時代になると顯孝の子孫は柳河立花藩士として存続した。同16年(1588)には、人吉・球磨を除く肥後半部を治めた小西行長が宇土城に入ったが、翌年には新城の築城と城下の整備に着手した。

第3節 縄張りや発掘調査について(図3)

宇土城跡の曲輪は、西岡台の東西に並んだ2つの高位部に所在する。東側が「千疊敷」と呼称される主郭であり、標高約37m、東西約50m、南北約65mの削平地である。発掘調査によって多数の掘立柱建物跡や構列跡・門跡・虎口跡・横堀跡・塹堀跡を確認した(平山・高木ほか1977、藤本2000・2001・2002・2003・2004・2005)。西側が「三城」と呼称されるⅡ郭にあたる曲輪であり、標高約39m、東西約80m、南北約35mの削平地で、掘立柱建物跡や門跡・道跡・溝跡を検出した(平山・高木ほか1977、木下・元松1988)。これら曲輪の周囲は堀を配したり、削り出しによる急峻な崖状地形を形成し、これと帯曲輪を連続して配することによって曲輪を防御している。

これらの遺構や包含層から、大量の土師質土器や撞鉢・火鉢などの瓦質土器、備前焼や瀬戸・美濃焼などの国産陶器、中国製の白磁・青磁・染付や華南三彩、タイ産や朝鮮半島製の陶磁器など、主に13～16世紀代の遺物が出土した。

三城の西側約50mには地元で「カラホリ」と呼ばれている長さ約310m、幅約10～15m、深さ約5～7mの巨大な横堀跡が南北方向に配置され、その西側に並行して高さ2m程の土塁がある。この横堀跡は堀底に側溝を有し、南端付近から門礎とみられる巨石が出土していること、中世以来の古道である三角道と交わることから平時には堀底道として利用されていたと想定できる。丘陵南側は比較的幅広い削平地が階段状に連続する地形をなし、大手と伝えられる地点もある。おそらくこの付近に領主や家臣団、一般民衆が居住する麓集落が形成されていたと考えられる。

中世宇土城跡の城下の様相に関しては、文献資料が皆無に等しく、発掘調査も行われていないため、その実態についてはほとんどわかっていないのが現状である。しかし、「藤ノ前」や「馬場」などの城

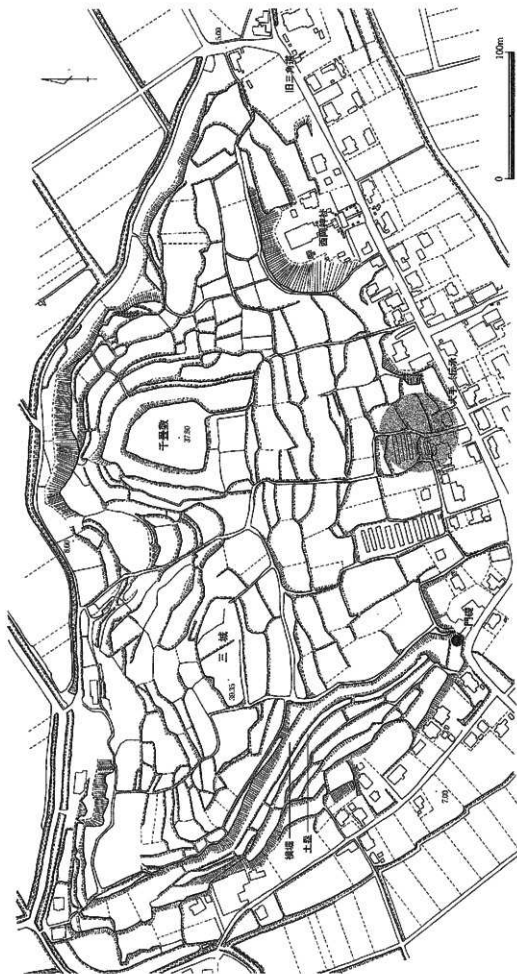


図3 宇土城跡縄張り図 (1/3,000)

に関連するとみられる地名、伝大手や中世以来の「三角道」の存在から、前述した西岡台南側の削平地には、領主や家臣団、一般民衆が居住する集落が形成されていた可能性が高い。

明治22年の中世宇土城跡周辺の地籍図と昭和49年測量の縄張り図を比較すると、多少地形の変化が見受けられるが大規模な改変は認められない。ここで注目されるのが、カラホリの配置状況である。現在のカラホリは道で途切れているようにみえるが、現地踏査の結果や昭和49年測量図から判断すれば、現在より南へ約100m程度延びていたと推定され、カラホリ東側の防御を考慮しての造作とみられる。

カラホリが三城付近だけでなく、西岡台南麓まで延びていることは注意すべきであり、厳密な意味ではあてはまらないものの、いわゆる「惣構え」的な配置状況を呈するといえる。カラホリの東側には陳の前遺跡（弥生時代～中世）があり、宇土城跡で出土している土器・陶磁器とほぼ同時期の遺物が表採されている。城下に関連した遺跡と推定される。おそらくカラホリ東側の神馬町字西岡、同字日平、宇馬場下、石橋町字陳ノ前周辺に上述の領主や家臣団の居住域が形成されていたとみてよいだろう。

中世宇土城跡の曲輪は千疊敷と三城がほぼ同じ標高、広さであり、曲輪間の階層性は顕著ではない。千疊敷には横堀と塀堀が配置され、三城にはそれらの痕跡がないことで千疊敷が主郭と判別できるが、いずれにしても求心性の弱い並立的な構造である。

千疊敷や三城の発掘調査で検出された建物跡は、全て掘立柱建物跡であり、礎石建物跡は確認されていない。また、2間×数間程度の建物が多数を占めており、小規模かつ等質的で瓦も出土していない。このような状況から領主クラスの館が曲輪内に立地したとは考え難く、名和氏の居館は西岡台南側の家臣団などの屋敷群と隣接して存在した可能性が高い。

引用・参考文献

- 井上 正 1959「南北朝・室町・戦国時代の宇土」『宇土市史』宇土市
- 平山修一・高木恭二ほか 1977『宇土城跡（西岡台）』本文編 宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集 宇土市教育委員会
- 阿蘇品保夫 1977「肥後における名和氏と宇土氏」同上
- 木下洋介 1981『宇土城跡（城山）』—宇土城跡城山調査概報Ⅰ— 宇土市埋蔵文化財調査報告書第4集 宇土市教育委員会
- 木下洋介 1982『宇土城跡（城山）』—宇土城跡城山調査概報Ⅱ— 宇土市埋蔵文化財調査報告書第7集 同上
- 宮藤三郎ほか 1982『宇土城跡三ノ丸跡』—弥生時代前期のV字溝と近世城郭遺構の調査— 宇土城跡三ノ丸跡発掘調査団
- 高木恭二・木下洋介 1985『宇土城跡（城山）』宇土市埋蔵文化財調査報告書第10集 宇土市教育委員会
- 木下洋介・高木恭二ほか 1985『西岡台貝塚』宇土市埋蔵文化財調査報告書第12集 同上
- 木下洋介・元松茂樹 1988『宇土城跡（西岡台）』Ⅱ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第18集 同上
- 藤本貴仁 2000『宇土城跡（西岡台）』Ⅲ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第21集 同上
- 高木恭二・木下洋介ほか 2001『石ノ瀬遺跡』『新宇土市史基礎資料』第9集 宇土市教育委員会
- 藤本貴仁 2001『宇土城跡（西岡台）』Ⅳ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第22集 同上
- 藤本貴仁 2002『宇土城跡（西岡台）』Ⅴ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第23集 同上
- 古森政次 2002『石ノ瀬遺跡』『新宇土市史』資料編第2巻 宇土市
- 藤本貴仁 2003『宇土城跡（西岡台）』Ⅵ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第24集 宇土市教育委員会
- 藤本貴仁 2004『宇土城跡（西岡台）』Ⅶ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第25集 同上
- 藤本貴仁 2005『宇土城跡（西岡台）』Ⅷ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第26集 同上

第3章 第1次発掘調査

第1節 調査の概要 (図4)

第1次発掘調査は宇土市立鶴城中学校校舎改築移転計画に伴い、昭和49年度から50年度にかけて宇土市教育委員会が実施した。先述のとおり、当初は中世城郭に伴う遺構の解明を目的とした発掘調査であったが、調査の過程で古墳時代の首長居館に伴う断面「Vの字形」の大きな壕跡(SD01)を確認し、壕内より大量の古墳時代前期を主体とする土師器や同中期の甗輪、古墳時代の仿製鏡片などが出土したことから、古墳時代における宇土半島基部地域の歴史を明らかにするうえで重要な成果が得られた(平山・高木ほか1977、高木・武末2000)。

千疊敷周辺においては、曲輪を防御するために掘削された横堀跡SD02と、その外側約10mにいずれも小規模な横堀跡SD04～SD06を検出し、これらが配されて千疊敷の防御を強固にしていることが判明した。SD01とはSD04、SD05の一部、SD02の千疊敷西側部分で重複していた。また、周辺から掘立柱建物跡などの建物遺構を確認しており、曲輪面に関しては土地未買収のため調査できなかったが、平成2～5年度にかけて実施した第4～7次調査でおびただしい数の柱穴を検出しており、これらは重複するものが少なくないことから建替えが繰り返され、千疊敷においては比較的長期間かつ恒常的に掘立柱建物が存在したとみられる。なお、礎石建物跡は確認されていない。

一方、千疊敷の西側に位置する三城やその周辺では、掘立柱建物跡SB03～SB07や溝跡SD07・SD08、門跡SB08、橋跡SA01、導水状施設SD09などを検出したが、千疊敷のような曲輪全体を圍繞するような横堀は確認されておらず、存在しなかった可能性が極めて高い。三城の方が千疊敷より標高が2m程高いものの、防御性の観点からみれば、千疊敷が主郭とみて間違いないだろう。

これらの中世期の遺構から、多量の土師質土器や瓦質土器、備前焼などの国産陶磁器、中国製の白磁、青磁、染付などの貿易陶磁器が出土した。

第1次調査ではB・C・F・J・H・I地区及び西岡台西麓の森貝塚西岡台地区(現西岡台貝塚)の計7

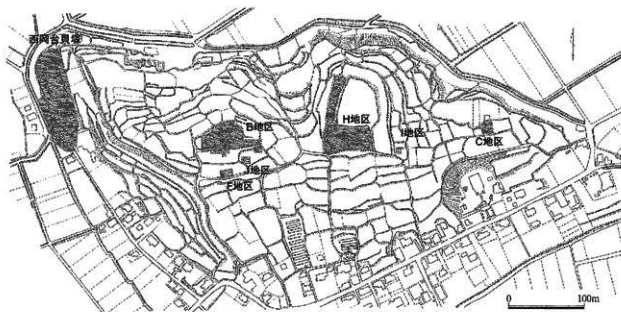


図4 1次調査区位置図 (1/5,000)

地区の調査区を設定した。その概要を以下に記す。

B地区（図5）

本地区では三城のほぼ全域にわたって発掘調査を実施した。三城の標高は39.1mで、千畳敷より約2m高く眺望に優れている。曲輪は東西約80m、南北約35mの規模を有し、発掘調査で掘立柱建物跡に伴う多数の柱穴を検出したが、これらは曲輪中央部に密集しており、縁辺部では希薄である。礎石を用いた建物跡はみられず、礎石を抜いたと思われるような痕跡も確認できなかった。このことから、三城においては全期間にわたって掘立柱建物が用いられたと推測される。

1次調査で報告された掘立柱建物跡はSB03～SB07の5棟である。それ以外にも数棟の建物が存在したとみられるが、柱の配置状況からみて規模の大きな建物跡が存在した可能性は低い。

それ以外の遺構として、三城南側に位置し、東西方向に延びるSD07やSD08などの溝跡や、同東側の門跡SB08、里道下の発掘調査で検出した中世の道路跡SX01、曲輪導水状遺構SD09や本遺構に付随する水溜状遺構SK04などを確認した。

C地区

千畳敷から東へ約140m離れた平場に設定した調査区であり、南側約70mに西岡神社が鎮座する。調査区周辺は、千畳敷方向から東側に延びる尾根状丘陵を削平して平場や切岸を造作している。本調査区の標高は約21mで、北側には東西に幅広い帯曲輪が形成されている。本地区では掘立柱建物跡SB14～SB16の計3棟を確認し、ピットの様相からこの他にも建物跡が存在したようである。

上述した北側の帯曲輪におけるトレンチ調査で、多数のピットが重複していることが確認されたことから、本帯曲輪にも長期間にわたってかなりの数の掘立柱建物跡が存在したものと想定される。さらに、本帯曲輪の北端付近では、土師質土器（カワラケ）が大量に出土したSX02と古墳時代の箱式石棺を検出した。

F地区

B地区の南約30mの平場に位置する帯曲輪にF地区を設定した。本帯曲輪は東西約60m、南北約20mの規模を有し、発掘調査で数多くのピット群を検出した。このうち少なくとも3棟の掘立柱建物跡（SB11～SB13）の存在が確認された。

H地区（図6・7）

千畳敷から一段下がった標高約32～34mの平場に設定した調査区である。千畳敷は南北約65m、東西約50mの削平地で、周囲は急峻な切岸で囲まれており、さらにその外側に横堀跡SD02を配するなど、曲輪の防御に関して相当な配慮がなされている。千畳敷から一段下がった部分は、テラス状の平坦地であるが、東・北側部分で約15m、西側部分では約10mの幅しかない。これに対し、南側は幅約30mとかなりの幅を有しており、外堀の機能を果たしたとみられる横堀跡SD04～SD06や、掘立柱建物跡SB01、SB02など、城郭に伴う遺構を検出した。

H地区はH-1～3区、H-T1～T3、H-T3N、H-T4～T8に分けられ、本地区のほぼ全域の様相が明らかにされた。

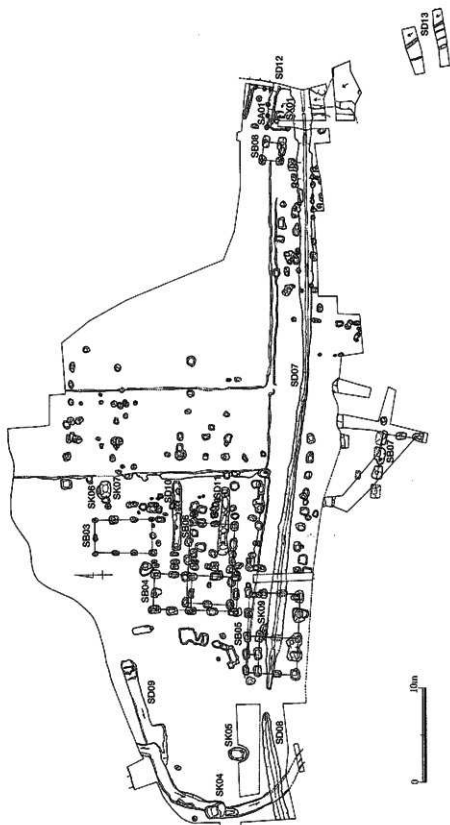


図5 三城周辺遺構配置図 (1/400)

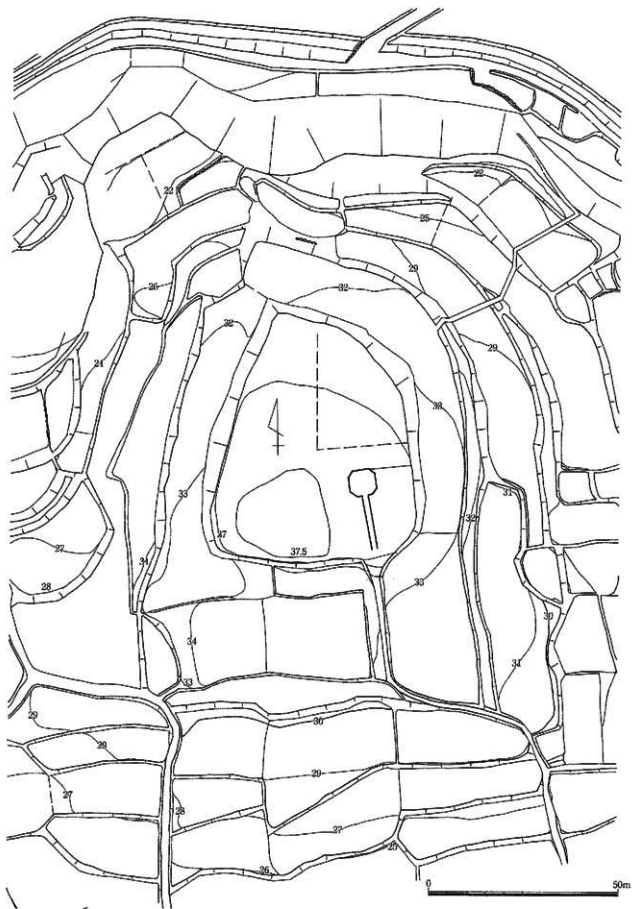


图6 千量敷周辺旧地形图 (1/1,000)

古墳時代の首長居館に伴う壕跡SD01と千疊敷を囲繞する横堀跡SD02の存在が初めて確認されたのは、H地区のH-T1及びH-2区である。これらの調査区で、まず千疊敷を囲繞する断面逆台形のSD02を検出し、本遺構の南側約9mの位置で古墳時代の首長居館に伴う断面V字形のSD01を検出した。本壕跡は出土遺物より古代までかなりの部分が埋まっていることが明らかであり、SD01の埋土上面で数多くの中世期のピットを検出した。つまり、この溝が完全に埋まった頃に、横堀跡や掘立柱建物跡などの中世の城郭遺構群が形成されたとみられる。

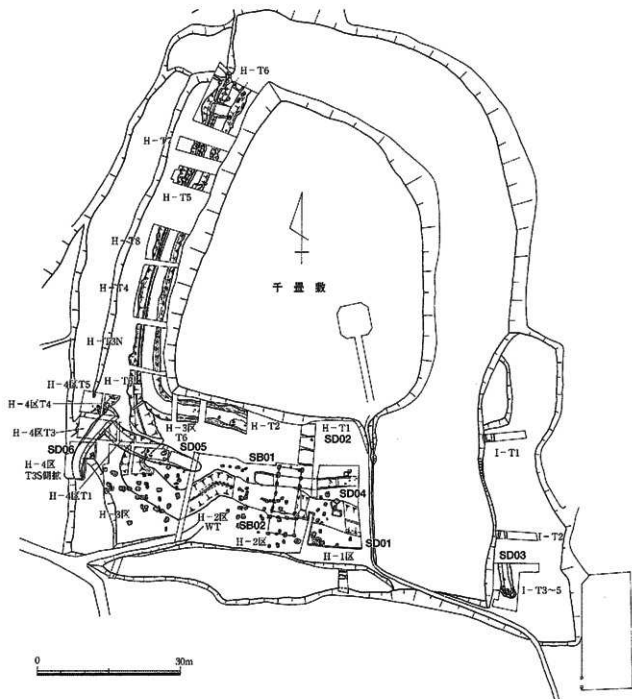


図7 千疊敷周辺1次調査区(H・I地区)遺構配置図(1/800)

I 地区

千疊敷の南東約40mに設定した調査区である。幅約20mの帯曲輪が南北方向に位置し、その南端に近い地点から北へ約30mにわたってトレンチ調査を実施した。その結果、帯曲輪にはほぼ平行するように横堀跡 SD03を確認するとともに、中世の所産とみられる土坑墓 SK01とSK02を検出した。これらの遺構は重複関係にあり、SK01とSK02はSD03の掘削によって削平されていた。

J 地区

三城東南端で検出した門跡 SB08や柵列跡 SA01の約10m南側に位置する平場で、東西約30m、南北15mの規模を有する。三城で検出したピット群にくらべて小さめのものを検出しており、これらは建物規模を反映している可能性が高い。独立柱建物跡 SB09とSB10の2棟を確認した。

西岡台貝塚

西岡台の西麓には、縄文時代前期～後期の貝塚である西岡台貝塚が位置する。1次調査における本貝塚の調査は、貝塚の性格と実体を把握するために露出している貝層断面より4層のブロックサンプリングを実施するとともに、採集遺物の実測作業を行った。

貝層は標高約5～11mの範囲に分布しており、当該地の層序は5層に分けられる。第1層（耕作土層）、第2層（純貝層）、第3層（混貝土層）、第4層（純貝層）、第5層（混貝土層）の順で堆積しており、貝殻の分布は約5000㎡と広範囲にわたる。出土遺物の多くは土器であり、他に石器、貝製品、骨角器などが採集された。

上記の成果は、1977年（昭和52）に刊行された発掘調査報告書（平山・高木ほか1977）で公表されたが、発掘調査から報告書作成までの期間が短かったため、調査成果の多くを割愛せざるをえなかった。その後、宇土市史編纂事業により未発表だったSD01出土の古墳時代の土師器や埴輪などの資料が公表され、武末純一氏により3期の土師器編年案が提示された（高木・武末2000）。また、弥生時代や古代の遺物も同事業で報告されたが（金田2002、網田2002）、城郭が存在した中世期の遺物については未報告のままであった。

本稿では、これらの理由から未発表の中世期の遺物を中心に報告するが、1980年代以降、貿易陶磁器研究が著しい進展をみせていることから、既発表の陶磁器の一部についても重要な遺物については再実測し、産地や年代について記述した。また、遺構については、掲載遺物との関連があるものを主に記述及び実測図を掲載しており、それ以外の遺構や遺物の詳細については上記報告書を参照されたい。

第2節 検出遺構

SD01（図7～10・12～14、図版2・3）

古墳時代の首長居館に伴う断面「V」の字形の壕跡である。1次調査の結果、8～9世紀頃に大部分が埋没したことが出土遺物によって明らかになっている。1次調査以後の調査で配置状況がかなり明らかになっているが（藤本2000、藤本2003）、本稿では千疊敷南側から西側にかけての1次調査範囲のみを記述する。

SD01は千疊敷南西側から西側でSD02と重複しており、SD02の掘削に伴い広範囲にわたって消失して

いる。検出規模は長さ約135m、幅約5.2~6.4m、底幅約0.1~0.2m、深さ約1.8~3.7mである。壁面の傾斜角度は内側（千畳敷側）で約45°、外側約65°と外側の方が急峻であるが、これは防御性を高める意図があったものと推察される。千畳敷とSD01底面の比高差は約6mである。

南西コーナー部には幅約20m、長さ約11mの方形の張り出し部を有する。この張り出し部は、平成13年度に実施した第14次調査で千畳敷南東側でも確認され、千畳敷南側に2箇所存在することが明らかになった（藤本2002）。

千畳敷南側付近ではSD02と約15mの距離をおいてその外側に位置するが、西側部分ではSD02により東側部分が削平され、底面部分と西壁が残存するにすぎない。

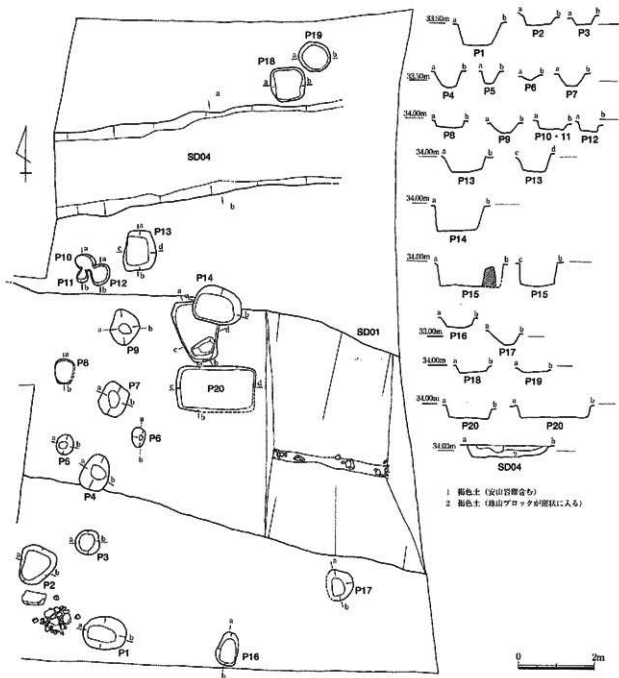


図8 H-1区遺構配置図 (1/100)

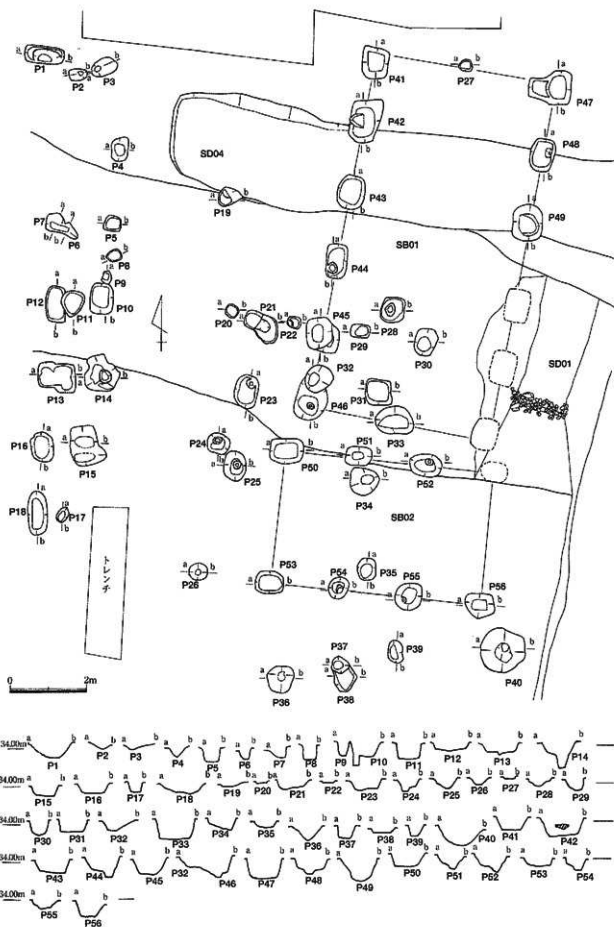


図9 H-2区遺構配置図(1/100)

本遺構からは古墳時代前期を中心とする土師器が多量に出土した。これらの大半は、溝底直上か土が数cm堆積した状態で一括して出土している。また、SD01東側の埴土上層から古墳時代の仿製鏡片、SD02西側埴土より円筒埴輪が出土していることから、現状では全く痕跡が確認できないものの、首長居館の廃絶後、千疊敷に古墳が築造された可能性が極めて高い。その他、SD01の埴土上層から古代の須恵器などが出土していることから、この時期にはほぼ埋没したと考えられる。

SD02 (図7、11~14、図版1~3)

千疊敷を圍繞する断面逆台形の横溝跡である。1次調査は全体の1/2程度の調査であったが、配置状況から千疊敷全体を取り囲むことが既に指摘されていた。また、この時点では千疊敷にいたる土橋跡や木橋跡などの遺構は検出されなかったが、平成5年度の7次調査において千疊敷東側で虎口へと通じる土橋跡を検出した(藤本2001)。

1次調査における検出規模は長さ約104m、幅約3.2~5.7m、底幅約1.3~3.0m、深さ約1.2~2.5mで、千疊敷とSD02底面の比高差は約6m。壁面の傾斜角度は約40°~60°である。なお、SD02に付随

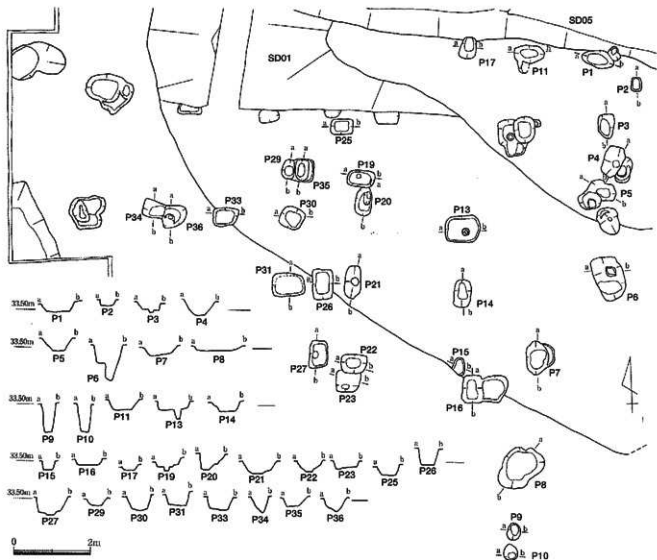


図10 H-3区遺構配置図(1/100)

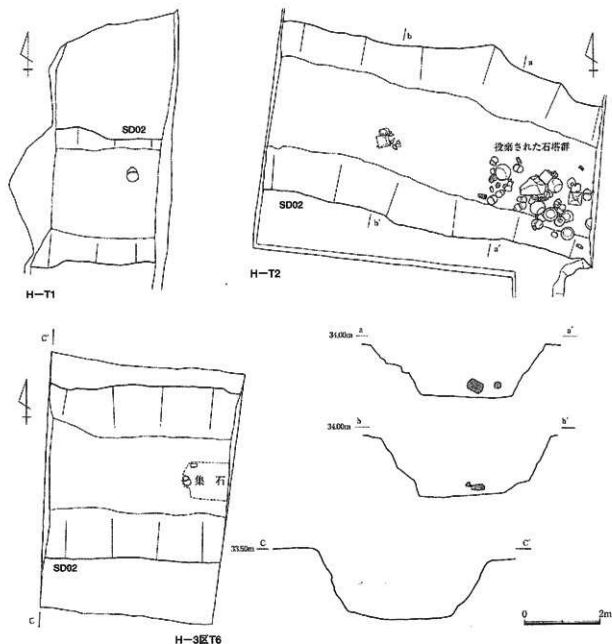


図11 H-T1、H-T2、H-3区T6遺構配置図(1/100)

する構列跡は確認されていない。

底面や壁面は丁寧に整形されており、南側から南西側コーナー部、西側の底面は平坦であるが、H-T6でみられるように千畳敷北西部の一部には低い段差がみられ様相が異なる。また、底面の標高は千畳敷南東側が最も高く、同南側、さらに千畳敷南西側のコーナー部を経て北側に向けて緩やかに下降している。比高差は約4mである。このような底面の傾斜は排水を考慮してのことか、もしくは千畳敷周辺の地形的な要因が大きかったのかということが問題となるが、これを考えるうえで参考となるのが千畳敷とSD02底面の比高差である。

最も標高が高い千畳敷南東側の底面と千畳敷との比高差は約4.5m、最も標高が低い千畳敷北西側の底面との比高差は約8mと後者の比高差がかなり大きいことがわかる。また、当地の基盤層は安山岩が風化した岩盤であり、あまり水を吸い込まない透水性が低い地質である。このような理由から、地形

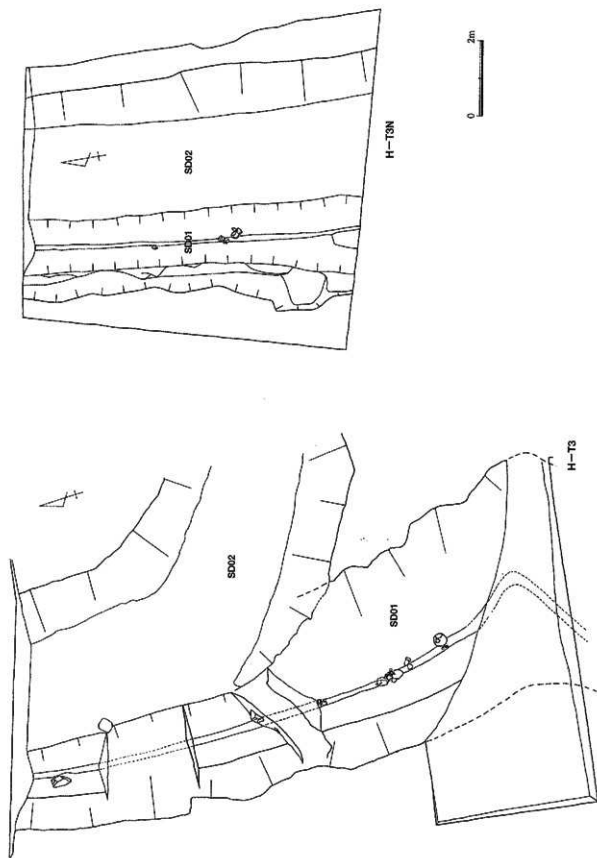


図12 H-T3、H-T3N遺構配置図(1/100)

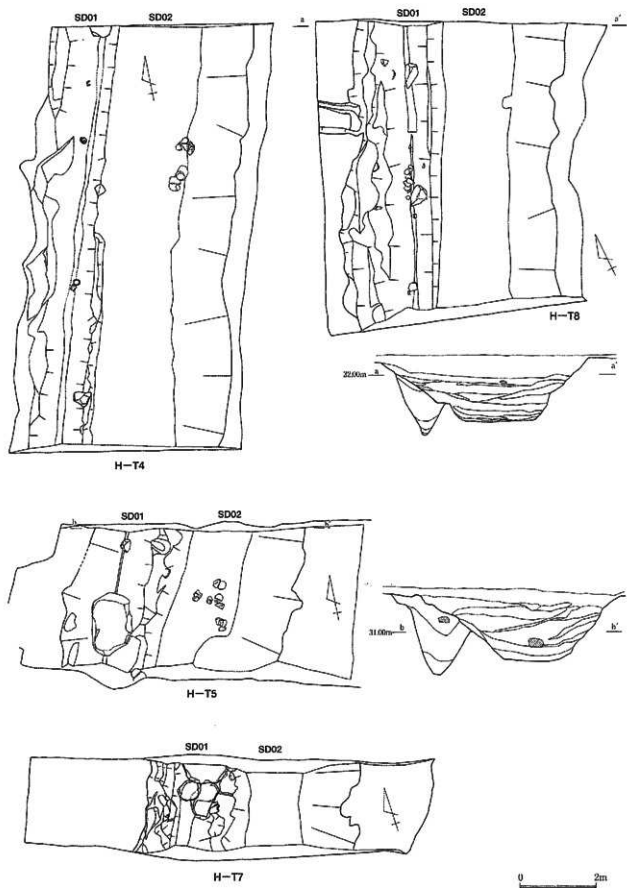


図13 H-T4、H-T5、H-T7、H-T8遺構配置図(1/100)

的な要因もさることながら、堀普請の段階から雨水排水を考慮し、このような傾斜をつけた施工方法が取られたのではなかろうか。

埋土の特色として、千疊敷西側において黒褐色土に灰及び炭化物を含む層を確認した。これは千疊敷側から流れ込むようにしてSD02の下層から中層にかけてレンズ状に堆積しており、土層の形成状況から判断して意図的に千疊敷側からSD02を埋めた土砂とみられる(図14)。このような灰や炭化物を含む層は、千疊敷東側に位置する虎口跡の埋土下層でも確認されており、最終段階の路面の直上に堆積している(藤本2001)。これらSD02と虎口跡の灰や炭化物を含む層の堆積が同時期であるとなれば、城を廃絶する段階に伴う可能性を示唆しているといえよう。

埋土より中世の土師質土器の皿や坏、瓦質土器の播鉢・火鉢・羽釜、備前焼の播鉢や火鉢、大甍、中国製の青磁・白磁・染付の皿や碗、陶器の大甍、五輪塔や宝篋印塔などの石塔残欠が出土した。特に上述の灰や炭化物を含む層より多くの遺物が出土しており、また、千疊敷南側では、多量の石塔群が集中的に投棄された状態で出土している。

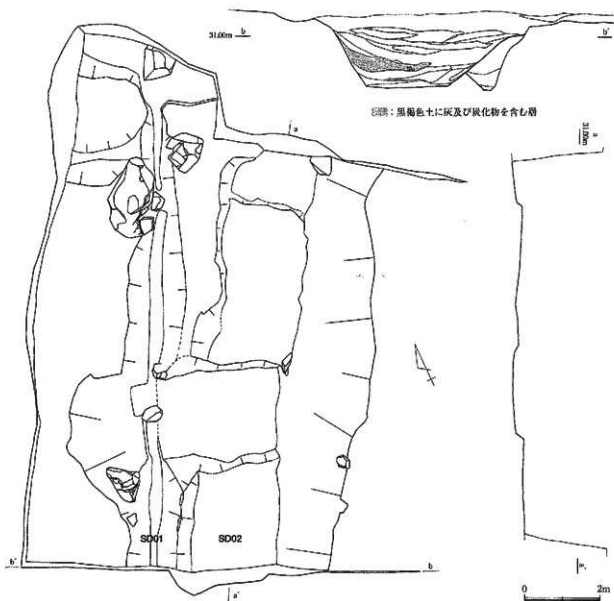


図14 H-T 6 遺構配置図(1/100)

SD03 (図7)

千疊敷南東側のI地区に位置し、ほぼ南北方向に延びる小規模な横堀跡である。検出規模は長さ約35m、幅約2.0~2.5m、壁面の傾斜角度は約75°とSD02とくらべてかなり急勾配である。SD03の西にはSD03と並行する高さ約2mの切岸があり、おそらく本切岸とSD03を組み合わせて千疊敷側への敵兵の侵入阻止を計ったとみられる。

また、本切岸には安山岩の野面積みの石垣が残っているが、ごく狭い範囲であるため城郭遺構に伴うものではなく後世の所産であろう。なお、7次調査において、本遺構は千疊敷東側付近、具体的には本遺構の南端から北へ約60m付近で東方向にほぼ直角に曲がり、丘陵下部に向かって延びることが確認された(藤本2001)。当該範囲に関しては、敵兵の横方向の進行を防ぐいわゆる「堅堀」としての機能を期待したものと想定される。

埋土より中世の遺物と、古墳時代の須恵器の破片が出土した。

SD04 (図7~9)

H-1・2区のSD02の南側約10m付近に位置する東西方向に配置された溝跡(横堀跡)である。本遺構の西端より約10mは土橋状を呈し、その西側にSD05が所在する。検出規模は長さ約20m、幅約2.0~2.4mを測るが、検出面からの深さは約0.3mと極めて浅く、大幅に削平された可能性がある。SD02とはほぼ一定の距離をおいて造作されていることから、SD02が千疊敷の内堀とすれば、本遺構や後述するSD05やSD06は外堀としての機能を果たしていたと考えてよいだろう。

SD04は掘立柱建物跡SB01と重複しており、遺構の前後関係はSD04→SB01の順である。また、埋土から遺物はほとんど出土していない。

SD05 (図7・10)

H-2・3区の千疊敷南側平場に東西方向に配される溝跡(横堀跡)である。検出規模は長さ約21m、幅約1.6~4.0mで、底面は西方向に下降し、途中で段差がついて急激に深くなる。SD01と重複し、SD01の埋土を掘り込んでいる。上述のとおり、東側に位置するSD04との間には約10mにわたって土橋状を呈するが、これはこの付近が西岡台南側斜面や岡南麓に存在したとみられる集落と千疊敷を結ぶルート上に位置していることから、通行用として掘り残されたと推測される。

また、本遺構はSD06と接するが、前後関係は確認されず、配置状況からみても同時期に并存していたと推定される。埋土より国産陶器や中国製の白磁、青磁などが出土した。

なお、本遺構の周辺には隅丸長方形や不定円形のピットが散在し、付近に掘立柱建物や構などの施設が存在した可能性が高い。

SD06 (図7)

千疊敷南側平場の西辺に南北方向に延びる溝跡(横堀跡)である。北端部でSD05と直交方向に接し、弧状を描きながら南側に配される。検出規模は約17m、幅約2.0~2.4m、深さ約1.0~1.5m、壁面の傾斜角度は約65°で、SD03と同様に壁面傾斜が急である。平成15年度に実施した16次調査で、南側の斜面まで延びることが判明した(藤本2004)。

本遺構やSD04、SD05は、規模や配置状況から判断して同時期に存在し、かつ単独で機能するもので

はなく、これらがセットとなって千畳敷南側を防衛する外堀としての機能をもっていたと推測される。

埴土より瀬戸・美濃産の天目茶碗や在地産の播鉢などの国産土器・陶磁器、龍泉窯系の青磁、北備付近で鹹水産の貝類が出土した。

SD07 (図5、図版4)

三城南側に東西に延びる溝跡(横堀跡)である。検出規模は長さ約63m、幅約0.5m～1.2m、深さ約0.3～1.1mで、東へ向って下降している。平成18年度実施の19次調査で三城東側の一段下がった平地においても本遺構が延びることが判明し、これをあわせた検出規模は長さ約84mにもおよぶ。曲輪面から下位の平地に雨水が流れるような勾配がつけられているが、その規模・形状から単なる排水用の溝跡とは考え難く、壁面の傾斜角度も急であるため、一定の防御性を兼ね備えた溝である可能性が高い。

本遺構と重複するピットが比較的多いが、SD07はこれらを削平しているため、三城の遺構群のなかでも比較的新しい時期のものと考えられる。埴土から中世の土師質土器や白磁、染付などが出土している。

SD08 (図5、図版4)

SD07と同じく三城南側に位置する溝跡(横堀跡)である。検出規模は長さ約12m、幅約0.6～1.4mで、SD07の西端から本遺構の間の2.4mは土橋状を呈する。昭和63年度に実施した2次調査で、本遺構はさらに西側に延び、地元で「カラホリ」と呼ばれる大規模な横堀跡の近くまで達し、その長さは60m余りであることが判明した(木下・元松1988)。配置状況や規模の類似から、SD07と並存していたと考えられる。導水状遺構SD09と重複しているが、埴土の前後関係からSD08の方が新しい。

SX01 (図5)

三城に通じる道路状遺構である。三城東側に位置しており、三城南側の平地から門跡SB08の前面までスロープ状に延びている。検出規模は長さ約16m、幅約1.5mで、SB08の正面部分は基盤層を掘り込み階段状に成型しており、安山岩の割石を敷いた痕跡があった。本遺構は調査時まで踏み分け道として使用されており、中世以来の道が現代まで踏襲されていたと考えられる。

SX02 (図15・16、図版5)

土師質土器(カワラケ)が大量に一括出土した遺構である。C地区で検出した掘立柱建物跡SB14～SB16が位置する平地から比高差3m程北側へ一段低くなっている帯曲輪で検出した。土坑などの掘り込みであった可能性が濃厚であるが、調査時には明らかにできていない。この土師質土器の出土した範囲は東西約60cm、南北約100cmで、深さ20cm程度の範囲に集中し、少量ではあるが貝殻(シオフキ)も出土している。

なお、本帯曲輪の一面における調査では、おびただしい数のピットが検出されており、当該地に数多くの建物遺構が存在するとみられる。

第3節 出土遺物

SD02 (図17～20、図版6～8)

1～26、33は土師質土器で、1～26は坏、33は火鉢である。

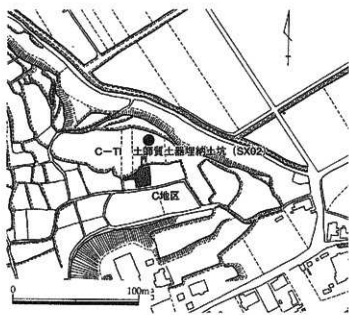


図15 SX02位置図 (1/3,000)



図16 SX02土師質土器出土状況 (1/20)

1～26は全て回転台で製作された土師質土器である。内面、外面とも回転ナデ調整であり、底部に糸切り痕が残り、ナデ消しなどの調整は施されていない。底部が磨耗して判別不能のものもあるが、これらの底部切離しも糸切りが施されたとみられる。法量の差はあるものの、調整技法からは大きな相違は見受けられない。口径の大小により3類に大別できる。

1～5は口径が6～7cm台の小型のもので、器高は1cm後半から2cm余りである。底部から斜め上方にほぼ直線に伸び、端部は丸くおさめる。2の口縁部はやや外反気味であり、3や4の見込み部分は中央付近にむけて盛り上がっている。6～24は口径が8～10cm台の中型のもので、器高は一部に2cm前後のものがあるものの、大半は2cm半ば～3cm前後である。小型の坯をひと回り大きくしたような形状を呈す。底部から斜め上方にほぼ直線に伸び、端部を丸くおさめるものが多いが、6・17のように口縁部がやや外反するものや、8・14のように底部付近から軽く外反しながら口縁部にかけてやや内湾気味になるものがある。25・26は口径が12～15cm台の大型のもので、器高も3cmを超える。25の口縁部は外側へ歪んでいる。26は口径が15cmを超えており皿といえるかもしれない。

33は深鉢型の火鉢であり、口縁端部から胴部にかけて3条の突帯を貼り付ける。口縁部とその直下の突帯の間には、花文のスタンプで施文する。

27～32は瓦質土器で、27～30は拵鉢、31・32は火鉢である。27は内面横ナデ後に播目を施す。外面は多くの指オサエの痕跡が残る。内面は使用により磨耗している。28は片口部分が残存する。27と同様に内面は播目を施す。内外面とも横ナデし、内面が磨耗している。28・29も同様の調整技法で成形している。31は浅鉢型の火鉢で口縁端部から底部付近にかけて等間隔に断面三角形の突帯を4条廻らせる。最上部とその直下の突帯の間に三つ巴状のスタンプがほぼ等間隔で施文される。32は深鉢型の火鉢で口縁端部から胴部にかけて断面三角形の突帯を3条廻らせる。最上部とその直下の突帯の間に短い斜線を組み合わせた文様をスタンプする。

34・35は焼締陶器でともに備前焼である。34は甕で口縁部から肩部の破片。口縁端部は玉縁状を呈し、横ナデを施す。真壁Ⅲ期に相当する。35は拵鉢で内面に播目があり、口縁部の断面は三角形を呈する。真壁Ⅳ期。

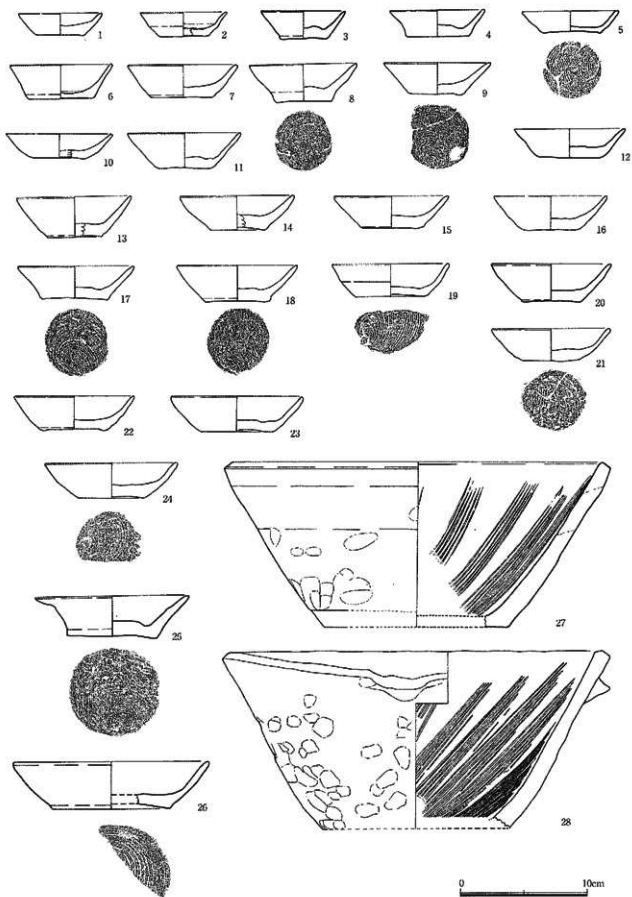


図17 SD02出土遺物 1 (1/3)

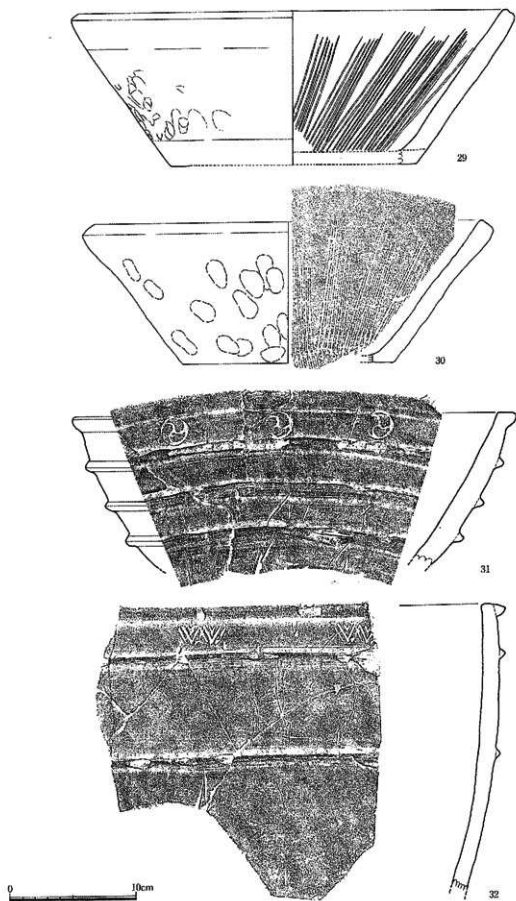


圖18 SD02出土遺物2 (1/3)

36~40は施釉陶器である。36は近世の瀬戸・美濃焼の天目茶碗で、口縁部がわずかに外反する。黒色(7.5YR1.7/1)を呈する釉が内面や腰部外面に掛けられる。37は近世陶器の土甌の類で、口縁部から胴部上位にかけて1/6程度が残存する。外面に黒色(5YR2/1)の釉薬を施すが、口縁部は灰白色(2.5Y8/1)を呈する。胴部に線刺による2条の沈線を施す。38は肥前系の皿で口縁部が内湾する。内・外面にオリブ黄色(5Y6/3)の釉が掛けられた後、見込部分は蛇の目釉刺ぎしている。高台に近い体部や高台は露胎である。39は唐津焼の碗である。碗部高台周辺の4/5程度が残存しており、低い高台を有する。内面と外面の一部に灰白色(2.5Y8/2)の釉が掛けられ、一部を除き高台外面や見込、疊付は露胎である。40は16世紀代のタイ産壺である。胎土は浅黄色(5Y7/3)で、外面に暗赤褐色(7.5R3/2)の釉薬が掛けられる。

41~49は白磁で、41~45は碗、46~49は皿である。41は近世の肥前系で底部が1/8程度残存し、全面に明緑灰色(7.5GY8/1)の釉を施釉後、疊付の釉を剥ぎ取る。見込に蛇の目釉刺ぎの痕跡及び重ね焼きの際に付いたとみられる疊付の接地面積が残る。42も肥前系で底部のみが残存する。内・外面に明緑灰色(10GY8/1)の釉を施す。疊付及び高台内は露胎。17世紀中頃。43は16世紀後半の景徳鎮窯系で口縁部から体部の破片である。口縁部は端反りで、器壁が薄い。外面に花模様線刺ぎ後、内・外面に明緑灰色(10GY8/1)の釉を施す。44は福建産の切高台の碗である。高台の疊付部分は4ヶ所にわたって幅約2cm、上側へ約3mm程度削られており、残りの部分に釉が付着している。また、見込部分には長方形に釉が剥けた部分があることから、重ね焼きをするために前述した削りを施したと推定される。内面と外面に灰白色(7.5Y8/1)の釉が掛けられ、高台外面及び高台内、疊付は露胎である。15~16世紀代。45は明代のもので、碗部下位が屈曲し、高台内は中心部に向って尖り気味となる。いわゆる枢府系と類似するプロポジションである。全面施釉後、疊付と高台内の一部は釉を剥ぎ取る。碗B群。46は16世紀代の福建産皿E群とみられ、内面と外面に明緑灰色(7.5GY8/1)の釉が掛けられている。高台外面、高台内は露胎である。47~49は16世紀代の福建産の皿E-2群で、口縁部が外反する端反り皿である。47は明緑灰色(10GY8/1)の釉が施釉される。48は内・外面に明緑灰色(7.5GY8/1)の釉が掛けられている。49は内・外面に明緑灰色(7.1GY8/1)の釉を施し、口縁部が1/10程度残る。

50~54は龍泉窯系青磁の碗である。50は15世紀代のもので、外面に縦位の線刺と見込に双魚のスタンプを施す。オリブ灰色(5GY6/1)の釉が掛けられるが、疊付と高台内は露胎である。51は碗B-I類で口縁部がやや外反し、外面に片切彫で鏤透弁文を表現する。明緑灰色(7.5GY7/1)や緑灰色(7.5GY6/1)の釉が施される。52は碗B類とみられ、内面と外面にオリブ灰色(10Y5/2)の釉で施釉されるが、見込と高台内、疊付は露胎。14世紀末~15世紀代。53は15世紀代の口縁部が外反する碗D-II類。内・外面に灰オリブ色(7.5Y6/2)の釉が掛けられる。54はオリブ灰色(2.5GY5/1)の釉薬で内外面に施釉される。見込に降灰が認められる。高台内と疊付は露胎。13~14世紀代。

55~63は染付碗で、61は漳州窯系、それ以外は景徳鎮窯系である。55は16世紀後半から17世紀初頭のもので、口縁部内外面に2重の界線、外面に唐草文を描き、明緑灰色(10GY8/1)の釉を施す。56は口縁部が短く屈曲する碗で、外面に螺旋状の文様がみられる。明緑灰色(10GY7/1)の釉が掛けられる。16世紀後半~17世紀初頭。57は碗D群で口縁部を欠損する。外面下部と同高台に界線、外面に唐草文、見込に牡丹文、高台内に「万福攸向」の文字を描き、明緑灰色(10GY8/1)の釉で全面施釉の後、疊付の釉を剥ぎ取る。16世紀第4四半期~17世紀初頭。58は碗B群で口縁部が外反し、口縁部内外面にそれぞれ2条の界線、外面に唐草文を描いた後、明緑灰色(10GY8/1)の釉薬が掛けられる。59も碗B群

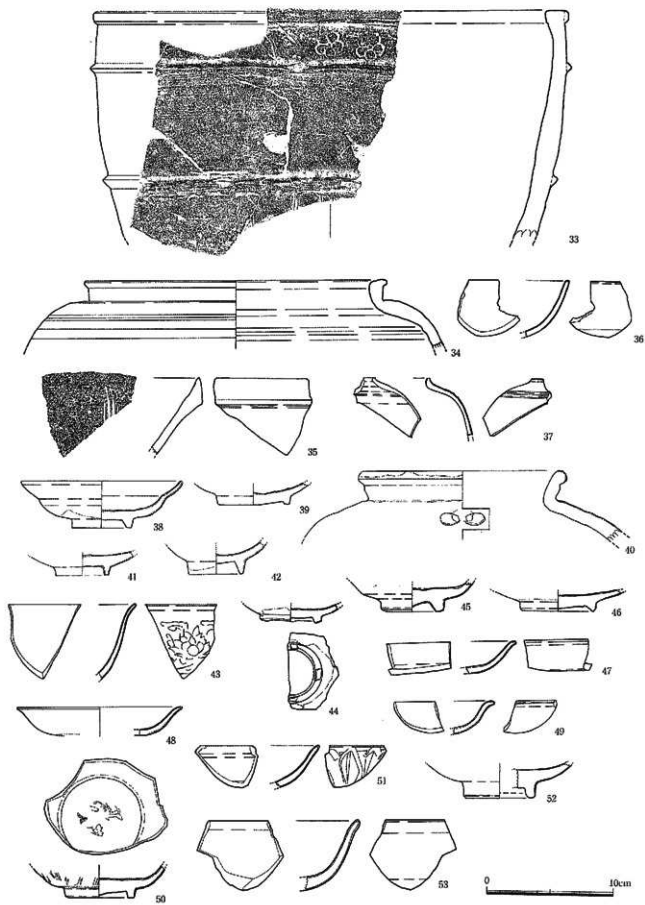


圖19 SD02出土遺物3 (1/3)

で、外面に唐草文を描いた後、明緑灰色(10GY8/1)の釉を施軸する。60は外面に唐草文と見込に文様を描いた後、明青灰色(5B7/1)の釉で全面施軸し、疊付部分のみ釉を剥ぎ取る。61は16世紀後半～17世紀初頭のもので、見込に「福」の文字が表現されているが、呉須の発色が悪い。内・外面に灰白色(7.5Y7/2)の釉が掛けられている。高台内と疊付は露胎である。胎土は漳州窯系の特徴である淡黄色(2.5Y8/4)。62は外面に花文が描かれ、内外に灰白色(2.5GY8/1)の釉が掛けられる。16世紀後半。63は碗B群で、外面に唐草文が描かれ、明青灰色(10BG7/1)の釉が全面に掛けられた後、疊付部分を釉剥ぎする。

64～75は景德鎮窯系染付皿である。64は16世紀前半～中頃の端反り皿B1群で、口縁端部内・外面に2重の界線、見込に1重の界線、外面に牡丹唐草文を描き、明緑灰色(10GY8/1)の釉を掛けるが、2次の被熱の影響で、釉の色がやや白濁している。65は底部が1/6程度残存しており、高台外面と見込に2重の界線と同じく見込に玉取獅子文を描いて明緑灰色(10GY8/1)の釉で全面施軸した後、疊付の釉を剥ぎ取る。16世紀前半～中頃。66も底部が残存しており、内面に文様を描き、高台内に「宣」の1文字のみが確認できることから、本来は「宣徳年製」の銘が記されていたとみられる。16世紀第4四半期～17世紀初頭。明緑灰色(10GY8/1)の釉を全面施軸した後、疊付の釉を剥ぎ取る。67は見込に花樹文、外面にも文様が描かれる。全面施軸の後、疊付部分は釉を剥ぎ取る。16世紀後半。68は皿B1群で口縁部が外反し、口縁端部内・外面に太めの界線、高台外面と見込に2重の界線、外面に唐草文、見込に花樹文を描く。69は見込に花の文様を描き、明青灰色(5BG7/1)の釉で全面施軸する。その後、疊付部分の釉が剥ぎ取られる。皿F群とみられ、16世紀第4四半期～17世紀初頭。70は皿B群で、口縁端部内・外面に薄くの2重の界線、外面に唐草文を描き、明緑灰色(10GY8/1)の釉が掛けられる。16世紀後半。71～75は16世紀第4四半期～17世紀初頭の口縁部が外側に屈曲するいわゆる「口折れ」の景德鎮窯系の皿F群であり、口縁部内面に宝文が描かれる。71は明緑灰色(5B7/1)の釉薬が掛けられる。72は外面に唐草文が描かれ、明緑灰色(10GY8/1)の釉で全面施軸後、疊付の釉を剥ぎ取る。73は口縁部外面に唐草文、内面に宝文が描かれ、明緑灰色(5B7/1)の釉薬が掛けられる。74は明緑灰色(5B7/1)の釉薬、75は明青灰色(5B7/1)の釉薬が掛けられる。

SD05 (図21、図版8)

76・77は中国製の白磁皿である。76は16世紀代のもので、底部が1/4程度残存する。オリブ灰色(2.5GY6/1)の釉で内・外面を施軸後、見込を蛇の目釉剥ぎする。見込には重ね焼きの際に付いたとみられる疊付の接地面痕が残る。77は16世紀後半のもので、内・外面に灰白色(5Y8/1)の釉薬を施す。高台内は露胎。貫入が著しい。

78は福建産の青磁の菊皿で底部が残存する。外面はヘラ先による20条前後の沈線、内面は放射状に凹状に窪む。浅黄色(2.5Y7/3)や灰黄色(2.5Y6/2)の釉を掛ける。高台外面、疊付、高台内は露胎である。

SD06 (図21、図版8)

79は瀬戸・美濃焼の天目茶碗で、口縁端部が短く外反する。内・外面は暗赤褐色(2.5YR3/2)や赤褐色(2.5Y2/1)の釉薬を掛ける。外面下位の一部、高台は露胎である。

80・81は龍泉窯系の青磁碗。80は口縁部と底部を欠損する。内面に雷文と印花人物文を施文後、オ

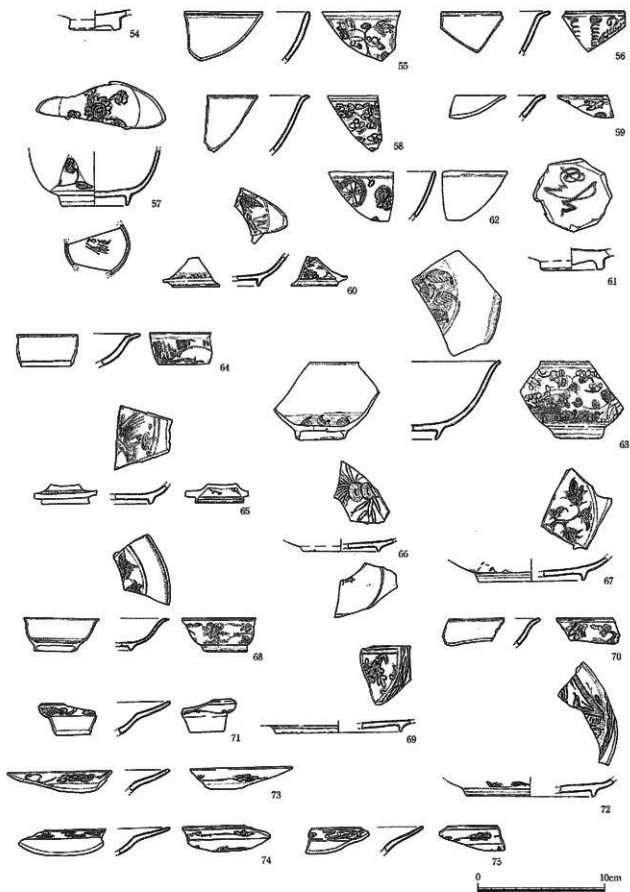


图20 SD02出土遺物4 (1/3)

リープ灰色 (10Y5/2) の釉を施釉する。15世紀代。81は碗B-IV類で外面に細線蓮弁文を施し、オリーブ灰色 (2.5GY6/1) の釉を掛ける。

SD07 (図21、図版8)

82は中国南部の焼締陶器壺の口縁部片である。口縁端部は楕円形の粘土紐を貼り付けて成型し、内面には同心円状の当具痕が残る。外面に灰オリーブ色 (7.5Y5/2) の自然釉が掛かり、降灰の痕跡がある。16世紀～17世紀初頭。

83・84は陶器の皿である。83は17世紀初頭～前半の唐津焼の皿で、低い高台が付き口縁部が外反する。灰色 (5Y5/1) の釉が内面と外面上半部に掛かり、それ以下は露胎である。見込に着着防止のための釉剥ぎ痕がある。84は唐津焼の皿で、内面と外面下半にオリーブ黄色 (7.5Y6/2) の釉を施釉する。高台外面や高台内は露胎である。見込に3ヶ所の胎土目の痕跡があり、欠損部分に1ヶ所の計4ヶ所に存在したとみられる。また、碗部と高台の境付近に直径1cm程の扁平な粘土塊が付いているが、これは焼成時に付着したものとみられる。

85は福産とみられる白磁碗である。内面と外面に灰白色 (2.5GY8/1) の釉が掛けられる。高台内と壘付は露胎である。碗部のほとんどを欠損する。16世紀代。

86は景德鎮窯系染付皿B群と推定される。高台外面と腰部外面との境に2重の界線、見込に花樹文を

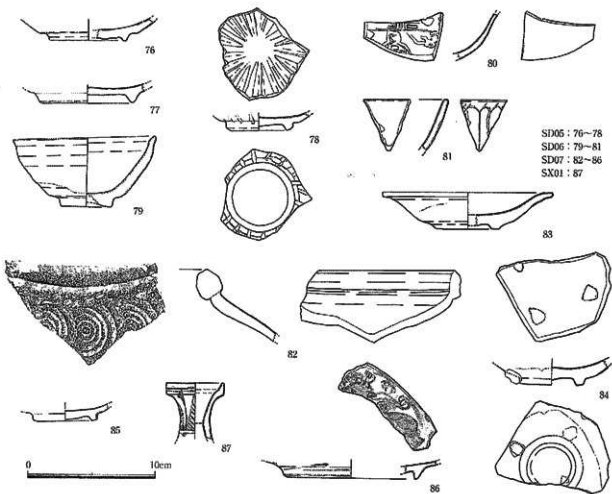


図21 SD05・SD06・SD07・SX01出土遺物 (1/3)

描いた後、灰白色(2.5GY8/1)の釉を全面施釉し、疊付の軸を剥ぎ取る。16世紀中頃～末。

SX01 (図21、図版8)

87は景德鎮窯系の瓶で、頸部は緩やかに外反し、口縁部は上方に短く立ち上がる。頸部外面に芭蕉葉文を描き、灰白色(7.5Y8/2)の釉が施される。

SX02 (図22～27、図版8・9)

本遺構から一括出土した土師質土器(カワラケ)は遺存状態が良好なものが320枚以上あり、4、5枚重ねて伏せた状態で出土したものが多く、完形のものや、それに近いものを中心に216点を図化した。

88～303は土師質土器の坏で、全て回転台を用いて製作されている。底部と体部の境は明瞭で、内・外面とも回転ナド調整で整形しており、回転ヘラケズりはみられない。体部から外側に開きながら口唇部まで斜め上方に延び、大きく内湾や外反するものはない。磨耗して底部切り離し痕が明確でないものを除けば、全て糸切り痕のものであり、ヘラ切り痕が残るものは1点もない。また、底部縁辺部に指で強くつまんで持ち上げた際に生じたとみられる指頭押圧痕が残るものもある。このように、法量の大小はあるものの、総じて同じようなプロポーションを呈し、製作技法も共通する。

88～195は口径が6.1～7.7cmと6～7cm代のもので、なかでも6cm半ばから後半代に集中する小型のものである。器高は1.5～2.2cmで1cm後半代のもが多く、底径は3.5～4.9cmの範囲であるが、4cm前半代のもが多数を占める。底部と体部の境は明瞭である一方、内面に関しては見込から体部に明確な屈曲がない107・109・114・115・122・138・151のようなものもある。

一方、196～303は88～195にくらべて一回り大型のもので、口径が8.5～10.3cmの範囲であり、最も口径が大きな303を除き、8cm半ば～9cm後半代の範疇におさまる。器高は2.1～2.9cmと2cm代であり、2cm半ばのものが多い。底径は3.8～5.9cmとやや幅があるが、おおむね4cm後半から5cm半ばまでのものが主体である。前述した小型の坏を一回り大きくしたような形状を呈する。体部から口縁部まで斜め上方にほぼ直線に延びるものがほとんどであるが、208は体部から口縁部にかけて緩やかに外反する。また、内面に関しては見込から体部に明確な屈曲がない203・211・270・279・290・294のようなものもある。

以上の土師質土器の坏については、平山・高木ほか1977で法量の大・小によって大きく2つに分類し、大きな一群がⅠ類、小さな一群がⅡ類に分類されているが、これらは上述した88～195の小型のものがⅡ類、196～303の大型のものがⅠ類に相当する。

遺構外出土遺物 (図28、図版10)

304は土師質土器の坏である。底部に糸切り痕が残存する。口縁部の1/3程度にわたり黒色の油痕があり、灯明皿として使用されたことがわかる。

305は東播系とみられる瓦質土器の播鉢である。口縁部断面は三角形状を呈する。

306は白磁である。朝鮮王朝陶磁碗で、腰部と高台が残存する。台形の高台で全面施釉されるが、疊付には砂目の痕跡が残る。貫入が著しい。

307～312は青磁で、307を除き全て龍泉窯系のものである。307は福産建と推定される菊肌で、外面はヘラ先による沈線を施す。胎土は粗く、釉は浅黄色(2.5Y7/3)のやや黄色味を帯びる。308は小杯で

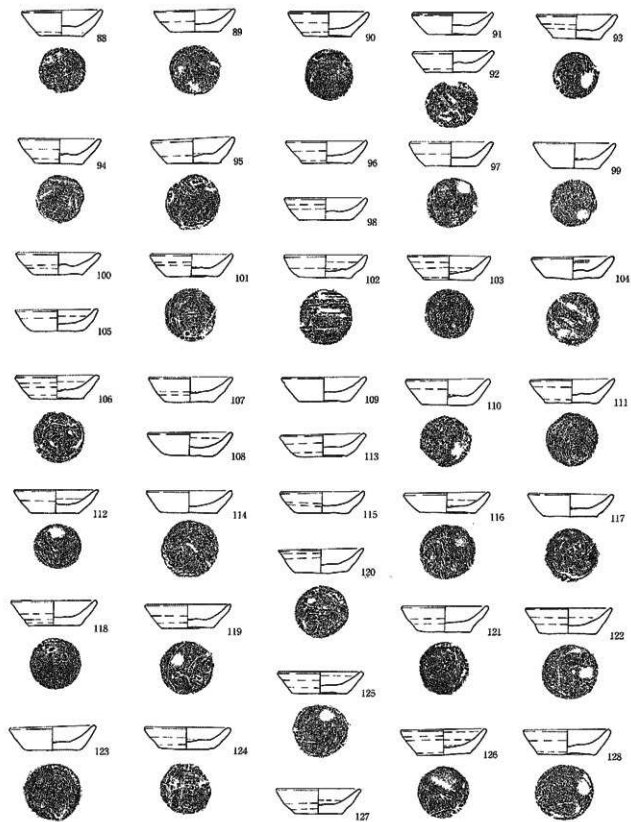


図22 SX02出土遺物1 (1/3)

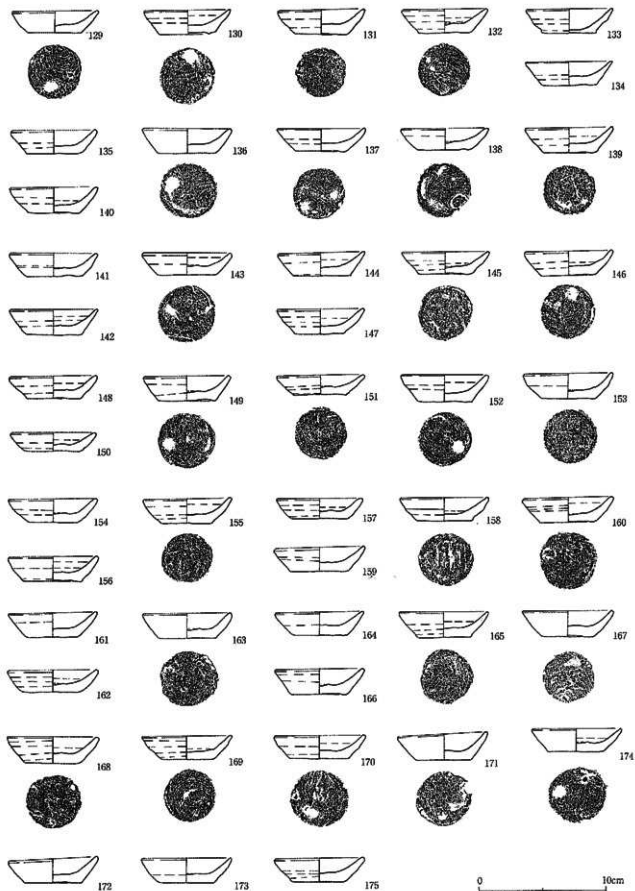


图23 SX02出土遺物 2 (1/3)

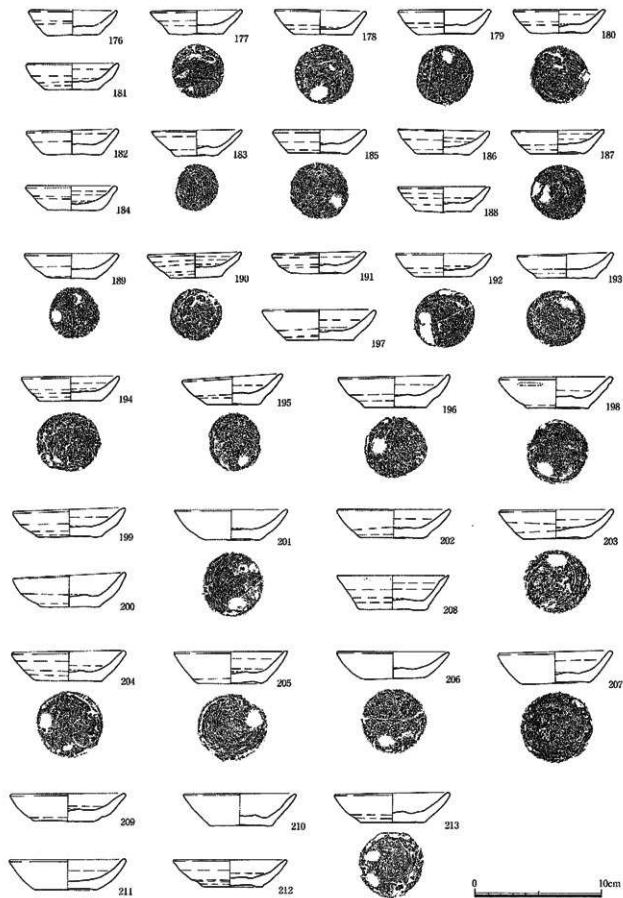


図24 SX02出土遺物3 (1/3)

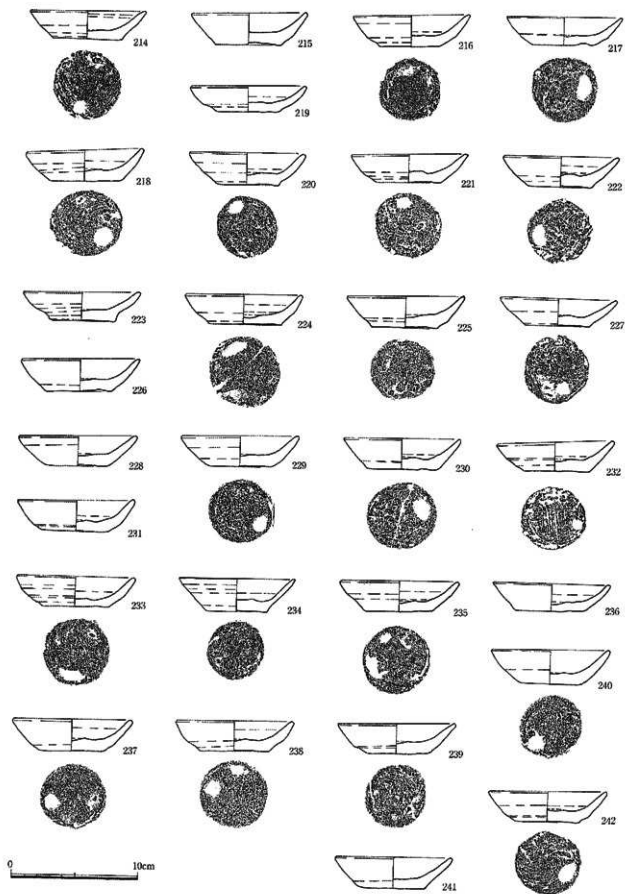


圖25 SX02出土遺物4 (1/3)

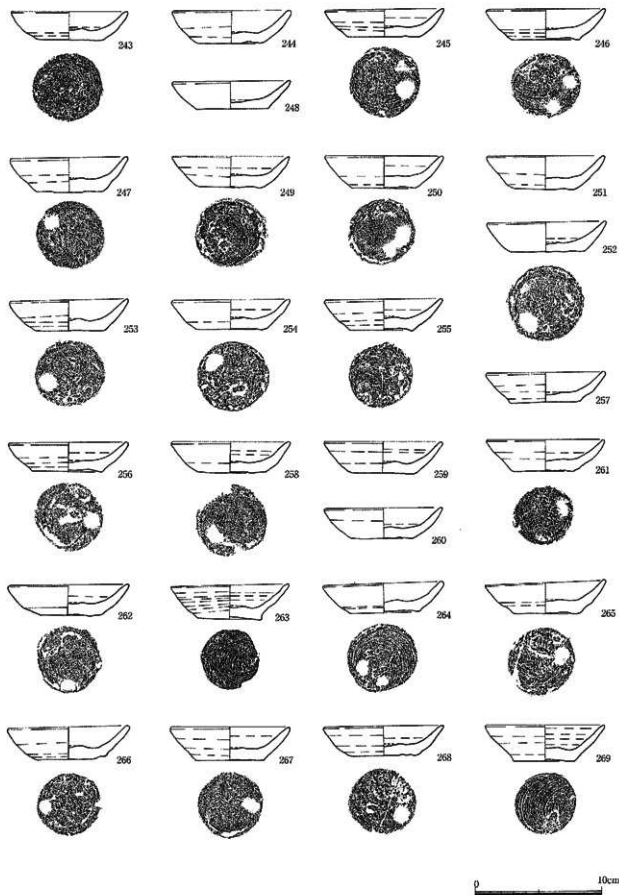


図26 SX02出土遺物5 (1/3)

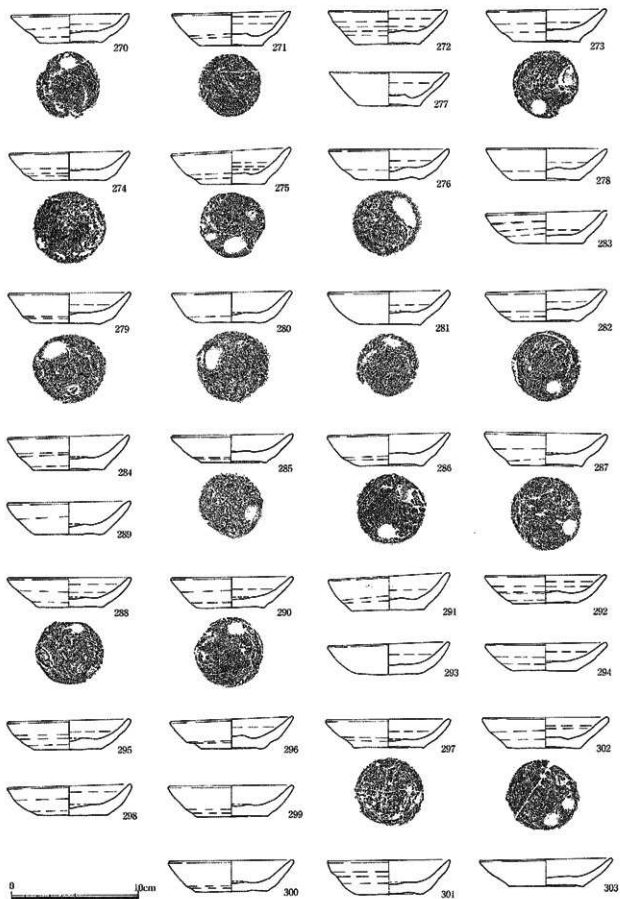


图27 SX02出土遺物 6 (1/3)

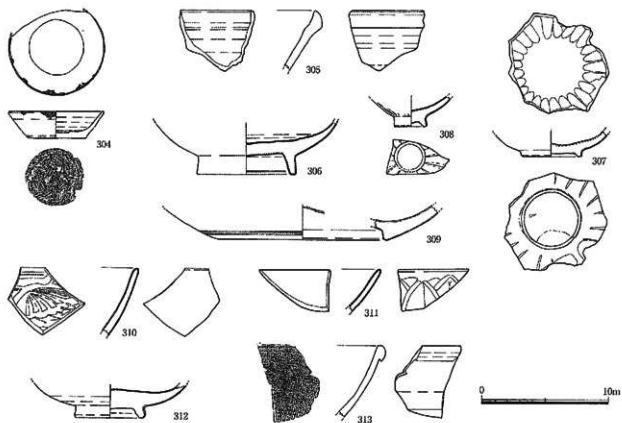


図28 遺構外出土遺物 (1/3)

外面に削り出しで蓮弁文が表現され、オリーブ灰色 (5GY5/1) の釉薬が外面と内面に掛けられる。高台内と壺付は露胎である。309は碁笥底の盤とみられ、底部に線刻による2重の界線、内面に描挿した後、全面にオリーブ灰色 (10Y5/2~4/2) の釉薬を施す。14世紀後半~15世紀中頃。310は12世紀頃の大宰府分類I-2類に分類される割花文系の碗で、内面に片切彫で文様を施す。灰オリーブ色 (7.5Y5/2) の釉が掛かる。311は片切彫で鎗蓮弁文を表現し、暗オリーブ色 (7.5Y4/3) の釉が掛けられるが、口縁端部は釉が薄くなっている。13~14世紀代で碗B-I類に分類できる。312は体部の大半を欠損している。オリーブ灰色 (10Y6/2) の釉が内面と外面に掛けられ、高台内と壺付は露胎である。内外面とも文様は認められない。14世紀後半~15世紀中頃。

313は17世紀後半頃の肥前系陶器の溜鉢で、内面に描目を施し、口縁部は玉縁状を呈する。

表3 1次調査出土遺物観察表(カッコ内は復元値を示す)

種別 発掘 番号	土器 番号	形状	土	焼成	色調(内/外)	器面状態(内/外)	調査 角度	法量(cm)		備考	
								口径	高さ		
1	1-319	土師質土器・坏	1 mm 程度の砂粒、角四石を含む	良好	橙/橙	底面に黄褐色/赤褐色の斑	H-T5	B+C	6.6	1.7	3.8
2	1-320	土師質土器・坏	1 mm 程度の砂粒、赤土、角四石、灰石を含む	良好	橙/橙		H-T5	B+C	6.8	1.9	3.8
3	1-331	土師質土器・坏	1 mm 前後の砂粒、赤母を含む	良好	赤い橙/赤い黄緑		H-T5	B+C	6.6	2.2	3.6
4	1-330	土師質土器・坏	1 mm 前後の砂粒、赤母を含む	良好	淡黄緑/淡黄緑		H-T5	B+C	(7.0)	2.1	5.1
5	1-328	土師質土器・坏	1 mm 前後の砂粒、赤母、角四石を含む	良好	橙/黄褐色		H-T5	B+C	(7.6)	1.5	4.6
6	1-329	土師質土器・坏	1~2 mm 程度の砂粒、赤母、灰石を含む	良好	赤い黄緑/赤い黄緑		H-T5	B+C	8.1	2.7	5.2
7	1-327	土師質土器・坏	1 mm 以下の砂粒、赤母、灰石を含む	良好	赤い橙/黄褐色		H-T5	B+C	8.6	2.6	4.8
8	1-314	土師質土器・坏	1 mm 以下の砂粒、赤母、角四石を含む	良好	赤い橙/赤い橙		H-T5	B+C	8.4	3.0	4.4
9	1-315	土師質土器・坏	1~4 mm 程度の砂粒、角四石を含む	良好	橙/赤い橙		H-T5	B+C	8.4	2.5	4.4
10	1-310	土師質土器・坏	1 mm 以下の砂粒、角四石を含む	良好	橙/赤い橙		H-T5	B+C	8.4	1.9	4.3
11	1-313	土師質土器・坏	1 mm 前後の砂粒、赤母を含む	良好	橙/橙		H-T5	B+C	8.8	2.8	4.1
12	1-327	土師質土器・坏	1 mm 前後の砂粒、赤母、角四石を含む	良好	橙/橙		H-T5	B+C	(8.8)	2.3	5.0
13	1-321	土師質土器・坏	1~3 mm 程度の砂粒、赤母を含む	良好	橙/橙		H-T5	B+C	9.0	3.2	4.4
14	1-312	土師質土器・坏	1 mm 以下の砂粒、赤母を含む	良好	赤い黄緑/赤い黄緑		H-T5	B+C	9.0	2.7	4.3
15	1-308	土師質土器・坏	1 mm 前後の砂粒を含む	良好	明赤橙/明赤橙		H-T5	B+C	9.0	2.5	5.0
16	1-318	土師質土器・坏	1~2 mm 程度の砂粒、赤母、角四石を含む	良好	黄緑/橙		H-T5	B+C	9.0	2.5	4.4
17	1-322	土師質土器・坏	1 mm 以下の砂粒、赤母、角四石を含む	良好	橙/橙		H-T5	B+C	9.2	2.5	5.4
18	1-323	土師質土器・坏	1 mm 前後の砂粒、赤母を含む	良好	赤い橙/赤い橙		H-T5	B+C	9.2	2.9	5.2
19	1-324	土師質土器・坏	1 mm 前後の砂粒、赤母、角四石、灰石を含む	良好	赤い橙/赤い橙		H-T5	B+C	9.4	2.9	5.2
20	1-326	土師質土器・坏	1 mm 前後の砂粒、赤母、角四石を含む	良好	橙/橙		H-T5	B+C	9.2	2.6	5.4
21	1-309	土師質土器・坏	1 mm 以下の砂粒、赤母、角四石を含む	良好	橙/赤い橙		H-T5	B+C	(9.4)	3.1	5.0
22	1-316	土師質土器・坏	1 mm 程度の砂粒、赤母、角四石を含む	良好	橙/赤い橙		H-T5	B+C	9.3	2.7	4.5
23	1-307	土師質土器・坏	1 mm 前後の砂粒、赤母、角四石を含む	良好	橙/赤い橙		H-T5	B+C	9.4	2.7	5.6
24	1-311	土師質土器・坏	1~2 mm 程度の砂粒、赤母、角四石を含む	良好	黄緑/橙		H-T5	B+C	10.4	2.8	5.6
25	1-320	土師質土器・坏	1 mm 前後の砂粒、赤母、角四石を含む	良好	淡黄緑/橙		H-T5	B+C	10.4	2.8	5.0
26	1-332	瓦質土器・椀	1 mm 程度の砂粒、赤母、角四石、灰石を含む	良好	橙/橙		H-T5	B+C	(15.2)	3.7	(9.3)
27	1-294	瓦質土器・椀	1~2 mm 程度の砂粒、赤母、角四石を含む	良好	灰白/灰白		H-T6	埋土	29.1	13.0	14.6
28	1-297	瓦質土器・椀	1~3 mm 程度の砂粒、赤母、角四石を含む	良好	黄緑/黄緑		H-T4	埋土	29.2	14.0	14.5
29	1-306	瓦質土器・椀	1~4 mm 程度の砂粒、赤母を含む	良好	黄緑/黄緑		H-T5	埋土	33.8	12.1	19.6
30	1-305	瓦質土器・椀	1 mm 前後の砂粒、赤母を含む	良好	淡黄緑/黄緑		H-T2	埋土	(26.6)	13.0	(16.8)
31	1-302	瓦質土器・火鉢	1 mm 程度の砂粒、赤母、角四石、灰石を含む	良好	黄緑/灰白		H-T5	埋土	(35.0)	12.0	—
32	1-303	瓦質土器・火鉢	1 mm 以下の砂粒を含む	良好	黄緑/灰白		H-T5	埋土	—	—	—
33	1-304	土師質土器・火鉢	1 mm 以下の砂粒、赤母、角四石を含む	良好	赤い黄緑/赤い黄緑		H-T6	埋土	(37.1)	13.1	—

SD02 (銅磁器)

※器底の「B+C」とは黒褐色に灰及び酸化銅を含む層

測図 番号	器種	器底	胎土	胎色	色調 (内面・外面もしくは指差/胎土)	器面装束(内/外)	調査 地点	器位	出土 層位	高さ (cm)	備	考	
34	深密 良好	深密 良好	深密 良好	内: 暗赤褐色/外: 暗赤褐色	頭ナア/横ナア	頭ナア/横ナア	H-76	埋土	23.5	残5.5	一 銅附焼、真鍮裏面		
35	深密 良好	深密 良好	深密 良好	内: 暗赤褐色/外: 赤褐色	横ナア/横ナア	横ナア/横ナア	H-75	埋土	残6.1	残6.1	一 銅附焼、真鍮裏面		
36	深密 良好	深密 良好	深密 良好	赤: 黒・黒褐色/赤: 赤褐色	胎土/胎土	胎土/胎土	H-72	埋土	残4.6	残4.6	一 瀬川・岩波焼の天目茶碗		
37	深密 良好	深密 良好	深密 良好	赤: 黒・黒褐色/赤: 赤褐色	胎土/胎土	胎土/胎土	H-74	埋土	残4.6	残4.6	一 近世・阿波系		
38	深密 良好	深密 良好	深密 良好	赤: 黒・黒褐色/赤: 赤褐色	胎土/胎土	胎土/胎土	H-T3N	埋土	12.6	3.7	4.6	一 肥前産、見込及び鏡の目録割ぎ	
39	深密 良好	深密 良好	深密 良好	赤: 黒・黒褐色/赤: 赤褐色	胎土/胎土	胎土/胎土	H-72	埋土	残1.7	5.6	5.6	一 唐津産	
40	深密 良好	深密 良好	深密 良好	赤: 黒・黒褐色/赤: 赤褐色	胎土/胎土	胎土/胎土	H-76	埋土	16.4	残5.0	残5.0	一 タイ産	
41	深密 良好	深密 良好	深密 良好	赤: 黒・黒褐色/赤: 赤褐色	胎土/胎土	胎土/胎土	H区	埋土	残1.8	4.2	4.2	一 肥前産、鏡の目録割ぎ	
42	深密 良好	深密 良好	深密 良好	赤: 黒・黒褐色/赤: 赤褐色	胎土/胎土	胎土/胎土	H-75	埋土	残5.9	4.3	4.3	一 豊後系	
43	深密 良好	深密 良好	深密 良好	赤: 黒・黒褐色/赤: 赤褐色	胎土/胎土	胎土/胎土	H-76	埋土	残5.9	4.8	4.8	一 豊後系、外面に黒鉛による花柄線	
44	深密 良好	深密 良好	深密 良好	赤: 黒・黒褐色/赤: 赤褐色	胎土/胎土	胎土/胎土	H-76	埋土	残1.5	4.8	4.8	一 瀬川産、高尾産に4ヶ所の捺り(惣高台)	
45	深密 良好	深密 良好	深密 良好	赤: 黒・黒褐色/赤: 赤褐色	胎土/胎土	胎土/胎土	H-76	埋土	残2.4	4.8	4.8	一 明代、肥前産と類似、鏡B群	
46	深密 良好	深密 良好	深密 良好	赤: 黒・黒褐色/赤: 赤褐色	胎土/胎土	胎土/胎土	H-76	埋土	残1.7	5.6	5.6	一 福徳産、皿E群	
47	深密 良好	深密 良好	深密 良好	赤: 黒・黒褐色/赤: 赤褐色	胎土/胎土	胎土/胎土	H-76	埋土	残2.5	—	—	—	
48	深密 良好	深密 良好	深密 良好	赤: 黒・黒褐色/赤: 赤褐色	胎土/胎土	胎土/胎土	H-76	埋土	残2.3	—	—	—	
49	深密 良好	深密 良好	深密 良好	赤: 黒・黒褐色/赤: 赤褐色	胎土/胎土	胎土/胎土	H-76	埋土	13.0	残2.3	残2.3	—	
50	深密 良好	深密 良好	深密 良好	赤: 黒・黒褐色/赤: 赤褐色	胎土/胎土	胎土/胎土	H-T5	B+C	残2.5	—	—	—	
51	深密 良好	深密 良好	深密 良好	赤: 黒・黒褐色/赤: 赤褐色	胎土/胎土	胎土/胎土	H-78	B+C	残2.5	—	—	—	
52	深密 良好	深密 良好	深密 良好	赤: 黒・黒褐色/赤: 赤褐色	胎土/胎土	胎土/胎土	H-T8	B+C	残3.3	—	—	—	
53	深密 良好	深密 良好	深密 良好	赤: 黒・黒褐色/赤: 赤褐色	胎土/胎土	胎土/胎土	H-76	埋土	残2.8	5.1	5.1	—	
54	深密 良好	深密 良好	深密 良好	赤: 黒・黒褐色/赤: 赤褐色	胎土/胎土	胎土/胎土	H-76	埋土	残5.5	—	—	—	
55	深密 良好	深密 良好	深密 良好	赤: 黒・黒褐色/赤: 赤褐色	胎土/胎土	胎土/胎土	H-T5	B+C	残1.5	4.1	4.1	—	
56	深密 良好	深密 良好	深密 良好	赤: 黒・黒褐色/赤: 赤褐色	胎土/胎土	胎土/胎土	H-75	B+C	残3.9	—	—	—	
57	深密 良好	深密 良好	深密 良好	赤: 黒・黒褐色/赤: 赤褐色	胎土/胎土	胎土/胎土	H-73	埋土	残4.3	—	—	—	
58	深密 良好	深密 良好	深密 良好	赤: 黒・黒褐色/赤: 赤褐色	胎土/胎土	胎土/胎土	H-73	B+C	残4.4	—	—	—	
59	深密 良好	深密 良好	深密 良好	赤: 黒・黒褐色/赤: 赤褐色	胎土/胎土	胎土/胎土	H-78	埋土	残1.8	—	—	—	
60	深密 良好	深密 良好	深密 良好	赤: 黒・黒褐色/赤: 赤褐色	胎土/胎土	胎土/胎土	H-76	埋土	残2.3	—	—	—	
61	深密 良好	深密 良好	深密 良好	赤: 黒・黒褐色/赤: 赤褐色	胎土/胎土	胎土/胎土	H-72	埋土	残1.6	5.0	5.0	—	
62	深密 良好	深密 良好	深密 良好	赤: 黒・黒褐色/赤: 赤褐色	胎土/胎土	胎土/胎土	H-77	B+C	残3.7	—	—	—	
63	深密 良好	深密 良好	深密 良好	赤: 黒・黒褐色/赤: 赤褐色	胎土/胎土	胎土/胎土	H-77	B+C	残2.5	—	—	—	
64	深密 良好	深密 良好	深密 良好	赤: 黒・黒褐色/赤: 赤褐色	胎土/胎土	胎土/胎土	H-75	B+C	残1.5	—	—	—	
65	深密 良好	深密 良好	深密 良好	赤: 黒・黒褐色/赤: 赤褐色	胎土/胎土	胎土/胎土	H-T5	B+C	残0.9	3.0	3.0	—	
66	深密 良好	深密 良好	深密 良好	赤: 黒・黒褐色/赤: 赤褐色	胎土/胎土	胎土/胎土	H-75	B+C	残1.8	8.3	8.3	—	
67	深密 良好	深密 良好	深密 良好	赤: 黒・黒褐色/赤: 赤褐色	胎土/胎土	胎土/胎土	H-T3N	埋土	残0.9	—	—	—	
68	深密 良好	深密 良好	深密 良好	赤: 黒・黒褐色/赤: 赤褐色	胎土/胎土	胎土/胎土	H-76	埋土	残2.5	—	—	—	
69	深密 良好	深密 良好	深密 良好	赤: 黒・黒褐色/赤: 赤褐色	胎土/胎土	胎土/胎土	H-76	埋土	残0.9	10.0	10.0	—	
70	深密 良好	深密 良好	深密 良好	赤: 黒・黒褐色/赤: 赤褐色	胎土/胎土	胎土/胎土	H-74	埋土	残2.1	—	—	—	

SD02 (陶磁器)

種別 番号	実測 番号	器種	焼成	色 調		器面調整 (内/外)	調査 地点	層位	法 量 (cm)		備 考
				(内面/外面もしくは輪蓋/胎土)	(内面/外面もしくは輪蓋/胎土)				口径	器高	
71	1-43	鉢付・皿	窯密 良好	輪：明焼灰/胎：灰白	窯密 良好	窯文、焼物/器文、焼物	H-T6	Ⅷ土	残2.5	—	京焼陶器系、皿F群
72	1-48	鉢付・皿	窯密 良好	輪：明焼灰/胎：灰白	窯密 良好	窯文、焼物/器文、焼物	H-T6	Ⅷ土	残1.4	10.0	京焼陶器系、皿F群
73	1-42	鉢付・皿	窯密 良好	輪：明焼灰/胎：灰白	窯密 良好	窯文、焼物/器文、焼物	H-T6	Ⅷ土	残1.7	—	京焼陶器系、皿F群
74	1-44	鉢付・皿	窯密 良好	輪：明焼灰/胎：灰白	窯密 良好	窯文、焼物/器文、焼物	H-T6	Ⅷ土	残2.0	—	京焼陶器系、皿F群
75	1-45	鉢付・皿	窯密 良好	輪：明焼灰/胎：灰白	窯密 良好	窯文、焼物/器文、焼物	H-T6	Ⅷ土	残2.0	—	京焼陶器系、皿F群

SD05

種別 番号	実測 番号	器種	焼成	色 調		器面調整 (内/外)	調査 地点	層位	法 量 (cm)		備 考
				(内面/外面もしくは輪蓋/胎土)	(内面/外面もしくは輪蓋/胎土)				口径	器高	
76	1-7	白磁・皿	窯密 良好	輪：オリーブ灰/胎：灰白	窯密 良好	焼物/ロタロケズリ、焼物	H-3区	Ⅷ土	残1.7	6.0	中區製、虎の目輪調子
77	1-288	白磁・皿	窯密 良好	輪：灰白/胎：灰白	窯密 良好	焼物/ロタロケズリ、焼物	H-4区	Ⅷ土	残1.5	9.0	中區製
78	1-14	青磁・朝皿	窯密 良好	輪：浅黄/灰黄/胎：灰白	窯密 良好	タズリ、焼物/ロタロケズリ、焼物	H-4区T1 裏下層	—	残1.3	4.4	相違産

SD06

種別 番号	実測 番号	器種	焼成	色 調		器面調整 (内/外)	調査 地点	層位	法 量 (cm)		備 考	
				(内面/外面もしくは輪蓋/胎土)	(内面/外面もしくは輪蓋/胎土)				口径	器高		底径
79	1-1	地皿器器・碗	窯密 良好	輪：明焼灰/胎：赤黒/胎：灰白	窯密 良好	焼物/ロタロケズリ、焼物	H-4区	Ⅷ土	11.1	5.5	4.0	箱戸・赤塗成の天日茶碗
80	1-34	白磁・碗	窯密 良好	輪：オリーブ灰/胎：灰白	窯密 良好	窑文、印花人物文、墨繪/焼物	H-4区	Ⅷ土	—	残3.8	—	龍泉山窯
81	1-66	青磁・碗	窯密 良好	輪：オリーブ灰/胎：灰	窯密 良好	焼物/新羅雲弁文、焼物	H-4区	Ⅷ土	—	残4.1	—	龍泉山窯、焼B-IV群

SD07

種別 番号	実測 番号	器種	焼成	色 調		器面調整 (内/外)	調査 地点	層位	法 量 (cm)		備 考	
				(内面/外面もしくは輪蓋/胎土)	(内面/外面もしくは輪蓋/胎土)				口径	器高		底径
82	1-292	洗刷内器・壺	窯密 良好	輪：灰ネグリーブ/胎：灰赤黄～黒得	窯密 良好	タタキ/阿心内筒で呂鉄	B地区	Ⅷ土	残5.7	—	中国清涼産	
83	1-3	洗刷内器・皿	窯密 良好	輪：灰ネグリーブ/胎：灰黄	窯密 良好	焼物/ロタロケズリ・ナナ、焼物	B地区	Ⅷ土	13.3	2.9	5.1	習津校
84	1-9	洗刷内器・皿	窯密 良好	輪：オリーブ灰～灰ネグリーブ/胎：灰白	窯密 良好	焼物/ロタロケズリ・ナナ、焼物	B地区	Ⅷ土	—	残2.1	4.9	習津校、高台外側に粘土目が付着
85	1-11	白磁・碗	窯密 良好	輪：灰白/胎：灰白	窯密 良好	焼物/ロタロケズリ、焼物	B地区	Ⅷ土	—	残1.3	5.0	習津校
86	1-61	鉢付・皿	窯密 良好	輪：灰白/青灰/胎：灰白	窯密 良好	花彫文、焼物/焼物	B地区	Ⅷ土	—	残1.5	10.0	京焼陶器系、皿B1群

S X01

種別 番号	実測 番号	器種	焼成	色 調		器面調整 (内/外)	調査 地点	層位	法 量 (cm)		備 考	
				(内面/外面もしくは輪蓋/胎土)	(内面/外面もしくは輪蓋/胎土)				口径	器高		底径
87	1-50	鉢付・壺	窯密 良好	輪：灰白/胎：灰黄	窯密 良好	焼物/芭蕉草文、焼物	B地区	Ⅷ土	4.6	残4.5	—	京焼陶器系

S X02

種別 番号	実測 番号	器種	焼成	色 調		器面調整 (内/外)	調査 地点	層位	法 量 (cm)		備 考	
				(内面/外面もしくは輪蓋/胎土)	(内面/外面もしくは輪蓋/胎土)				口径	器高		底径
88	1-119	土師質土器・杯	窯密 良好	輪：1 mm程度の砂粒、雲母、角閃石を含む	窯密 良好	同転ナデ/同転ナデ、焼物	C-T1	Ⅷ土	6.1	2.0	3.5	
89	1-122	土師質土器・杯	窯密 良好	輪：1~2 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	窯密 良好	同転ナデ/同転ナデ、焼物	C-T1	Ⅷ土	6.1	1.8	4.0	

神田 番号	家源 番号	遺 跡	土 質	地 況	色調 (内/外)	断面形状 (内/外)	調査 地点	層位	法 量 (cm)		備 考	
									口徑	底徑		
90	1-143	土師瓦土器・環	1~2 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.1	2.0	3.8	
91	1-167	土師瓦土器・環	1 mm程度の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.1	1.8	3.8	
92	1-224	土師瓦土器・環	1 mm程度の砂粒、雲母を少量含む	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.1	1.7	4.1	
93	1-235	土師瓦土器・環	1~3 mmの砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.1	1.9	3.7	底蓋に指痕押印痕
94	1-142	土師瓦土器・環	1~2 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.2	2.0	3.8	底蓋に指痕押印痕
95	1-213	土師瓦土器・環	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.2	2.0	4.3	
96	1-265	土師瓦土器・環	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.2	1.8	4.0	
97	1-136	土師瓦土器・環	1~3 mmの砂粒、雲母、灰石を含む	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.3	1.9	4.1	底蓋に指痕押印痕
98	1-146	土師瓦土器・環	1~2 mmの砂粒、雲母、灰石を含む	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.3	1.8	4.1	底蓋に指痕押印痕
99	1-221	土師瓦土器・環	1 mm程度の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.3	2.1	3.8	底蓋に指痕押印痕
100	1-221	土師瓦土器・環	1 mm程度の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.3	1.8	3.9	底蓋に指痕押印痕
101	1-240	土師瓦土器・環	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.3	1.9	4.2	
102	1-267	土師瓦土器・環	1~3 mm程度の砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.3	1.8	4.1	底蓋に灰状押痕
103	1-283	土師瓦土器・環	1 mm程度の砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.3	1.9	3.9	底蓋に指痕押印痕
104	1-189	土師瓦土器・環	1~4 mmの砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.3	1.8	4.3	
105	1-267	土師瓦土器・環	1~4 mmの砂粒、雲母を少量含む	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.3	1.8	4.3	
106	1-267	土師瓦土器・環	1~2 mm程度の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.3	1.9	4.0	
107	1-114	土師瓦土器・環	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	やや粗	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.4	2.0	3.9	
108	1-193	土師瓦土器・環	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	やや粗	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.4	1.9	3.8	
109	1-197	土師瓦土器・環	1~3 mmの砂粒、雲母、角閃石を多く含む	やや粗	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.4	2.0	4.0	
110	1-222	土師瓦土器・環	1 mm程度の砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.4	2.1	3.9	
111	1-231	土師瓦土器・環	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.4	1.9	4.2	
112	1-251	土師瓦土器・環	1~2 mm程度の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.4	1.9	3.7	底蓋に指痕押印痕
113	1-279	土師瓦土器・環	1~3 mmの砂粒、雲母を多く含む	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.4	1.8	3.6	
114	1-144	土師瓦土器・環	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.5	1.8	4.4	底蓋に灰状押痕
115	1-250	土師瓦土器・環	1~2 mm程度の砂粒、雲母を含む	やや粗	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.5	1.7	4.2	
116	1-285	土師瓦土器・環	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.5	1.6	4.4	底蓋に灰状押印痕
117	1-81	土師瓦土器・環	1~2 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.5	1.8	4.4	工具痕?
118	1-110	土師瓦土器・環	1 mm程度の砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.5	2.0	4.0	
119	1-111	土師瓦土器・環	1~3 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.5	1.9	4.1	底蓋に指痕押印痕
120	1-121	土師瓦土器・環	1 mm程度の砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.5	1.9	4.2	
121	1-130	土師瓦土器・環	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.5	2.1	4.3	
122	1-131	土師瓦土器・環	1~2 mmの砂粒、雲母、灰石を含む	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.5	2.1	4.4	底蓋に指痕押印痕と灰状押痕
123	1-219	土師瓦土器・環	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.5	1.9	4.4	
124	1-143	土師瓦土器・環	1 mm程度の砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.5	1.8	4.0	
125	1-247	土師瓦土器・環	1~2 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.5	1.8	4.3	底蓋に指痕押印痕
126	1-268	土師瓦土器・環	1~2 mmの砂粒、雲母、角閃石を多く含む	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.5	2.1	4.0	底蓋に指痕押印痕
127	1-289	土師瓦土器・環	1~2 mmの砂粒、雲母、角閃石を多く含む	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.5	2.1	3.7	
128	1-128	土師瓦土器・環	1~2 mmの砂粒、雲母、角閃石を多く含む	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.6	2.0	4.6	底蓋に指痕押印痕
129	1-155	土師瓦土器・環	1~2 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底蓋赤切り薄し	C-T1	環土	6.6	1.7	4.3	底蓋に指痕押印痕

標記 番号	家洲 番号	器 型	胎 土	知 底	土 色 (内/外)	割 面 調 整 (内/外)	割 面 地 点	法 量 (cm)			備 考	
								口径	器高	底径		
130	1-184	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	いみじい/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し	C-11	甌土	6.6	1.9	4.4	底部に指痕押圧痕
131	1-195	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し	C-11	甌土	6.6	2.0	4.1	
132	1-198	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し	C-11	甌土	6.6	1.9	4.2	
133	1-249	土師質土器・杯	1 mm程度の砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し	C-11	甌土	6.6	2.0	4.3	
134	1-217	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	橙/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し?	C-11	甌土	6.6	1.9	4.3	
135	1-217	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し?	C-11	甌土	6.6	1.9	4.2	
136	1-120	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	橙/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し	C-11	甌土	6.7	2.0	4.6	
137	1-130	土師質土器・杯	1 mm程度の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	橙/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し	C-11	甌土	6.7	1.9	4.0	
138	1-152	土師質土器・杯	1~5 mmの砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し	C-11	甌土	6.7	1.8	4.2	
139	1-170	土師質土器・杯	1 mm程度の砂粒、雲母を少量含む	良好	橙/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し	C-11	甌土	6.7	2.0	4.2	
140	1-173	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	橙/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し	C-11	甌土	6.7	2.1	4.0	
141	1-234	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し?	C-11	甌土	6.7	1.9	4.4	
142	1-250	土師質土器・杯	1~2 mm程度の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	橙/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し	C-11	甌土	6.7	2.1	4.3	
143	1-265	土師質土器・杯	1~2 mm程度の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	橙/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し	C-11	甌土	6.7	1.8	4.4	
144	1-203	土師質土器・杯	1 mm程度の砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し	C-11	甌土	6.7	1.9	4.5	
145	1-216	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し	C-11	甌土	6.7	1.8	4.2	
146	1-212	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	橙/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し	C-11	甌土	6.7	2.0	4.3	
147	1-228	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し	C-11	甌土	6.7	2.0	4.3	
148	1-239	土師質土器・杯	1 mm程度の砂粒、雲母を少量含む	良好	橙/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し?	C-11	甌土	6.7	2.0	3.9	
149	1-248	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	橙/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し	C-11	甌土	6.7	1.8	4.2	
150	1-261	土師質土器・杯	1~4 mm程度の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	橙/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し	C-11	甌土	6.7	2.0	4.4	
151	1-277	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し?	C-11	甌土	6.6	1.5	4.2	
152	1-286	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母、角閃石を多く含む	良好	橙/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し	C-11	甌土	6.7	1.6	4.1	
153	1-91	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	橙/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し	C-11	甌土	6.7	2.2	4.1	
154	1-118	土師質土器・杯	1~2.5 mmの砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し	C-11	甌土	6.8	2.0	4.2	
155	1-208	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	橙/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し?	C-11	甌土	6.8	1.9	3.9	
156	1-211	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し	C-11	甌土	6.8	2.0	4.0	
157	1-246	土師質土器・杯	1~5 mmの砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し	C-11	甌土	6.8	2.0	4.6	
158	1-284	土師質土器・杯	1~3 mm程度の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	橙/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し	C-11	甌土	6.8	1.9	4.4	
159	1-282	土師質土器・杯	1~5 mmの砂粒、雲母、角閃石を多く含む	良好	橙/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し?	C-11	甌土	6.8	1.9	4.5	
160	1-288	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し	C-11	甌土	6.8	2.0	4.1	
161	1-92	土師質土器・杯	1~5 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	橙/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し	C-11	甌土	6.8	2.0	4.0	
162	1-151	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	橙/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し	C-11	甌土	6.8	1.8	4.5	
163	1-115	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し	C-11	甌土	6.8	2.0	4.5	
164	1-193	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母、角閃石を多く含む	良好	橙/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し?	C-11	甌土	6.8	2.0	4.5	
165	1-199	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し?	C-11	甌土	6.8	1.9	4.2	
166	1-227	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し?	C-11	甌土	6.8	2.0	4.3	
167	1-145	土師質土器・杯	1 mm程度の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	橙/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し	C-11	甌土	6.8	2.1	4.3	
168	1-215	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し	C-11	甌土	6.9	2.1	4.0	
169	1-269	土師質土器・杯	1 mm程度の砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	同胎ナア/同胎ナア、底漆赤切り磨し	C-11	甌土	6.9	1.9	3.9	

測地 番号	宗地 番号	地種	地 積	土 質	地況	色調(内/外)	通風距離(内/外)	調査 地点	位置	法量 (cm)		備 考	
										断面	底径		
170	1-278	土師質土器・坏	1~2 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	燈/燈	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し	C-T1	圃土	6.9	1.9	4.5	底部に指押印在
171	1-823	土師質土器・坏	1 mm程度の砂粒、雲母を含む	良好	良好	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し	C-T1	圃土	6.9	2.1	4.4	底部に板状圧痕
172	1-123	土師質土器・坏	1~2 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	燈/燈	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し?	C-T1	圃土	6.9	1.9	4.5	
173	1-134	土師質土器・坏	1 mm程度の砂粒、雲母、石英を含む	良好	燈/燈	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し?	C-T1	圃土	6.9	2.0	4.3	
174	1-214	土師質土器・坏	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	燈/燈	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し?	C-T1	圃土	6.9	1.9	4.5	底部に指押印在
175	1-223	土師質土器・坏	1~2 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	燈/燈	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し?	C-T1	圃土	6.9	1.9	4.1	
176	1-220	土師質土器・坏	1~4 mmの砂粒、雲母、角閃石を多量含む	良好	燈/燈	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し	C-T1	圃土	6.9	2.0	4.1	
177	1-117	土師質土器・坏	1 mm程度の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	良好	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し	C-T1	圃土	7.0	1.9	4.3	
178	1-148	土師質土器・坏	1 mm程度の砂粒、雲母、角閃石を多量含む	良好	良好	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し	C-T1	圃土	7.0	1.9	4.6	底部に指押印在
179	1-154	土師質土器・坏	1 mm程度の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	燈/燈	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し	C-T1	圃土	7.0	2.0	4.5	底部に指押印在
180	1-207	土師質土器・坏	1 mm程度の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	燈/燈	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し	C-T1	圃土	7.0	1.9	4.5	
181	1-215	土師質土器・坏	1~2 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	燈/燈	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し?	C-T1	圃土	7.0	2.1	4.2	
182	1-218	土師質土器・坏	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	燈/燈	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し?	C-T1	圃土	7.0	2.0	4.5	
183	1-225	土師質土器・坏	1 mm以下の細か/砂粒、雲母を少量含む	良好	燈/燈	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し	C-T1	圃土	7.0	2.0	3.5	
184	1-226	土師質土器・坏	1~5 mmの砂粒、雲母を含む	良好	燈/燈	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し	C-T1	圃土	7.0	1.9	4.5	底部に板状圧痕
185	1-245	土師質土器・坏	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	燈/燈	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し	C-T1	圃土	7.0	1.9	4.7	底部に指押印在
186	1-275	土師質土器・坏	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	燈/燈	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し	C-T1	圃土	7.0	2.0	4.1	
187	1-202	土師質土器・坏	1~2 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	燈/燈	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し	C-T1	圃土	7.1	1.9	4.3	
188	1-283	土師質土器・坏	1 mm程度の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	燈/燈	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し?	C-T1	圃土	7.1	2.0	3.9	底部に指押印在
189	1-241	土師質土器・坏	1~4 mmの砂粒、雲母を含む	良好	燈/燈	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し?	C-T1	圃土	7.1	2.0	4.3	
190	1-237	土師質土器・坏	1~2 mmの砂粒、雲母を少量含む	良好	燈/燈	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し	C-T1	圃土	7.2	2.0	4.2	
191	1-264	土師質土器・坏	1~5 mmの砂粒、雲母を含む	良好	燈/燈	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し	C-T1	圃土	7.2	1.7	4.2	
192	1-290	土師質土器・坏	1 mm程度の砂粒、雲母を少量含む	良好	燈/燈	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し	C-T1	圃土	7.3	1.9	4.6	底部に指押印在
193	1-82	土師質土器・坏	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	燈/燈	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し?	C-T1	圃土	7.3	1.9	4.6	底部に板状圧痕
194	1-147	土師質土器・坏	1~5 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	燈/燈	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し	C-T1	圃土	7.5	2.0	4.9	
195	1-188	土師質土器・坏	1~2 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	燈/燈	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し?	C-T1	圃土	7.7	2.2	4.1	
196	1-157	土師質土器・坏	1~3 mmの砂粒、雲母を少量含む	良好	燈/燈	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し?	C-T1	圃土	8.5	2.5	4.9	
197	1-153	土師質土器・坏	1~2 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	燈/燈	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し	C-T1	圃土	8.6	2.4	5.2	
198	1-159	土師質土器・坏	1~3 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	燈/燈	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し	C-T1	圃土	8.6	2.5	5.0	
199	1-133	土師質土器・坏	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	燈/燈	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し?	C-T1	圃土	8.6	2.2	5.0	
200	1-233	土師質土器・坏	1~3 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	燈/燈	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し?	C-T1	圃土	8.7	2.5	4.7	
201	1-84	土師質土器・坏	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	良好	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し	C-T1	圃土	8.7	2.4	4.7	工具、底部に指押印在
202	1-161	土師質土器・坏	1~3 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	燈/燈	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し	C-T1	圃土	8.7	2.3	5.0	内部に指押印の残跡
203	1-161	土師質土器・坏	1~3 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	燈/燈	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し	C-T1	圃土	8.7	2.3	5.1	底部に指押印在
204	1-177	土師質土器・坏	1~4 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	良好	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し	C-T1	圃土	8.7	2.4	5.4	底部に指押印在
205	1-185	土師質土器・坏	1~5 mmの砂粒、雲母を含む	良好	燈/燈	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し	C-T1	圃土	8.7	2.6	5.0	底部に指押印在
206	1-254	土師質土器・坏	1~2 mm程度の砂粒、角閃石を含む	良好	燈/燈	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し	C-T1	圃土	8.7	2.1	4.8	底部に指押印在
207	1-159	土師質土器・坏	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	良好	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し	C-T1	圃土	8.8	2.5	5.4	
208	1-93	土師質土器・坏	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	燈/燈	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し?	C-T1	圃土	8.8	2.7	5.2	
209	1-96	土師質土器・坏	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	燈/燈	良好	回転ナア/回転ナア、底径未切り履し?	C-T1	圃土	8.8	2.2	5.0	

神宮 番号	実測 番号	器 種	土	焼成	色調 (内/外)	断面図様 (内/外)	調査 地点	層位	口 径 (cm)		備 考
									口径	高さ	
210	1-157	土師瓦土器・環	1 mm程度の砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し	C-71	Ⅱ土	8.8	2.6	5.0
211	1-157	土師瓦土器・環	1 ~ 2 mmの砂粒、雲母を含む	やや橙/橙	橙/橙	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し?	C-71	Ⅱ土	8.8	2.4	4.7
212	1-271	土師瓦土器・環	1 ~ 2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	黒黄緑/黒黄緑	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し	C-71	Ⅱ土	8.8	2.2	4.7
213	1-140	土師瓦土器・環	1 ~ 3 mmの砂粒、雲母を含む	良好	黒黄緑/黒黄緑	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し	C-71	Ⅱ土	8.9	2.3	5.1
214	1-272	土師瓦土器・環	1 ~ 2 mm程度の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	橙/橙	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し	C-71	Ⅱ土	8.9	2.3	5.3
215	1-80	土師瓦土器・環	1 ~ 2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し	C-71	Ⅱ土	8.9	2.5	5.1
216	1-106	土師瓦土器・環	1 mm程度の砂粒、雲母を含む	良好	黒土、黒い黄緑	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し	C-71	Ⅱ土	8.9	2.5	4.8
217	1-126	土師瓦土器・環	1 ~ 3 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	やや橙/橙	黒黄緑/黒黄緑	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し?	C-71	Ⅱ土	8.9	2.2	4.9
218	1-168	土師瓦土器・環	1 ~ 3 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	橙/橙	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し	C-71	Ⅱ土	8.9	2.5	5.5
219	1-175	土師瓦土器・環	1 ~ 3 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	にオレンジ	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し	C-71	Ⅱ土	8.9	2.1	5.1
220	1-176	土師瓦土器・環	1 ~ 2 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	にオレンジ	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し	C-71	Ⅱ土	8.9	2.5	4.9
221	1-179	土師瓦土器・環	1 ~ 2 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	橙/橙	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し	C-71	Ⅱ土	8.9	2.3	5.1
222	1-180	土師瓦土器・環	1 ~ 2 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	橙/橙	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し	C-71	Ⅱ土	8.9	2.3	5.1
223	1-230	土師瓦土器・環	1 ~ 4 mmの砂粒、雲母を含む	やや橙/橙	橙/橙	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し	C-71	Ⅱ土	8.9	2.4	4.9
224	1-241	土師瓦土器・環	1 ~ 2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し	C-71	Ⅱ土	8.9	2.3	5.1
225	1-77	土師瓦土器・環	1 mm程度の砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し	C-71	Ⅱ土	8.9	2.4	5.8
226	1-78	土師瓦土器・環	1 ~ 3 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	橙/橙	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し	C-71	Ⅱ土	9.0	2.5	5.2
227	1-87	土師瓦土器・環	1 mm程度の砂粒、雲母を少量に含む	良好	橙/橙	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し?	C-71	Ⅱ土	9.0	2.6	5.2
228	1-88	土師瓦土器・環	1 ~ 4 mmの砂粒、雲母を含む	良好	暗緑黄/黄、黒赤	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し	C-71	Ⅱ土	9.0	2.2	5.0
229	1-96	土師瓦土器・環	1 ~ 4 mmの砂粒、雲母を含む	良好	暗緑黄/黄、黒赤	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し	C-71	Ⅱ土	9.0	2.4	4.6
230	1-106	土師瓦土器・環	1 ~ 2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し	C-71	Ⅱ土	9.0	2.5	4.8
231	1-109	土師瓦土器・環	1 ~ 3 mmの砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し	C-71	Ⅱ土	9.0	2.5	5.6
232	1-169	土師瓦土器・環	1 ~ 2 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	橙/橙	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し	C-71	Ⅱ土	9.0	2.5	5.4
233	1-171	土師瓦土器・環	1 ~ 2 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	橙/橙、明黄/黄、明黄	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し	C-71	Ⅱ土	9.0	2.3	5.1
234	1-186	土師瓦土器・環	1 mm程度の砂粒、雲母、角閃石を少量含む	良好	にオレンジ	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し	C-71	Ⅱ土	9.0	2.5	5.3
235	1-196	土師瓦土器・環	1 ~ 2 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	橙/橙	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し	C-71	Ⅱ土	9.0	2.7	4.7
236	1-200	土師瓦土器・環	1 ~ 3 mmの砂粒、雲母を含む	やや橙/橙	明黄/黄、明黄	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し	C-71	Ⅱ土	9.0	2.5	5.3
237	1-238	土師瓦土器・環	1 ~ 2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し?	C-71	Ⅱ土	9.0	2.2	5.6
238	1-255	土師瓦土器・環	1 ~ 3 mm程度の砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し	C-71	Ⅱ土	9.0	2.5	5.0
239	1-278	土師瓦土器・環	1 ~ 3 mm程度の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	橙/橙	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し	C-71	Ⅱ土	9.0	2.4	5.3
240	1-254	土師瓦土器・環	1 ~ 2 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	橙/橙	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し	C-71	Ⅱ土	9.0	2.4	4.8
241	1-89	土師瓦土器・環	1 ~ 3 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	橙/橙	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し	C-71	Ⅱ土	9.1	2.7	4.6
242	1-97	土師瓦土器・環	1 ~ 2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	にオレンジ	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し?	C-71	Ⅱ土	9.1	2.5	5.3
243	1-99	土師瓦土器・環	1 ~ 2.5mmの砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し	C-71	Ⅱ土	9.1	2.1	5.2
244	1-103	土師瓦土器・環	1 ~ 3 mmの砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し	C-71	Ⅱ土	9.1	2.3	5.3
245	1-194	土師瓦土器・環	1 ~ 3 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	橙/橙	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し	C-71	Ⅱ土	9.1	2.7	5.5
246	1-210	土師瓦土器・環	1 ~ 3 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	橙/橙、明黄/黄、明黄	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し	C-71	Ⅱ土	9.1	2.2	5.5
247	1-236	土師瓦土器・環	1 ~ 5 mmの砂粒、雲母、長石を含む	良好	橙/橙、明黄/黄、明黄	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し	C-71	Ⅱ土	9.1	2.8	5.2
248	1-79	土師瓦土器・環	1 ~ 4 mmの砂粒、雲母、長石を含む	良好	橙/橙	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し?	C-71	Ⅱ土	9.1	2.2	5.6
249	1-100	土師瓦土器・環	1 ~ 2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	橙/橙	同乾ナア/同乾ナア、底部糸切刃磨し	C-71	Ⅱ土	9.1	2.5	5.1

底面に紫斑状瓦、内面に
瓦は紫斑の残存

採点 番号	試料 番号	試料 器	土 質	地質 記号	地質 説明	地質 調査 結果	土質		注	備考			
							液性 指数	塑性 指数					
230	1-102	土質試土器・杯	1 mm 粒度の砂粒、雲母を含む	良好	色調 / (内/外)	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.1	2.6	5.1	底部に指頭押圧痕、内面に 互に癒きの痕跡
251	1-104	土質試土器・杯	1 ~ 5 mm の砂粒、雲母を含む	良好	乾 / 乾	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.1	2.7	4.7	
252	1-107	土質試土器・杯	1 ~ 2 mm の砂粒、雲母を含む	良好	乾 / 乾	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.1	2.3	5.9	底部に指頭押圧痕、内面に 互に癒きの痕跡
253	1-115	土質試土器・杯	1 ~ 2.5mm の砂粒、雲母を含む	良好	乾 / 乾	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.1	2.5	5.5	
254	1-132	土質試土器・杯	1 ~ 2 mm の砂粒、雲母を含む	良好	乾 / 乾	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.1	2.4	5.3	底部に指頭押圧痕
255	1-181	土質試土器・杯	1 ~ 2 mm の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	乾 / 乾	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.1	2.5	5.0	
256	1-192	土質試土器・杯	1 ~ 4 mm の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	乾 / 乾	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.1	2.3	5.5	底部に指頭押圧痕
257	1-204	土質試土器・杯	1 ~ 3 mm の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	乾 / 乾	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.1	2.4	5.6	
258	1-243	土質試土器・杯	1 ~ 2 mm の砂粒、雲母を含む	良好	乾 / 乾	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.1	2.5	5.4	底部に指頭押圧痕？
259	1-253	土質試土器・杯	1 ~ 2 mm の砂粒、雲母を含む	良好	乾 / 乾	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.1	2.5	5.1	
260	1-257	土質試土器・杯	1 ~ 5 mm の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	乾 / 乾	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.1	2.5	4.6	底部に指頭押圧痕
261	1-281	土質試土器・杯	1 ~ 3 mm の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	乾 / 乾	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.1	2.5	4.7	
262	1-282	土質試土器・杯	1 ~ 2 mm の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	乾 / 乾	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.1	2.5	4.7	底部に指頭押圧痕
263	1-149	土質試土器・杯	1 mm 粒度の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	乾 / 乾	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.2	2.4	5.2	
264	1-158	土質試土器・杯	1 ~ 2 mm の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	乾 / 乾	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.2	2.7	4.9	底部に指頭押圧痕
265	1-162	土質試土器・杯	1 ~ 2 mm の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	乾 / 乾	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.2	2.4	5.5	
266	1-174	土質試土器・杯	1 ~ 3 mm の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	乾 / 乾	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.2	2.5	5.2	底部に指頭押圧痕
267	1-178	土質試土器・杯	1 ~ 2 mm の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	乾 / 乾	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.2	2.7	5.4	
268	1-190	土質試土器・杯	1 ~ 2 mm の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	乾 / 乾	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.2	2.3	5.5	底部に指頭押圧痕
269	1-229	土質試土器・杯	1 mm 程度の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	乾 / 乾	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.2	2.9	3.8	
270	1-160	土質試土器・杯	1 ~ 3 mm の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	乾 / 乾	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.2	2.3	5.0	底部に指頭押圧痕
271	1-164	土質試土器・杯	1 ~ 2 mm の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	乾 / 乾	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.2	2.7	5.0	
272	1-166	土質試土器・杯	1 ~ 2 mm の砂粒、雲母、長石を含む	良好	乾 / 乾	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.2	2.7	5.1	底部に指頭押圧痕
273	1-180	土質試土器・杯	1 ~ 2 mm の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	乾 / 乾	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.2	2.6	5.3	
274	1-113	土質試土器・杯	1 ~ 3 mm の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	乾 / 乾	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.3	2.2	5.5	底部に指頭押圧痕
275	1-124	土質試土器・杯	1 ~ 2 mm の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	乾 / 乾	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.3	2.7	5.2	
276	1-127	土質試土器・杯	1 ~ 4 mm の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	乾 / 乾	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.3	2.5	5.2	底部に指頭押圧痕
277	1-282	土質試土器・杯	1 mm 程度の砂粒、雲母を含む	良好	乾 / 乾	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.3	2.7	4.8	
278	1-83	土質試土器・杯	1 ~ 2 mm の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	乾 / 乾	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.3	2.5	5.2	底部に指頭押圧痕
279	1-123	土質試土器・杯	1 ~ 2 mm の砂粒、雲母、長石を含む	良好	乾 / 乾	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.3	2.5	5.2	
280	1-130	土質試土器・杯	1 ~ 2 mm の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	乾 / 乾	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.3	2.4	5.8	底部に指頭押圧痕
281	1-165	土質試土器・杯	1 ~ 3 mm の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	乾 / 乾	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.3	2.4	5.4	
282	1-242	土質試土器・杯	1 ~ 2 mm の砂粒、雲母を含む	良好	乾 / 乾	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.3	2.6	4.9	底部に指頭押圧痕
283	1-232	土質試土器・杯	1 ~ 3 mm の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	乾 / 乾	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.3	2.4	5.1	
284	1-174	土質試土器・杯	1 ~ 2 mm の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	乾 / 乾	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.4	2.6	5.7	底部に指頭押圧痕
285	1-176	土質試土器・杯	1 ~ 2 mm の砂粒、雲母を含む	良好	乾 / 乾	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.4	2.7	5.5	
286	1-112	土質試土器・杯	1 ~ 2 mm の砂粒、雲母を含む	良好	乾 / 乾	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.4	2.7	5.2	底部に指頭押圧痕
287	1-135	土質試土器・杯	1 ~ 3 mm の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	乾 / 乾	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.4	2.6	5.9	
288	1-201	土質試土器・杯	1 ~ 2 mm の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	乾 / 乾	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.4	2.4	5.3	底部に指頭押圧痕
289	1-232	土質試土器・杯	1 ~ 3 mm の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	乾 / 乾	同乾ナマ / 同乾ナマ	同乾ナマ / 同乾ナマ	C-T1	埋土	9.4	2.6	5.5	

種別 番号	発掘 番号	器種	土	焼成	色調(内/外)	表面調整(内/外)	調査 地点	法量(cm)		備考		
								口径	底径			
290	1-256	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	靑/靑	回転ナデ/回転ナデ、底部高切り履し	C-T1	廻土	9.4	2.4	5.2	底部に指痕押圧痕
291	1-280	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	不真	靑/靑	回転ナデ/回転ナデ、底部高切り履し	C-T1	廻土	9.4	2.7	5.7	底部に指痕押圧痕?
292	1-209	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、雲母を含む	良好	靑/靑	回転ナデ/回転ナデ、底部高切り履し?	C-T1	廻土	9.4	2.2	5.3	
293	1-273	土師質土器・杯	1~4 mmの砂粒、雲母を多く含む	良好	靑/靑	回転ナデ/回転ナデ、底部高切り履し	C-T1	廻土	9.4	2.5	5.2	
294	1-156	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	靑/靑	回転ナデ/回転ナデ、底部高切り履し	C-T1	廻土	9.5	2.2	5.0	底部に指痕押圧痕
295	1-191	土師質土器・杯	1~4 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	靑/靑	回転ナデ/回転ナデ、底部高切り履し	C-T1	廻土	9.5	2.3	5.2	底部に指痕押圧痕
296	1-270	土師質土器・杯	1~4 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	靑/靑	回転ナデ/回転ナデ、底部高切り履し	C-T1	廻土	9.5	2.4	4.9	
297	1-163	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	靑/靑	回転ナデ/回転ナデ、底部高切り履し	C-T1	廻土	9.5	2.3	5.5	
298	1-101	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、雲母を含む	良好	靑/靑	回転ナデ/回転ナデ、底部高切り履し?	C-T1	廻土	9.6	2.5	5.6	
299	1-105	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	靑/靑	回転ナデ/回転ナデ、底部高切り履し	C-T1	廻土	9.6	2.6	5.2	
300	1-128	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	靑/靑	回転ナデ/回転ナデ、底部高切り履し	C-T1	廻土	9.6	2.5	5.8	
301	1-259	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	不真	靑/靑	回転ナデ/回転ナデ、底部高切り履し?	C-T1	廻土	9.6	2.7	4.8	
302	1-172	土師質土器・杯	1 mm程度の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	靑/靑	回転ナデ/回転ナデ、底部高切り履し	C-T1	廻土	9.7	2.4	5.4	底部に指痕押圧痕
303	1-138	土師質土器・杯	1~4 mmの砂粒、雲母を含む	良好	靑/靑	回転ナデ/回転ナデ、底部高切り履し?	C-T1	廻土	10.3	2.2	5.9	

遺構外出土遺物(土器)

種別 番号	発掘 番号	器種	土	焼成	色調(内/外)	表面調整(内/外)	調査 地点	法量(cm)		備考		
								口径	底径			
304	1-295	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、雲母を含む	良好	靑/靑	回転ナデ/後背履	H-2区	耕作土	7.5	2.2	4.6	灯明皿として使用
305	1-291	瓦葺土器・椀鉢	1~3 mmの砂粒を少量含む	良好	灰/灰	轆ナデ/轆ナデ	H-2区	耕作土	-	残4.8	-	東洋赤漆塗

遺構外出土遺物(陶磁器)

種別 番号	発掘 番号	器種	土	焼成	色調(内面/外面もしくは輪郭/胎土)	表面調整(内/外)	調査 地点	法量(cm)		備考	
								口径	底径		
306	1-26	白磁・碗	濃青	良好	胎:灰白/胎:灰白	地輪/ロクロケズリ?	1-T1	-	残4.1	7.7	朝鮮王朝陶器
307	1-15	青磁・菊風	濃青	良好	胎:靑/胎:靑	地輪/ロクロケズリ、高抽	H-3区	耕作土	残2.1	4.3	血E-4新
308	1-32	青磁・小皿	濃青	良好	胎:オリイ/胎/胎:灰白	地輪/ロクロケズリ、高抽	H-4区	T1	残2.4	2.5	奈良源系
309	1-27	青磁・椀	濃青	良好	胎:オリイ/胎/胎:灰白	地輪、高抽/高抽	H-2区	T5	残2.8	13.3	奈良源系、赤銅塗、内面に地輪
310	1-33	青磁・椀	濃青	良好	胎:灰白/胎/胎:灰白	片切彫、高抽/高抽	H-2区	耕作土	-	残5.4	奈良源系、太宰府分刻1-2区
311	1-41	青磁・椀	濃青	良好	胎:オリイ/胎/胎:灰白	地輪/高抽/高抽	H-2区	耕作土	残3.3	-	奈良源系、朝B-1類
312	1-10	青磁・碗	濃青	良好	胎:オリイ/胎/胎:灰白	地輪/ロクロケズリ、高抽	H-2区	耕作土	残2.7	5.2	奈良源系
313	1-72	陶器・漆片	濃青	良好	胎:灰白/胎:にぶい赤陶	轆ナデ/、高抽、高抽/回転ナデ	B地区	表探	残5.7	-	定南系

第4節 小 結

1974年度から1975年度にかけて実施した1次調査で、宇土城跡が中世の在地領主である宇土氏、名和氏の居城であることが明らかとなった。さらに当地において古墳時代に巨大な首長居館が存在したことが判明したことで遺跡の重要性がさらに高まったことなどから、昭和54年に国の史跡に指定された。

国指定に先立ち刊行された本文編と史料編からなる調査報告書で、検出遺構や出土遺物が掲載・報告されるとともに、関連史料がまとめられた(平山・高木ほか1977)。宇土城跡が中世の宇土において果たした役割を多角的な視点から分析しており、地域史を解明するうえで本調査が果たした役割は極めて大きかったといえる。その後、宇土市史編纂事業に伴い、多くが未報告だった首長居館の塚跡 SD01から出土した古墳時代の土師器が資料化され、時期的に対応する近隣の前方後円墳との比較検討がなされた(高木・武末2000)。

一方、宇土城跡に関する検出遺構や出土遺物については、1次調査報告で多くの遺構実測図が掲載され、規模や性格についても比較的詳細に記述がなされたものの、出土遺物については多くのものが未報告であった。本稿ではこれらの出土品を中心に資料化し、産地や年代などについて報告することを主な目的とした。

千畳敷を圍繞する横堀跡 SD02からは多く遺物が出土した。今回掲載した坯を中心とする土師質土器は未報告分を含めると出土遺物の9割以上を占めており極めて偏ったあり方を示す。SX02で300枚以上の坯が一括出土した土師質土器については、おおまかな分類が既になされていたが、今回残りがよいものを選別して報告した。これらは法量から大小2つのグループに分かれることが改めて明確になった。このことは、同じ土師質土器の坯でも大きさの違いで用途が使い分けられていた可能性を示唆するものとして重要である。

一方、陶磁器は備前焼や瀬戸・美濃産などの国産品も出土しているが、出土点数からいえば貿易陶磁器が卓越する。主たる貿易陶磁器の産地は、白磁が景德鎮産や福建産、青磁は龍泉窯系、染付は景德鎮産である。龍泉窯系に先行する阿安窯系青磁や、16世紀後半以降に増加する漳州窯系染付はほとんど出土していない。時期については、劃花文系や鋪蓮弁文の青磁などの12～14世紀代の中世前期を中心とする時期のものは比較的少なく、主体は中世後期の15～16世紀代であり、割合的には染付を中心とする16世紀代のものが多い。

なお、1次調査報告で千畳敷西側のSD02埋土で多くの遺物が出土した「黒褐色土に灰及び炭化物を含む層」が確認され、本層について『八代日記』に記載された天文7年、同11年の2度の火災に関連する可能性を示唆し、本稿においても当該土層から出土した遺物を掲載した。次章の9次発掘調査でも本層の堆積状況が再確認され、1次調査と同様に比較的多くの遺物が出土したことにより、本層の流入時期が廃城前後と推定されることが判明したが、このことについては後述する。

引用・参考文献

- 平山修一・高木恭二ほか 1977『宇土城跡(西岡台)』本文編 宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集 宇土市教育委員会
 木下洋介・元松茂樹 1988『宇土城跡(西岡台)』Ⅱ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第18集 同上
 高木恭二・武末純一 2000『西岡台遺跡』『考古』新宇土市史基礎資料第9集 同上
 藤本貴仁 2000『宇土城跡(西岡台)』Ⅲ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第21集 同上
 藤本貴仁 2001『宇土城跡(西岡台)』Ⅳ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第22集 同上
 河川敏生 2002『西岡台遺跡』『新宇土市史』資料編第2巻 宇土市

- 金田一精 2002「西岡台遺跡」『新宇土市史』資料編第2巻 同上
- 藤本貴仁 2002『宇土城跡（西岡台）』Ⅴ 宇土市埋藏文化財調査報告書第23集 宇土市教育委員会
- 藤本貴仁 2003『宇土城跡（西岡台）』Ⅵ 宇土市埋藏文化財調査報告書第24集 同上
- 藤本貴仁 2004『宇土城跡（西岡台）』Ⅶ 宇土市埋藏文化財調査報告書第25集 同上

第4章 第9次発掘調査

第1節 調査の概要

(1) 調査の概要 (図29)

9次調査は平成9年6月から平成10年2月の期間で断続的に実施した。本調査は千畳敷を圍繞する横堀跡 (SD02) の保存整備工事に伴い、その形状を的確に把握することを主な目的とした。

本調査区は昭和49年度から50年度にかけて、宇土市教育委員会が行った千畳敷周辺における1次調査範囲と大部分が重複しており、1次調査で設定した「H地区」と呼ばれる千畳敷を取り囲む一段下がった平坦面に9次調査区は所在する。本地区の調査内容については、前章のとおりである。

H地区はH-1～4区、H-T1～T3、H-T3N、H-T4～T8に分けられ、調査終了後はこれらの調査区は埋め戻された。SD02の各調査区を隔てるセクションベルトや比較的広い未調査区域も存在することから、9次調査では埋め戻し土の除去とともに、この未掘範囲の発掘調査を実施した。

調査の結果、千畳敷南側から西側におけるSD02の全容が明らかになるとともに、SD01との重複状況もより明確に把握できた。また、SD01の埋土から古墳時代の土師器、SD02の埋土からは土師質土器や瓦質土器、白磁・青磁・染付などの陶磁器が豊富に出土した。

(2) 調査日誌抄

平成9年		12月18日	実測図作成 (同月19日まで)
6月23日	調査予定地の草刈開始		
25日	発掘調査開始。表土剥ぎ	平成10年	
7月15日	千畳敷西側の横堀跡 (SD02) の調査開始 (10月14日まで継続後、一時中断)	1月6日	千畳敷北西側SD02の調査再開 (同月19日まで)
8月4日	土層断面図実測	19日	千畳敷西側SD02の調査再開
8月20日	平成9年度第1回史跡宇土城跡保存整備検討委員会 (宇土城跡検討委) 開催。発掘調査現場の視察	21日	セクションベルトの発掘
9月22日	千畳敷北西側SD02の調査開始 (11月19日まで継続後、一時中断)	2月1日	遺物取り上げ、写真撮影 (同月3日まで)
11月5日	千畳敷南側SD02の調査開始	4日	航空写真撮影、調査終了
		3月17日	第2回宇土城跡検討委開催

第2節 検出遺構

SD01 (図29～31、図版11～13)

古墳時代の首長居館に伴う断面「Vの字」形の大きな壕跡である。1次調査の結果、8～9世紀頃に大部分が埋まったことが出土遺物によって明らかにされている。先述のとおり、1次調査及びその後の数次にわたる調査で配置状況がかなり明らかになっているが、以下では9次調査範囲の状況のみを記述する。

本遺構は千畳敷西側でSD02と重複しており、SD02の掘削に伴い大部分が消失している。現状ではSD02に平行し、南北方向に細長く延びる形状を呈す。検出規模は長さ約76m、残存幅約1.0～2.8m、

同底幅約0.1~0.2m、同深さ約1.2~2.3m、壁面の傾斜角度は内側で約65°、外側で約75°で、千疊敷とSD01底面の比高差は約6mである。また、底面は千疊敷西側中央付近で標高約30.3mと最も高く、その地点から北側、南側にそれぞれ緩やかに下降しており、その比高差は調査区北端付近で約1.5m、同南端付近で約0.6mである。

本調査区においてはSD01の大部分が破壊されているが、SD02と重複していない範囲では幅約5.2~

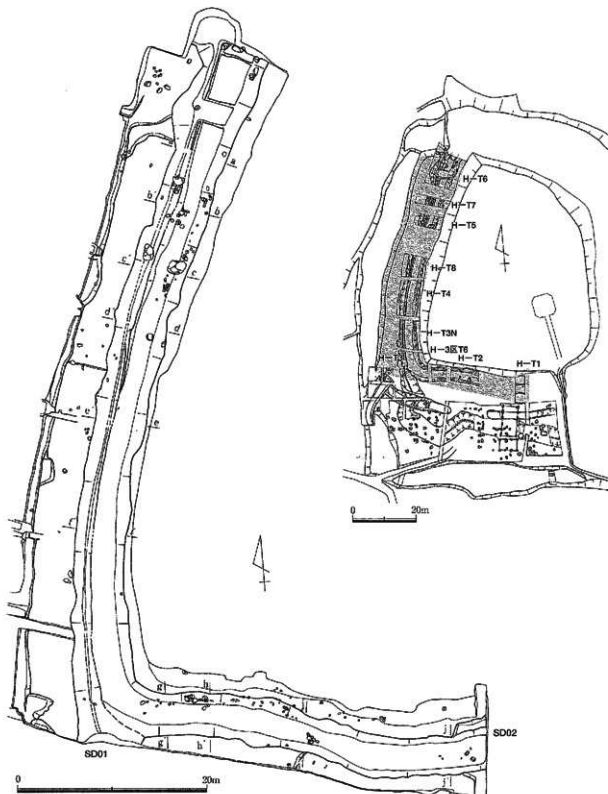


図29 9次調査区遺構配置図 (左図: 1/400, 右図: 1/1,200)

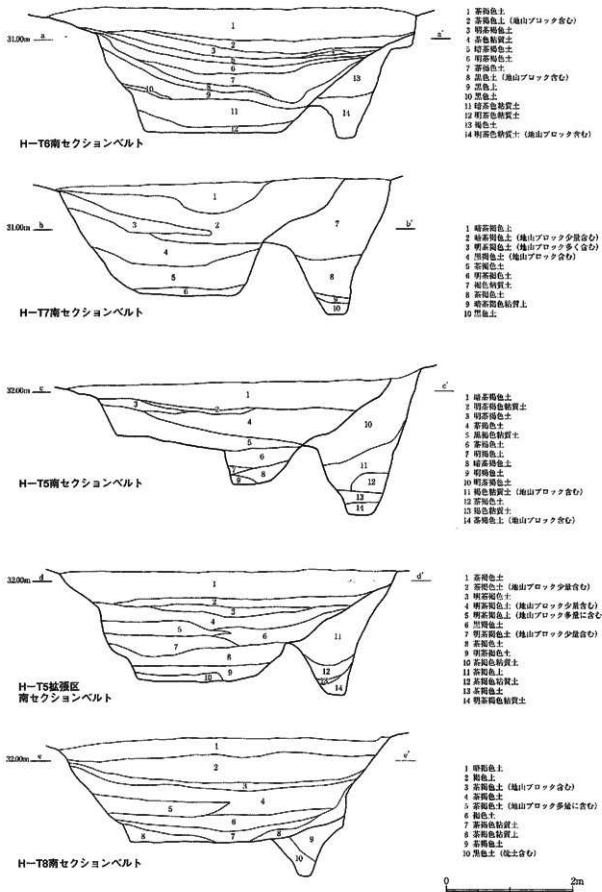


図30 SD01、SD02土層断面図1 (1/60)

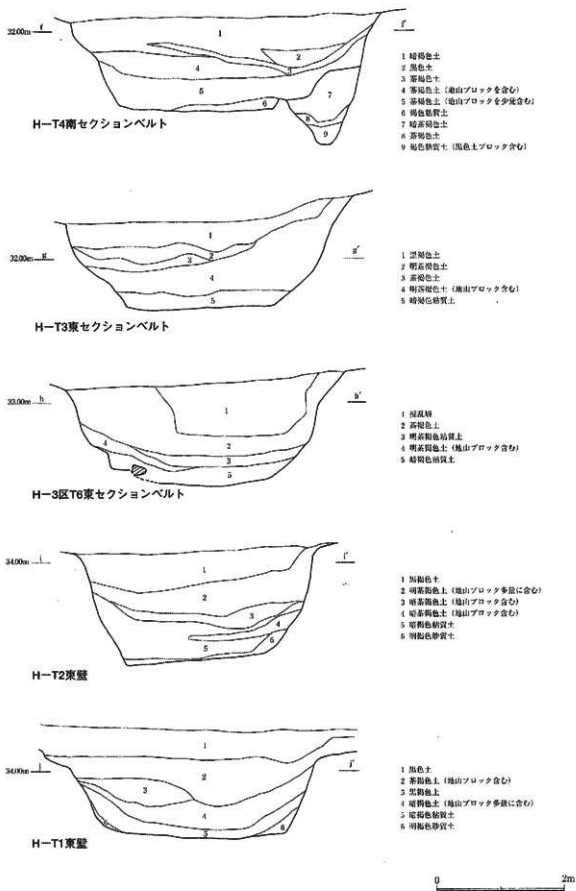


図31 SD01、SD02土層断面図2 (1/60)

6.4m、深さ約1.8～3.7mを測ることから、千疊敷西側においてもSD02造成前は同規模の遺構が残存していたとみてよい。

埋土より古墳時代の土師器の埴や高坏などが出土したが、出土量は比較的少なかった。

SD02 (図29～31、図版11～13)

断面逆台形の千疊敷を閉繞する横堀跡である。検出規模は長さ約109m、幅約3.2～5.7m、底幅約1.3～3.0m、深さ約1.3～3.0m、壁面の傾斜角度は約40°～60°で、千疊敷とSD02底面の比高差は約4.5～8mである。底面や壁面は丁寧に整形され、南東側から南西側コーナー部、西側の底面は平坦であるが、北西部の一部には段差がみられ様相が異なる。また、千疊敷南東側から同南側、さらに千疊敷南西側のコーナー部を経て北側に向けて緩やかに傾斜している。遺構の状況については1次調査結果に追加すべき新たな知見は特に得られなかった。

また、千疊敷西側において1次調査で確認した黒褐色土に灰及び炭化物を含む層を再確認した。千疊敷側から流れ込むようにしてSD02の下層から中層にかけてレンズ状に堆積しており、土層の形成状況から意図的にSD02を埋めたと推測される。

埋土より中世の土師質土器の皿や坏、瓦質土器の播鉢・火鉢・羽釜、備前焼の播鉢や火鉢、大甕、中国製の青磁・白磁・染付の皿や碗、陶器の大甕、五輪塔や宝篋印塔などの石塔残欠が出土した。

第3節 出土遺物

SD01 (図32、図版14)

1・2は古墳時代の土師器である。1は埴で約1/3部分が残存する。胴部は上下にやや潰れたような楕円形で口縁部は外側に大きく開く。磨耗のため判然としないが、内面にナデの痕跡が認められる。2は高坏である。脚部はやや広がり、裾部付近で強く屈曲する。脚部上端には坏部との接合のための刻み目が残る。これらは古墳時代前期に位置付けられる。

SD02 (図32～42、図版14～17)

3は須恵器の高坏の脚部である。やや太めの短脚で裾部付近から緩やかに外側に広がる。透かし穴はないが、坏部内面底には1cm弱の円形の穴があいている。

4～227は土師質土器で、4～175は坏、176～221は底部から体部にかけての破片であるが、坏もしくは皿とみられるもの、222は壺、223・224は高台付碗、225は耳皿、226・227は火鉢である。

4～221は全て回転台を用いており、内・外面とも回転ナデ調整で整形する。回転ヘラケズリはみられない。底部と体部の境は明瞭で、体部から外側に開きながら口唇部まで斜め上方に延びるものが大半を占める。口縁端部は丸くおさめる。

磨耗し、底部切り離し痕が明確でないものを除けば、全て糸切り痕のもので、ヘラ切り痕が残るものはない。底部縁辺部に指頭押圧痕が残るものもある。また、5・20・38は口縁部周縁に黒色の油痕が残ることから灯明皿として使用されたとみられる。

坏は法量から大小2群に分けることができる。4～42は口径が5.7～7.6cmと5cm後半～7cm半ばのもので、なかでも7cm前後に集中する小型の一群である。器高は1.7～2.5cmで2cm前後のものが多く、底径は3.1～5.0cmで4cm前後のものが多い。底部と体部の境は明瞭である。また、器形に関

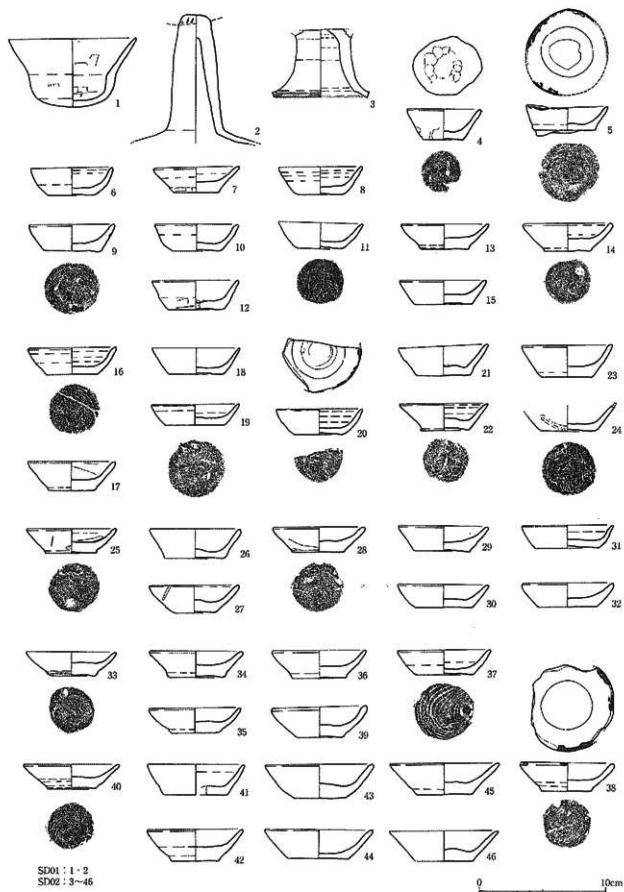


図32 SD01出土遺物、SD02出土遺物1 (1/3)

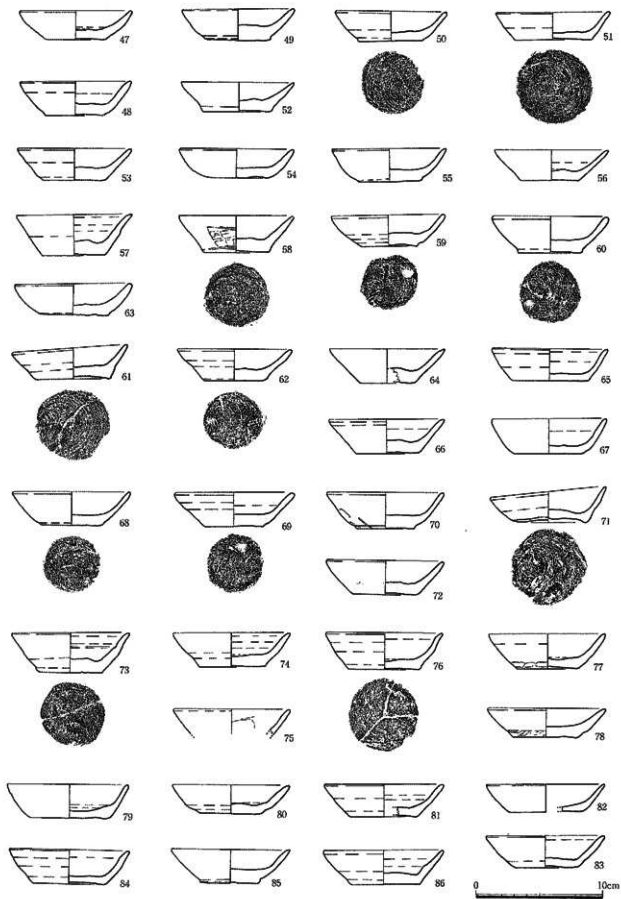


図33 SD02出土遺物 2 (1/3)

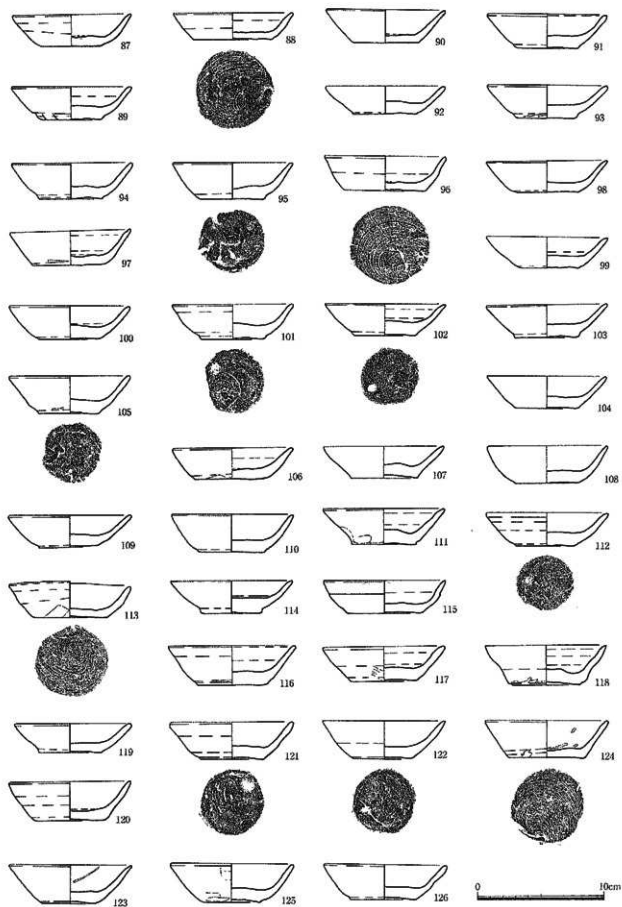


图34 SD02出土遺物3 (1/3)

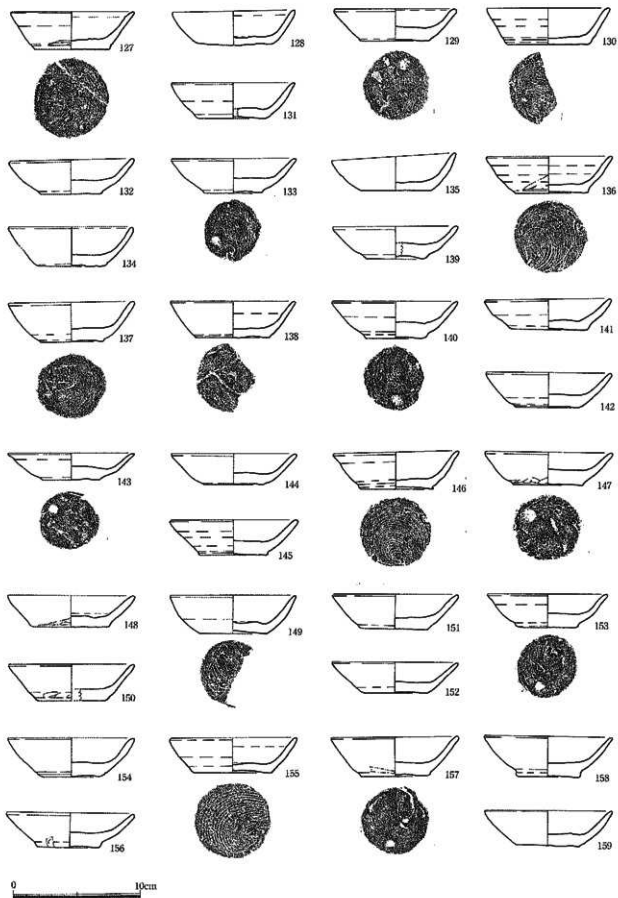


図35 SD02出土遺物4 (1/3)

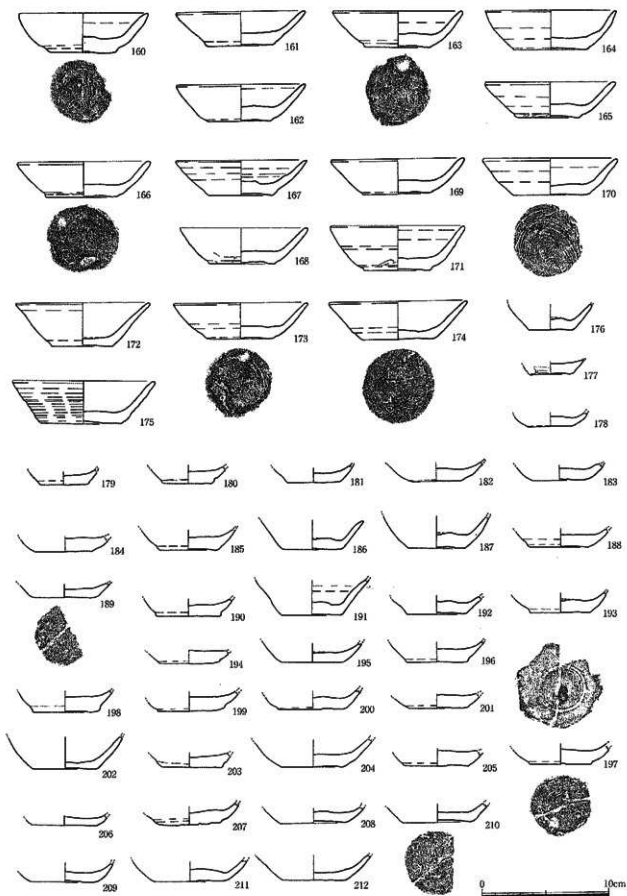


圖36 SD02出土遺物5 (1/3)

しては、7・13・17・22・27・33・34・40のように、底部から体部が斜め上方に広がり器高が低いものが多いが、10・12・26・41のように、底部径がやや大きく、前者にくらべ体部からの斜め上方にあまり広がらず、器高が高いものが一部にみられる。

一方、43～175は前者にくらべて大型で、口径が8.3～11.0cmのものであり、最も大きな175を除き、8cm～10cm台である。器高は2.1～3.5cmと2～3cm台半ばであり、2cm後半から3cm前後のものが多い。底径は4.0～6.2cmで、おおむね4cm後半から5cm後半までのものが主体である。上述の小型の坏を一回り大きくしたような形状を呈するものが大勢を占めるが、口径のわりには器高が低い78・88・143のようなものが少数ではあるが存在する。これらは皿として分類すべきかもしれない。また、基本的には、体部から斜め上方にほぼ直線的に広がるが、体部が丸みをもって口縁部にいたる54・63・108・149・164や、底部から体部・口縁部にかけて外反気味に広がる57・111なども存在する。

222は盤で、底部からはほぼ直角に体部が伸び、口縁端部は平坦である。223・224は台付碗で、223は脚台状を呈するが、224は陶磁器にみられるような高台状を呈する。225は耳皿で一般的な坏を完成した状態まで仕上げた後、口縁部を指で両側から摘んで成形する。226・227は火鉢。226は深鉢型の火鉢とみられ、口縁部下に突帯を有する。その上部に花文のスタンプが押される。227は浅鉢型の火鉢で、体部に断面三角形の3条の突帯を廻らす。口縁部下には2個一組の花文状のスタンプが残る。

228～237は瓦質土器である。228・229は捏鉢で、228は内・外面ともナデを施す。229は外面にタタキ、内面にハケメの痕跡が明瞭に残る。230～232は摺鉢で、内面に摺目がほぼ一定の間隔で施され、底部付近は使用により磨耗している。233～236は火鉢。233は体部に突帯が廻らないタイプの浅鉢型火鉢で、これまで宇土城跡ではほとんど出土していない。口縁部外面に竹管文のスタンプが施され、その下位に3個1組の菊文と竹管文のスタンプが交互に配される。また、口縁端部にも竹管文のスタンプが廻る。234～236は体部に突帯が廻る深鉢型の火鉢である。234は器壁が薄く、体部下位に2条の突帯があり、その間に花状の文様がスタンプされる。235も口縁部に格子状の文様と菊文、体部中位に3個連続する四角形の文様がスタンプで施文される。237は羽釜で口縁部付近に2箇所の耳穴を有する。

238・239は焼締陶器である。238は口縁部と肩部が残存する。口縁部は外反気味に端部を丸くおさめた後、内側に粘土紐を貼付けて端部を断面三角形に仕上げる。肩部には凹線が廻る。239は胴部中位以下が残る。平底でやや斜め上方に立ち上がる細長い筒状の壺であり、胴部内面に指ナデの痕跡が残る、同外面には凹線が廻る。これらは形態や胎土、焼成などの特徴から同一個体とみられる。

240は大甕で、口縁端部は粘土紐を貼り付けて成形する。薄い軸葉が割かっていた可能性があり、2次的に被熱している。16世紀代のもので、中国南部産か東南アジア産とみられる。

241～244は備前焼で、241は大甕、242・243は摺鉢、244は茶入とみられる。241は口縁部から頸部にかけての破片であり、色調は暗赤褐色(5YR3/2)。口縁部は粘土を外側に折り曲げることにより成形しており、玉縁状を呈する。真壁Ⅳ期。242の口縁部は幅広の鉢巻状を呈し、2条の凹線が廻って端部は断面三角形をなす。内・外面とも横ナアし、内面にカキ目を施す。色調は灰赤色(10R4/2)で、真壁Ⅴ期に位置付けられる。243は内面ナアの後、摺目を施す。色調はふい赤褐色(5YR5/4)や灰褐色(5YR5/2)を呈す。口縁部の断面は三角形で242より古い特徴をもち、真壁Ⅳ期に相当する。244は平底で胴部はほぼ垂直に立ち上がる。内面に回転ナアの痕跡が残る。外面は一般的な備前焼の色調と異なり青灰色(10BG5/1)を呈する。16世紀末～17世紀初頭。

245～250は施釉陶器。245は美濃・瀬戸産の天目茶碗で、腰部以下を欠く。口縁部は短く外反し、内

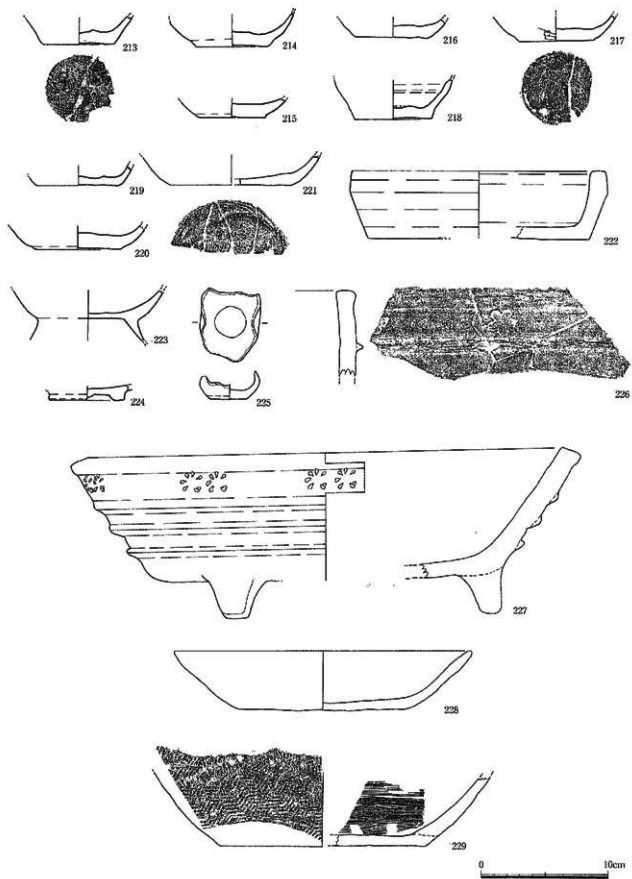


图37 SD02出土遺物6 (1/3)

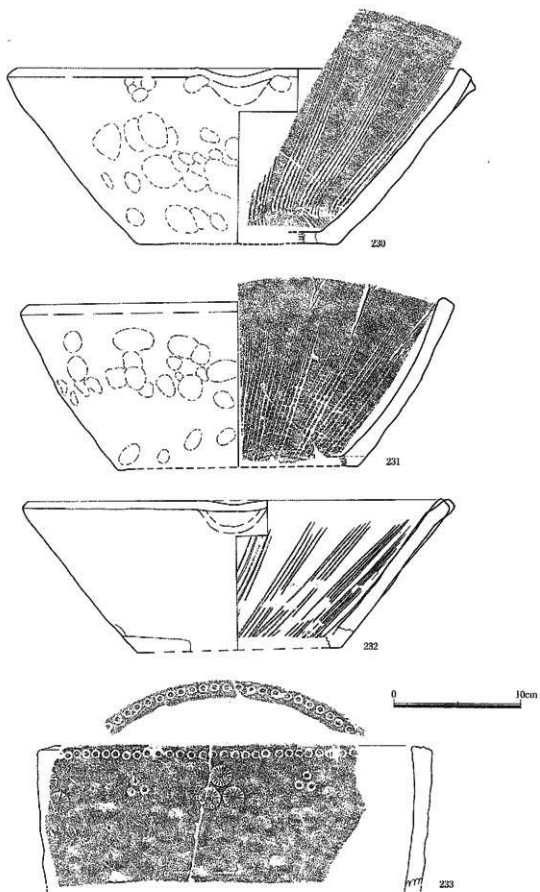


图38 SD02出土遺物7 (1/3)

面及び外面上位に黒色（7.5YR1.7/1）の釉を掛ける。窯変のため斑点状に銀色を呈する部分がある。246は江戸中期頃の肥前系の播鉢で、口縁部が外反する。247は16世紀代の中国南部産もしくは東南アジア産（ベトナム産）の壺で、口縁部が袋状に内湾する。内・外面に暗赤褐色（2.5YR3/3）の釉が掛かる。248は16世紀代の中国南部の福建・広東産とみられる壺で、内・外面ともナデを施し、外面体部中位より上に褐色（7.5YR4/3）の釉が掛かる。249はタイ産の耳付小型壺でおそらく双耳壺であろう。内・外面に掛かる釉の色は褐色（10YR3/3）。250は東南アジア産の可能性のある台付瓶とみられ、扁平な円形粘土板状の台がつく。

251～256は白磁で、251・252は碗、253～256は皿である。251は14～15世紀代の福建産と推定され、内・外面に灰白色（2.5Y8/4）の釉が掛かる。252は12～13世紀代の中国製で、内・外面に白い黄澄（10YR7/3）の釉を施す。253は景德鎮窯系で底部周縁に高台が付く。白色の釉で全面施釉後、疊付を釉剥ぎする。16世紀第4四半期～17世紀初頭。254は16世紀代の景德鎮窯系で、灰白色（2.5GY8/1.5GY8/1）の釉が全面施釉された後、疊付部分を釉剥ぎする。255は16世紀後半の中国製の端反り皿で、皿E

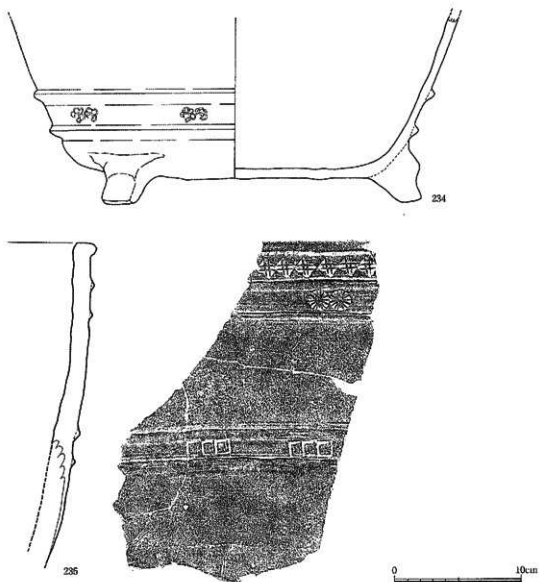


図39 SD02出土遺物8（1/3）

— 2群に分類される。軸は明オリブ灰色 (5GY7/1) や明緑灰色 (2.5GY7/1) を呈する。256は16世紀代の端反りの皿E—2群で、高台は台形状をなす。見込や高台内、畳付以外に灰白色 (10Y7/1) の軸が掛けられる。底部無軸の特徴より福建産であろう。

257～260は青磁で、257・258は碗、259は香炉、260は盤である。258～260は龍泉窯系であるが、257は福建産の可能性がある。257は15世紀～16世紀初めの焼成不良品で、内・外面に淡黄色 (2.5Y8/3) の軸が掛けられる。高台内と畳付は露胎。碗D群に属するものであろう。258は13世紀～14世紀中頃のもので、高台内以外に緑灰色 (10GY6/1) の軸が掛けられる。259は体部から底部にかけて丸みを帯び、全面に灰オリブ (7.5Y5/3) の釉薬が掛かる。14世紀後半～15世紀代。260は口縁部が「く」の字に折れる14世紀後半～15世紀初頭の盤である。外面に崖弁状の文様を表現し、内面には浅い片切彫で割花文系の文様を表現する。オリブ褐色 (2.5Y4/6) の軸が掛けられる。

261～269は染付。261～263は碗、264・265は小杯、266～269は皿で、264・265は肥前系、269は漳州窯系、それ以外は景德鎮窯系である。261は口縁部内・外面にそれぞれ1重の界線、外面に草花文を描

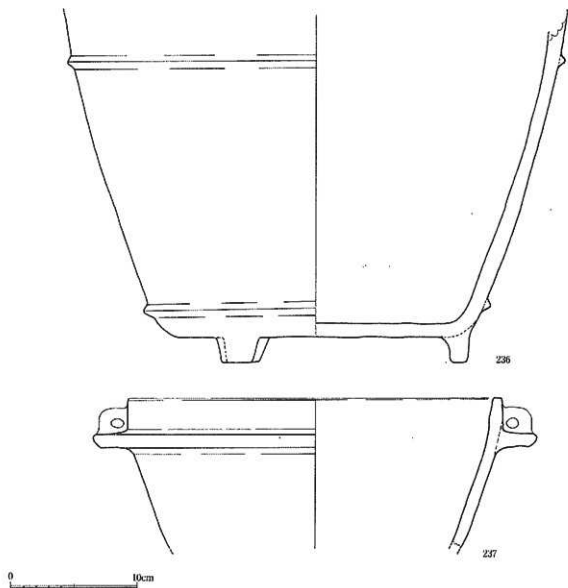


図40 SD02出土遺物9 (1/3)

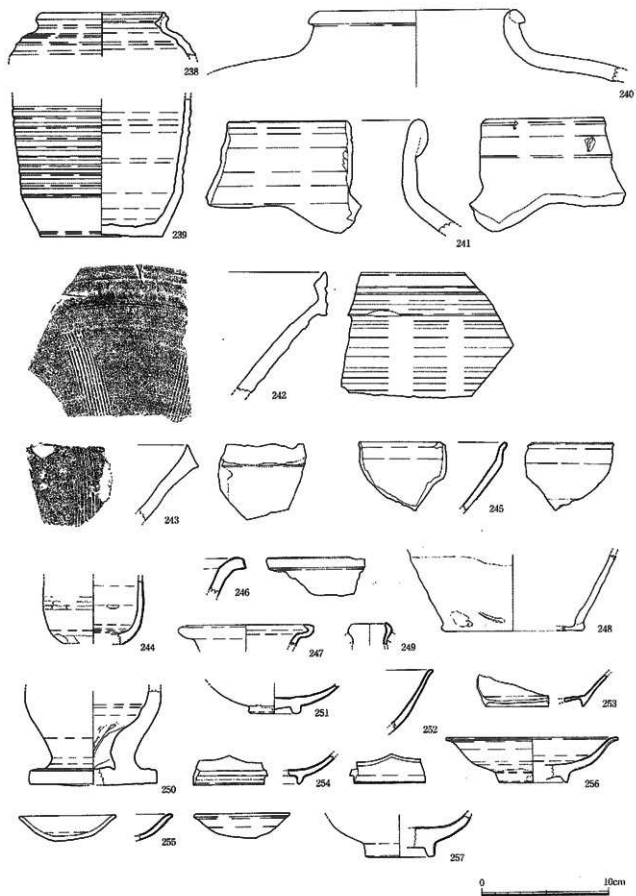


圖41 SD02出土遺物10 (1/3)

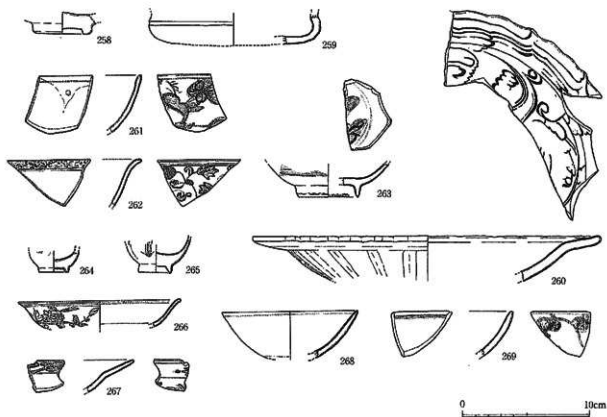


図42 SD02出土遺物11 (1/3)

いた後、明緑灰色 (10GY8/1~7/1) の釉を掛ける。16世紀後半~17世紀初頭。262は16世紀代の端反り碗B群で、2次的に被熱している。口縁部内面に四方摺文、同外面に2重界線、胴部外面に唐草文を描く。明緑灰色 (7.5GY8/1) の釉が掛けられている。263は見込に花卉文と外面に文様が描かれる。灰白色 (5GY8/1) の釉で全面施釉された後、皿付を釉剥ぎするが、砂が多く付着している。マントーシンの碗E群で16世紀後半。264は低い高台がつくもので、1630~1640年代。265は1640~1650年代の高台内無釉のもので、外面に蘭の模様が描かれる。266は端反り皿で、口縁部内・外面に2重の界線、胴部外面に牡丹唐草文もしくは花卉文が描かれ、灰白色 (N8/0) や明緑灰色 (2.5GY8/1) の釉が掛けられる。皿B群に分類され、16世紀後半~17世紀初頭。267は口縁部がくの字形に屈曲する皿F群。胴部内面には宝文が描かれ、明青灰色 (5B7/1) の釉が掛けられる。268は16世紀後半代で蓋筒底の可能性はある。269は外面に花樹文?を描き、内・外面に明オリブ灰色 (2.5GY7/1) の釉が掛かる。

表4 9次調査出土遺物観察表(カッコ内は復元値を示す)

相国 番号	器種	胎土	焼成	色調(内/外)	表面調整(内/外)	調査 地点	層位	法量(cm)		備考	
								口徑	高さ		
1	9-13 土師器・埴	1~5 mmの砂粒、雲母を含む	良好	黒い滑塗、朝滑	ヘラケズリ、ハケメ/ハケメ	-	Ⅷ上	5.4	-	釜台層に踏みを通す	
2	9-14 土師器・高木	1~5 mmの砂粒、雲母を含む	良好	黒/滑	ケズリ、ナマリ/ナマリ?	-	Ⅷ上	残10.2	-		
SD01											
3	9-242 須恵器・高杯	1~2 mmの砂粒を含む	良好	こげ/滑塗、黒	ヨコナデ/ヨコナデ	T6-T7	9	-	残5.4	7.3	
4	9-53 土師器・高杯	1 mm程度の砂粒、雲母を含む	良好	黒/滑	回転ナデ/回転ナデ	T5-T8	5	(5.7)	2.5	3.1	
5	9-207 土師器・土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母を少量含む	良好	黒/滑	回転ナデ/回転ナデ	T5-T8	5	6.3	2.6	4.4	口縁部部に油痕
6	9-112 土師器・土器・杯	1 mm程度の砂粒、雲母を含む	良好	浅黒/黒	回転ナデ/回転ナデ	-	Ⅷ上	(6.3)	2.0	3.6	
7	9-145 土師器・土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	浅黒/黒	回転ナデ/回転ナデ	T5-T7	4	6.5	2.2	3.5	
8	9-128 土師器・土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母を少量含む	良好	黒/滑	回転ナデ/回転ナデ	T6-T7	4	6.5	2.2	3.5	
9	9-130 土師器・土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	黒/滑	回転ナデ/回転ナデ	T6-T7	9	6.5	2.1	4.3	
10	9-59 土師器・土器・杯	雲母を少量含む	良好	黒/滑	回転ナデ/回転ナデ	T5-T8	5	(6.6)	2.1	3.8	
11	9-8 土師器・土器・杯	1 mm程度の砂粒、雲母を含む	良好	黒/滑	回転ナデ/回転ナデ	T6-T7	9	6.6	2.0	3.4	
12	9-106 土師器・土器・杯	1 mm程度の砂粒、雲母を少量含む	良好	こげ/滑塗、こげ/滑	回転ナデ/回転ナデ	T1-T2	2	(6.7)	2.3	4.3	
13	9-172 土師器・土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	黒/滑	回転ナデ/回転ナデ	T5-T7	4	(6.7)	2.0	3.6	
14	9-98 土師器・土器・杯	1~3 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	黒/滑	回転ナデ/回転ナデ	T1-T2	2	6.7	2.2	3.8	底部に指痕押圧痕
15	9-229 土師器・土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	黒/滑	回転ナデ/回転ナデ	T5-T7	9	6.7	1.9	4.3	
16	9-56 土師器・土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	黒/滑	回転ナデ/回転ナデ	T5-T8	5	6.8	2.1	4.0	
17	9-101 土師器・土器・杯	1~3 mmの砂粒、雲母を含む	良好	黒/滑	回転ナデ/回転ナデ	T1-T2	2	(6.8)	2.3	3.5	
18	9-228 土師器・土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母を少量含む	良好	黒/滑	回転ナデ/回転ナデ	T6-T7	9	6.8	2.1	4.0	
19	9-232 土師器・土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	浅黒/黒	回転ナデ/回転ナデ	T5-T8	5	6.8	1.7	4.5	
20	9-238 土師器・土器・杯	1 mm程度の砂粒、雲母を少量含む	良好	黒/滑	回転ナデ/回転ナデ	T5-T7	4	6.8	2.0	3.8	口縁部部に油痕
21	9-47 土師器・土器・杯	1 mm程度の砂粒を含む	良好	黒/滑	回転ナデ/回転ナデ	T5-T8	5	6.9	2.3	4.2	
22	9-255 土師器・土器・杯	1 mm程度の砂粒、雲母を含む	良好	こげ/滑塗、こげ/滑	回転ナデ/回転ナデ	T5-T8	5	6.9	2.1	3.7	
23	9-6 土師器・土器・杯	1 mm程度の砂粒、雲母を含む	良好	黒/滑	回転ナデ/回転ナデ	T5-T8	埋上	(7.0)	2.5	4.0	
24	9-9 土師器・土器・杯	1 mm程度の砂粒を少量含む	良好	黒/滑	回転ナデ/回転ナデ	T1東側	2	(7.0)	2.1	4.2	
25	9-23 土師器・土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	黒/滑	回転ナデ/回転ナデ	T5-T8	5	(7.0)	2.0	4.0	底部に指痕押圧痕
26	9-36 土師器・土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	浅黒/黒	回転ナデ/回転ナデ	T5-T8	5	(7.0)	2.3	4.7	
27	9-51 土師器・土器・杯	1 mm程度の砂粒、雲母を少量含む	良好	こげ/滑塗、こげ/滑	回転ナデ/回転ナデ	T5-T8	5	7.0	2.2	3.1	
28	9-151 土師器・土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	黒/滑	回転ナデ/回転ナデ	T5-T7	4	(7.0)	2.0	3.8	
29	9-127 土師器・土器・杯	1~3 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	黒/滑	回転ナデ/回転ナデ	T5-T7	4	7.0	2.0	4.5	
30	9-124 土師器・土器・杯	1~3 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	黒/滑	回転ナデ/回転ナデ	T6-T7	9	7.0	1.8	4.5	
31	9-187 土師器・土器・杯	1~3 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	黒/滑	回転ナデ/回転ナデ	T5-T7	4	(7.0)	1.8	5.0	
32	9-203 土師器・土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	黒/滑	回転ナデ/回転ナデ	T6-T7	9	(7.0)	1.9	4.5	
33	9-90 土師器・土器・杯	1~3 mmの砂粒、雲母を含む	良好	黒/滑	回転ナデ/回転ナデ	T1-T2	2	7.0	1.9	3.7	底部に指痕押圧痕

採掘 番号	測測 番号	器種	土 量	地 色	内/外	器種	内/外	調査 地点	層位	法 量 (cm)		備 考
										口径	底径	
34	9-167	土師瓦土器・環	1~2 mm の砂粒、雲母を含む	中緑	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し?	T5-T7	4	(7.1)	2.1	4.4
35	9-67	土師瓦土器・環	1~3 mm の砂粒、雲母を含む	良好	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し	T1-T2	2	(7.1)	1.9	3.7
36	9-12	土師瓦土器・環	1 mm 程度の砂粒、角石、雲母を含む	良好	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し	T6-T7	9	7.2	2.2	4.1
37	9-50	土師瓦土器・環	1~2 mm の砂粒、雲母、角石を含む	良好	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し	T5-T8	5	7.2	2.0	4.5
38	9-226	土師瓦土器・環	1~2 mm の砂粒、雲母、角石を含む	良好	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し	T3-T7	混土	7.2	2.3	3.9
39	9-138	土師瓦土器・環	1 mm 程度の砂粒、雲母を含む	良好	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し	T6-T7	9	7.3	2.4	3.5
40	9-163	土師瓦土器・環	1~3 mm の砂粒、雲母を含む	良好	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し	T5-T7	4	(7.5)	2.0	3.7
41	9-99	土師瓦土器・環	1 mm 程度の砂粒、雲母を含む、少し細かい	中緑	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し?	T5-T7	9	(7.6)	2.4	5.0
42	9-5	土師瓦土器・環	1~3 mm の砂粒、雲母を含む	良好	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し	T1-T2	3	(7.6)	2.5	3.7
43	9-109	土師瓦土器・環	1~4 mm の砂粒、雲母を含む	中緑	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し?	T1-T2	5	(8.3)	2.7	4.0
44	9-150	土師瓦土器・環	1~3 mm の砂粒、雲母を含む	中緑	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し?	T3-T7	4	(8.4)	2.5	4.7
45	9-122	土師瓦土器・環	1~2 mm の砂粒、雲母を含む	良好	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し	T5-T7	4	(8.5)	2.3	4.3
46	9-37	土師瓦土器・環	1 mm 程度の砂粒、雲母を含む、少し細かい	良好	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し	T5-T8	5	(8.6)	2.4	4.4
47	9-72	土師瓦土器・環	1~3 mm の砂粒、雲母を含む	良好	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し	T5-T8	5	8.6	2.3	4.6
48	9-171	土師瓦土器・環	1~2 mm の砂粒、雲母、長石を含む	良好	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し	T5-T7	4	(8.6)	2.7	4.6
49	9-186	土師瓦土器・環	1~2 mm の砂粒、雲母、角石を含む	良好	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し	T5-T7	4	(8.7)	2.5	5.7
50	9-124	土師瓦土器・環	1~2 mm の砂粒、雲母を含む	良好	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し	T5-T7	4	8.7	2.4	4.9
51	9-41	土師瓦土器・環	1~2 mm の砂粒、雲母、角石を含む	良好	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し	T5-T8	5	8.8	2.2	6.0
52	9-19	土師瓦土器・環	1 mm 程度の砂粒、雲母を少量含む	中緑	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し?	T1-T2	4	8.8	2.4	5.1
53	9-166	土師瓦土器・環	1~2 mm の砂粒、雲母を含む	良好	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し	T5-T7	4	8.8	2.5	4.8
54	9-177	土師瓦土器・環	1~2 mm の砂粒、雲母を含む	良好	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し	T5-T7	4	(8.8)	2.3	5.0
55	9-89	土師瓦土器・環	1~4 mm の砂粒、雲母、角石を含む	良好	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し	T1-T2	2	(8.8)	2.6	5.0
56	9-38	土師瓦土器・環	2 mm 程度の砂粒を含む、少し細かい	良好	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し	T5-T8	5	8.9	2.4	4.5
57	9-54	土師瓦土器・環	1 mm 程度の砂粒、雲母を含む	中緑	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し?	T3-T8	5	(8.9)	3.2	5.0
58	9-67	土師瓦土器・環	1 mm 程度の砂粒、長石を含む	良好	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し	T3-T8	5	(8.9)	2.9	5.1
59	9-21	土師瓦土器・環	1~3 mm の砂粒、雲母を含む	良好	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し	T5-T8	5	(8.9)	2.5	4.5
60	9-234	土師瓦土器・環	1~5 mm の砂粒、雲母を含む	良好	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し	T5-T7	4	8.9	2.9	4.9
61	9-144	土師瓦土器・環	1~2 mm の砂粒、雲母を含む	良好	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し	T5-T7	4	8.9	2.7	5.8
62	9-165	土師瓦土器・環	1~3 mm の砂粒、長石を含む	良好	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し	T3-T7	4	(8.9)	2.5	4.8
63	9-168	土師瓦土器・環	1~2 mm の砂粒、雲母を含む	良好	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し	T3-T7	4	8.9	2.5	5.1
64	9-123	土師瓦土器・環	1 mm 程度の砂粒、雲母、長石を含む	中緑	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し?	T5-T8	5	(9.0)	2.7	4.8
65	9-85	土師瓦土器・環	1~4 mm の砂粒、雲母、長石を含む	良好	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し	T3-T7	4	(9.0)	2.6	5.9
66	9-162	土師瓦土器・環	1 mm 程度の砂粒、雲母を少量含む	中緑	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し?	T3-T7	4	(9.0)	2.7	4.9
67	9-229	土師瓦土器・環	1~3 mm の砂粒、雲母、角石を含む	良好	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し	T1-T7	4	9.0	2.8	5.1
68	9-160	土師瓦土器・環	1~3 mm の砂粒、雲母を含む	良好	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し	T3-T7	2	9.0	2.7	4.6
69	9-84	土師瓦土器・環	1~5 mm の砂粒、雲母を含む	良好	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し	T5-T8	5	(9.1)	2.7	4.4
70	9-74	土師瓦土器・環	1~2 mm の砂粒、雲母を含む	良好	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し	T5-T8	5	(9.1)	2.9	4.2
71	9-68	土師瓦土器・環	1~3 mm の砂粒、雲母を含む	良好	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し	T5-T8	5	9.1	2.8	5.9
72	9-24	土師瓦土器・環	1~7 mm の砂粒、雲母を含む	中緑	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し?	T3-T8	5	9.1	2.7	5.2
73	9-46	土師瓦土器・環	1~2 mm 程度の砂粒、雲母を少量含む	良好	内/外	同軸ナデ/同軸ナデ	底部未切り履し	T3-T8	5	9.1	3.2	5.2

持出 番号	家洲 番号	精 種	胎 土	地 色	色 調 (内/外)	表面調整 (内/外)	調査 位置	法 量 (cm)		備 考
								口径	高さ	
74	9-70	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	5	(9.1)	2.7	5-1
75	9-77	土師質土器・杯	1 mm程度の砂粒、雲母を少量含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	4	(9.1)	2.7	5-1
76	9-157	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母、灰石を含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	4	(9.1)	2.9	5.5
77	9-175	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母、灰石を含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	4	(9.1)	2.8	4.7
78	9-82	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母、灰石を含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	5	9.2	2.3	5.1
79	9-83	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、雲母、灰石を多く含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	4	9.2	2.7	6.2
80	9-140	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	9	(9.2)	2.3	4.8
81	9-155	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	4	(9.2)	2.6	5.2
82	9-188	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、雲母、灰石を多く含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	4	(9.2)	2.2	5.0
83	9-174	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、雲母、灰石を含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	4	(9.2)	2.5	4.5
84	9-142	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母、灰石を含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	4	(9.3)	2.7	5.6
85	9-4	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	4	(9.3)	2.7	5.6
86	9-35	土師質土器・杯	1~2 mm程度の砂粒、雲母を少量含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	5	9.3	2.7	5.3
87	9-58	土師質土器・杯	1 mm程度の砂粒、雲母を含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	5	9.3	2.7	4.5
88	9-71	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、雲母を含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	5	9.3	2.1	6.0
89	9-79	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	5	9.3	2.6	4.5
90	9-80	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	2	9.3	2.6	4.6
91	9-82	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、雲母を含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	2	(9.3)	2.7	4.4
92	9-88	土師質土器・杯	1 mm程度の砂粒、雲母を含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	2	9.3	2.6	4.5
93	9-96	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、雲母を含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	2	(9.3)	2.6	5.1
94	9-33	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、雲母を含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	5	9.4	2.8	4.8
95	9-35	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、雲母を含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	5	(9.4)	2.9	4.8
96	9-40	土師質土器・杯	1 mm程度の砂粒を少量含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	5	9.4	2.7	6.1
97	9-69	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母、灰石を多く含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	5	9.4	2.7	5.7
98	9-81	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	2	9.4	2.5	5.0
99	9-84	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、雲母を含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	2	(9.4)	2.5	4.8
100	9-85	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	2	9.4	2.6	4.7
101	9-86	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	2	(9.4)	2.8	5.0
102	9-92	土師質土器・杯	1~4 mmの砂粒、雲母、灰石、角石を含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	2	(9.4)	2.5	4.7
103	9-102	土師質土器・杯	1~5 mmの砂粒、雲母、灰石を含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	2	(9.4)	2.6	4.8
104	9-104	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母、灰石を含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	2	(9.4)	2.6	5.0
105	9-146	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	4	(9.4)	3.0	4.8
106	9-137	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	7	9.4	2.5	4.8
107	9-183	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母、灰石を少量含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	3	9.4	3.0	5.2
108	9-200	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母、角石を含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	3	9.4	2.5	4.9
109	9-16	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒を含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	4	9.5	2.6	4.6
110	9-26	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母、角石を含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	5	(9.5)	5.2	3.0
111	9-57	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母、灰石を含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	5	9.5	2.9	5.0
112	9-100	土師質土器・杯	1~5 mmの砂粒、雲母を含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	2	9.5	2.6	4.7
113	9-120	土師質土器・杯	1~7 mmの砂粒、雲母、灰石を含む	良好 黄褐色/黄褐色	同磁ナデ/同磁ナデ	底面未切り履し	4	9.5	2.9	5.7

橋脚 番号	支保 番号	器 理	脚 土	地 況	色 調 (内/外)	表面状態 (内/外)	調査 地点	露 出 高さ	法 量 (cm)		備 考
									口徑	露出	
114	9-105	土質貫土器・環	1~3 mmの砂粒、雲母を含む	やや粗	粗/粗	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T1-T7	2	(9.5)	2.6	4.8
115	9-116	土質貫土器・環	1~4 mmの砂粒、雲母を含む	良好	粗/粗	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T5-T7	4	(9.5)	2.6	5.8
116	9-117	土質貫土器・環	1~4 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	粗/粗、明色	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T5-T7	4	(9.5)	3.1	5.4
117	9-118	土質貫土器・環	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	粗/粗	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T5-T7	4	(9.5)	2.7	5.2
118	9-126	土質貫土器・環	1 mm程度の砂粒、長石を少量含む	良好	黄褐色、明黄褐色	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T5-T7	4	(9.5)	3.1	5.3
119	9-149	土質貫土器・環	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	やや粗	粗/粗	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T5-T7	4	(9.5)	2.3	4.8
120	9-158	土質貫土器・環	1 mm以下の砂粒、雲母を少量含む	良好	粗/粗	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T5-T7	4	(9.5)	3.1	5.3
121	9-1	土質貫土器・環	1 mm程度の砂粒、角閃石、雲母を含む	良好	粗/粗	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T5-T7	4	(9.6)	3.0	5.0
122	9-3	土質貫土器・環	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	粗/粗	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T5-T8	1	(9.6)	3.0	4.8
123	9-7	土質貫土器・環	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	やや粗	粗/粗	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T1東側	2	(9.6)	3.0	4.2
124	9-22	土質貫土器・環	1~3 mmの砂粒、雲母を含む	良好	淡黄褐色、粗	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T5-T8	5	9.6	2.9	5.8
125	9-25	土質貫土器・環	1~4 mmの砂粒、雲母を含む	良好	粗/粗	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T5-T8	5	9.6	3.1	4.3
126	9-34	土質貫土器・環	1~5 mmの砂粒、雲母を含む	やや粗	粗/粗	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T5-T8	5	9.6	2.8	5.1
127	9-43	土質貫土器・環	1~4 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	粗/粗、黄褐色、黄褐色	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T5-T8	5	9.6	3.0	5.9
128	9-103	土質貫土器・環	1~3 mmの砂粒、角閃石、雲母を多量含む	良好	粗/粗	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T1-T2	2	(9.6)	2.7	5.9
129	9-109	土質貫土器・環	1~3 mmの砂粒、雲母を含む	良好	粗/粗	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T5-T7	4	(9.6)	2.5	5.4
130	9-124	土質貫土器・環	1 mm程度の砂粒、雲母を含む	良好	淡黄褐色、淡黄褐色	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T5-T7	4	(9.6)	2.9	5.8
131	9-153	土質貫土器・環	1 mm程度の砂粒、雲母を含む	やや粗	粗/粗、黄褐色、黄褐色	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T5-T7	4	(9.6)	2.8	5.2
132	9-231	土質貫土器・環	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	粗/粗	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T1-T2	2	9.6	2.7	4.7
133	9-10	土質貫土器・環	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	粗/粗、粗	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T1東側	3	(9.7)	2.7	4.7
134	9-61	土質貫土器・環	1~3 mmの砂粒、角閃石を含む	良好	粗/粗、粗	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T5-T8	5	9.7	3.1	5.0
135	9-73	土質貫土器・環	1~3 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	粗/粗、粗	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T5-T8	5	9.7	3.0	5.5
136	9-132	土質貫土器・環	1~2 mmの砂粒を含む	良好	粗/粗、粗	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T5-T7	9	9.7	2.9	5.7
137	9-148	土質貫土器・環	1~3 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	粗/粗、粗	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T5-T7	4	(9.7)	3.1	5.0
138	9-161	土質貫土器・環	1~3 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	粗/粗、粗	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T5-T7	4	(9.7)	2.9	5.5
139	9-2	土質貫土器・環	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	粗/粗	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T5-T8	1	(9.8)	2.6	4.9
140	9-11	土質貫土器・環	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	粗/粗	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T6-T7	9	9.8	2.4	5.9
141	9-28	土質貫土器・環	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	やや粗	粗/粗	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T5-T8	5	9.8	2.4	5.9
142	9-29	土質貫土器・環	1~4 mmの砂粒、雲母を含む	良好	粗/粗	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T1東側	5	(9.8)	2.8	5.0
143	9-18	土質貫土器・環	1~3 mmの砂粒、雲母を含む	良好	粗/粗	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T1東側	5	(9.8)	2.1	4.6
144	9-39	土質貫土器・環	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	粗/粗	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T5-T8	5	(9.8)	2.4	4.7
145	9-44	土質貫土器・環	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	粗/粗	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T5-T8	5	(9.8)	2.8	5.3
146	9-45	土質貫土器・環	1~2 mm程度の砂粒を少量含む	良好	粗/粗	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T5-T8	5	(9.8)	2.9	5.3
147	9-62	土質貫土器・環	1~3 mmの砂粒、雲母を含む	良好	粗/粗	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T5-T8	5	(9.8)	2.6	4.5
148	9-75	土質貫土器・環	1 mm程度の砂粒を少量含む	やや粗	粗/粗、黄褐色、黄褐色	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T5-T8	5	(9.8)	2.5	5.9
149	9-143	土質貫土器・環	1~2 mmの砂粒、雲母を少量含む	良好	粗/粗、黄褐色	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T5-T7	4	(9.8)	3.1	4.8
150	9-154	土質貫土器・環	1~3 mmの砂粒、雲母を含む	良好	粗/粗、粗	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T5-T7	4	(9.8)	2.9	5.2
151	9-199	土質貫土器・環	1~3 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	やや粗	粗/粗	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T3-3E、T6	3	9.8	2.8	5.1
152	9-176	土質貫土器・環	1~3 mmの砂粒、雲母を含む	良好	粗/粗	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T5-T7	4	(9.8)	2.5	4.8
153	9-15	土質貫土器・環	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	粗/粗	同軸ナデ/同軸ナデ、底層赤褐色	T1東側	3	(9.9)	2.6	4.9

神岡 番号	家園 番号	器 種	動 土	地 質	地 色	断面図 (内/外)		調査 地点	層位	法 量 (cm)		備 考
						内	外			口徑	高さ	
154	9-125	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、赤母を含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	T5-T7	4	(9.9)	3.1	5.2	
155	9-132	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、赤母、角石、長石を含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	T6-T7	9	9.9	2.8	5.9	
156	9-137	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、赤母を含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	T1東側	4	(10.0)	2.7	4.7	工具、底面に指痕押圧痕
157	9-20	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、赤母を含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	T5-T8	5	(10.0)	3.1	5.1	底面に指痕押圧痕
158	9-27	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、赤母を含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	T5-T8	5	(10.0)	3.2	4.9	底面に指痕押圧痕
159	9-97	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、赤母を含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	T1-T2	2	(10.0)	2.8	4.9	
160	9-159	土師質土器・杯	1~4 mmの砂粒、赤母を含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	T5-T7	4	10.0	3.1	5.0	
161	9-173	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、赤母、角石を含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	T5-T7	4	(10.0)	2.7	5.5	底面に指痕押圧痕
162	9-141	土師質土器・杯	1~5 mmの砂粒、赤母を含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	T6-T7	9	(10.0)	2.9	4.8	
163	9-96	土師質土器・杯	1~4 mmの砂粒、赤母を含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	T5-T8	5	(10.1)	2.8	5.2	底面に指痕押圧痕
164	9-161	土師質土器・杯	1~4 mmの砂粒、赤母を含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	T5-T7	4	(10.1)	3.1	4.7	
165	9-31	土師質土器・杯	1~5 mmの砂粒、赤母を含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	T5-T8	5	10.2	2.9	5.0	底面に指痕押圧痕
166	9-147	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、赤母を含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	T5-T7	4	(10.2)	2.8	5.8	底面に指痕押圧痕
167	9-90	土師質土器・杯	1 mm程度の砂粒を少量含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	T5-T8	5	(10.3)	2.8	5.0	
168	9-52	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、赤母を含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	T5-T8	5	(10.4)	2.8	5.1	
169	9-135	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、赤母を含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	T6-T7	9	10.4	2.8	5.3	
170	9-167	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、赤母を含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	T6-T7	4	(10.4)	2.9	5.7	
171	9-170	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、赤母を含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	T5-T7	4	(10.4)	3.5	5.2	
172	9-223	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、赤母を含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	T5-T7	11	10.4	3.5	4.7	
173	9-30	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、赤母、角石を含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	T5-T8	5	10.5	2.8	5.1	底面に指痕押圧痕
174	9-46	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、赤母、角石を含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	T5-T8	5	10.7	3.0	5.6	
175	9-76	土師質土器・杯	1 mm程度の砂粒、赤母を含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	T1東側	掘土	(11.0)	3.4	6.0	底面に指痕押圧痕
176	9-180	土師質土器・杯	1~2 mm程度の砂粒、赤母を含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	T5-T7	5	-	残2.1	3.4	
177	9-183	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、赤母、角石を含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	T5-T7	5	-	残1.1	3.4	
178	9-209	土師質土器・杯	1 mm程度の砂粒、赤母を含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	T6-T7	9	-	残1.1	3.6	
179	9-208	土師質土器・杯	1 mm程度の砂粒、赤母を少量含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	T6-T7	4	-	残1.4	3.7	
180	9-206	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒を少量含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	T6-T7	9	-	残1.4	3.7	底面に指痕押圧痕
181	9-195	土師質土器・杯	1~9 mmの砂粒、赤母を含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	T5-T7	4	-	残1.5	4.2	
182	9-96	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、赤母を含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	T1東側	掘土	-	残1.2	4.1	
183	9-114	土師質土器・杯	1~2 mm程度の砂粒を少量含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	T1-T2	5	-	残1.3	4.2	
184	9-210	土師質土器・杯	1~2 mm程度の砂粒、赤母、角石を少量含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	T6-T7	9	-	残1.2	4.3	
185	9-207	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、赤母を含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	T6-T7	9	-	残1.7	4.4	底面に指痕押圧痕
186	9-129	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、赤母を少量含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	干草器跡	掘土	-	残2.6	4.4	
187	9-189	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、赤母を少量含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	T5-T7	4	-	残2.6	4.4	
188	9-90	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、赤母を含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	T1-T2	2	-	残1.5	4.6	
189	9-210	土師質土器・杯	1 mm程度の砂粒、赤母を少量含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	T6-T7	9	-	残1.2	4.7	
190	9-212	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、赤母、角石を少量含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	T5-T7	4	-	残1.5	4.7	
191	9-179	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、赤母を含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	T5-T7	4	-	残2.9	4.7	
192	9-181	土師質土器・杯	1 mm程度の砂粒、赤母を少量含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	T5-T7	5	-	残1.5	4.7	
193	9-205	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、赤母を含む	良好	灰/層	同底ナツ/同底ナツ、底面糸切り履し	T6-T7	9	-	残1.6	4.7	底面に指痕押圧痕

調査 番号	発掘 位置	遺 産	量	土	地 色	内/外	内/外	調査 地点	層位	法 量 (cm)	備 考	
194	9-131	土師質土器・杯?	1-3 mm の砂粒、炭屑を含む	良好 橙/橙	内	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り磨し?	T4-T8	4	4	1.8	底部に指痕押印痕	
196	9-191	土師質土器・杯	1-2 mm の砂粒、炭屑を含む	良好 橙/橙	内	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り磨し?	T5-T7	4	4	1.6	底部に指痕押印痕	
198	9-204	土師質土器・杯	1-2 mm の砂粒、炭屑を含む	良好 橙/橙	内	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り磨し?	T6-T7	4	4	1.6	底部に指痕押印痕	
198	9-182	土師質土器・杯	1-3 mm の砂粒、炭屑を含む	良好 橙/橙	内	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り磨し?	T5-T7	9	9	4.8	底部に指痕押印痕	
199	9-74	土師質土器・杯	1-2 mm の砂粒、炭屑を含む	良好 橙/橙	内	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り磨し?	T1-T8	4	4	5.0	底部に指痕押印痕	
200	9-98	土師質土器・杯	1-2 mm の砂粒、炭屑を含む	良好 橙/橙	内	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り磨し?	T1-T8	4	4	5.0	底部に指痕押印痕	
201	9-108	土師質土器・杯	1-2 mm の砂粒、炭屑を含む	良好 橙/橙	内	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り磨し?	T1-T8	2	2	5.0	底部に指痕押印痕	
202	9-152	土師質土器・杯	1-2 mm の砂粒、炭屑を含む	良好 黄緑/黄緑	内	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り磨し?	T5-T7	4	4	3.0		
203	9-197	土師質土器・杯	1 mm 程度の砂粒、炭屑を含む	良好 橙/橙	内	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り磨し?	T5-T7	4	4	3.0		
204	9-202	土師質土器・杯	1-3 mm の砂粒、炭屑を含む	良好 橙/橙	内	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り磨し?	T6-T7	9	9	5.0	底部に指痕押印痕	
205	9-211	土師質土器・杯?	1-3 mm の砂粒、炭屑を含む	良好 三赤い硬、硬	内	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り磨し?	T6-T7	9	9	5.0	底部に指痕押印痕	
206	9-91	土師質土器・杯	1-2 mm の砂粒、炭屑を含む	良好 黄、黄緑/黄、黄	内	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り磨し?	T1-T8	2	2	5.1		
207	9-107	土師質土器・杯	1-2 mm の砂粒、炭屑を含む	良好 橙/橙	内	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り磨し?	T1-T8	2	2	5.2		
208	9-193	土師質土器・杯	1-5 mm の砂粒、炭屑を含む	良好 橙/橙	内	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り磨し?	T5-T7	4	4	5.2		
209	9-206	土師質土器・杯	1-3 mm の砂粒、炭屑、角石を含む	良好 橙/橙	内	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り磨し?	T5-T7	4	4	5.2		
210	9-185	土師質土器・杯	1 mm 以下の砂粒を少量含む	良好 橙/橙	内	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り磨し?	T6-T7	9	9	5.4		
211	9-195	土師質土器・杯	1-3 mm の砂粒、炭屑を含む	良好 橙/橙	内	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り磨し?	T5-T7	4	4	5.5		
212	9-178	土師質土器・杯	1 mm 程度の砂粒、炭屑を含む	良好 橙/橙	内	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り磨し?	T5-T7	4	4	5.0		
213	9-184	土師質土器・杯	1 mm 以下の砂粒を少量含む	良好 橙/橙	内	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り磨し?	T5-T7	4	4	5.6		
214	9-136	土師質土器・杯	1 mm 程度の砂粒を少量含む	良好 橙/橙	内	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り磨し?	T5-T7	9	9	2.6		
215	9-192	土師質土器・杯	1-5 mm の砂粒、炭屑を含む	良好 橙/橙	内	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り磨し?	T5-T7	4	4	5.6		
216	9-213	土師質土器・杯?	1-2 mm の砂粒、炭屑を少量含む	良好 橙/橙	内	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り磨し?	T6-T7	9	9	5.6	底部に指痕押印痕	
217	9-63	土師質土器・杯	1-3 mm の砂粒、炭屑を含む	良好 橙/橙	内	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り磨し?	T5-T8	5	5	5.8	底部に指痕押印痕	
218	9-42	土師質土器・杯	1 mm 程度の砂粒、炭屑を少量含む	良好 淡黄緑/黄緑	内	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り磨し?	T5-T8	5	5	6.1		
219	9-49	土師質土器・杯	1-4 mm の砂粒、炭屑、角石を含む	良好 黄緑/黄緑	内	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り磨し?	T5-T8	5	5	6.5		
220	9-111	土師質土器・杯	1-4 mm の砂粒、炭屑、角石を含む	良好 黄/黄	内	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り磨し?	T6-T7	9	9	1.9		
221	9-201	土師質土器・杯	1-3 mm の砂粒、炭屑、角石を含む	良好 黄/黄	内	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り磨し?	T6-T7	9	9	1.4		
222	9-241	土師質土器・杯	1-2 mm の砂粒、炭屑、角石を含む	良好 灰白/淡黄緑	内	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り磨し?	T5-T7	4	4	19.4		
223	9-113	土師質土器・杯	1-4 mm の砂粒、炭屑、角石を含む	良好 灰白/淡黄緑	内	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り磨し?	T5-T7	4	4	17.4		
224	9-130	土師質土器・杯	1-3 mm の砂粒を少量含む	良好 赤/赤	内	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り磨し?	T5-T7	4	4	5.7	高付	
225	0-156	土師質土器・杯	1-2 mm の砂粒、炭屑を含む	良好 赤/赤	内	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り磨し?	T5-T7	4	4	5.8		
226	9-268	土師質土器・火鉢	1 mm 以下の砂粒、炭屑を含む	良好 赤/赤	内	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り磨し?	T5-T7	4	4	15.2		
227	9-270	土師質土器・火鉢	1 mm 以下の砂粒、炭屑を含む	良好 赤/赤	内	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り磨し?	T5-T7	4	4	16.8		
228	9-267	瓦質土器・椀	1 mm 前後の砂粒、角石を含む	良好 灰/灰	内	ナデ/ナデ、ナデ、ヨコナデ	T6-T7	9	9	38.9	14.9	27.3
229	9-245	瓦質土器・椀	1-2 mm の砂粒を含む	良好 灰/灰	内	ナデ/ナデ、ナデ、ヨコナデ	T6-T7	9	9	23.4	4.6	13.1
230	9-253	瓦質土器・椀	1 mm 前後の砂粒を含む	良好 灰/灰	内	ナデ/ナデ、ナデ、ヨコナデ	T5-T8	4	4	36.6	15.8	18.7
231	9-254	瓦質土器・椀	1 mm 以下の砂粒、炭屑を含む	良好 灰白/黄	内	ナデ/ナデ、ナデ、ヨコナデ	T5-T8	4	4	53.0	13.1	(18.7)
232	9-240	瓦質土器・椀	1-2 mm の砂粒、炭屑、石を含む	良好 黄緑/黄緑	内	ナデ/ナデ、ナデ、ヨコナデ	T1-T8	溝	溝	32.6	11.9	16.2
233	9-269	瓦質土器・火鉢	1 mm 以下の砂粒、炭屑、角石を含む	良好 黄緑/黄緑	内	ナデ/ナデ、ナデ、ヨコナデ	T5-T8	5	5	30.9	16.1	16.2

神田 番号	家測 番号	器種	土質	焼成	色調 (内/外)		断面調整 (内/外)		周縁 地点	周位	法量 (cm)		備考
					内	外	調整	調整			口径	高さ	
234	9-271	瓦質土器・水鉢	1 mm 前後の砂粒、葉角を含む	良好	褐色/灰白色	ナア/ナア	ナア/ナア	T5-T8	5	—	口径 12.6	高さ 28.1	—
235	9-272	瓦質土器・火鉢	1-3 mm 程度の砂粒、硝子、角白を含む	良好	褐色/灰白色	ナア/ナア	ナア/ナア	T5-T7	5	—	口径 27.5	高さ 22.4	1次調査出土品と組合
237	9-247	瓦質土器・羽釜	1-3 mm の砂粒を多く含む	良好	灰白色/灰白色	ヨコナア/ヨコナア	ヨコナア/ヨコナア	T5-T7	5	(28.4)	口径 11.9	高さ —	外周に磁石の付着量に注意

S.D02 (陶磁器)

神田 番号	家測 番号	器種	土質	焼成	色調 (内/外)		断面調整 (内/外)		調査 地点	周位	法量 (cm)		備考
					内	外	調整	調整			口径	高さ	
238	9-250	焼酎樽器・壺	白：にない、にない	良好	白/白	白/白	白/白	T1-T2	2	(9.6)	口径 34.5	高さ —	239と同一個体か
239	9-251	焼酎樽器・壺	白：にない、にない	良好	白/白	白/白	白/白	T1-T2	4	(17.0)	口径 10.9	高さ (9.5)	中国産品か東清アシア産
240	9-256	焼酎樽器・壺	良好	良好	白/白	白/白	白/白	T5-T7	4	—	—	—	中国産品、其産地不明
241	9-244	焼酎樽器・大甕	良好	良好	白/白	白/白	白/白	T5-T7	9	—	口径 3.9	高さ —	中国産品、其産地不明
242	9-246	焼酎樽器・酒鉢	良好	良好	白/白	白/白	白/白	T5-T7	4	—	口径 3.6	高さ —	中国産品、其産地不明
243	9-243	焼酎樽器・茶入	良好	良好	白/白	白/白	白/白	T5-T8	4	—	口径 5.2	高さ 4.5	中国産品、其産地不明
244	9-249	焼酎樽器・茶入	良好	良好	白/白	白/白	白/白	T5-T8	4	—	口径 5.4	高さ —	中国産品、其産地不明
245	9-215	陶器・天目茶碗	良好	良好	白/白	白/白	白/白	T5-T7	4	—	口径 5.2	高さ 4.5	中国産品、其産地不明
246	9-260	陶器・酒鉢	良好	良好	白/白	白/白	白/白	T5-T7	4	—	口径 5.4	高さ —	中国産品、其産地不明
247	9-264	陶器・壺	良好	良好	白/白	白/白	白/白	T5-T7	4	—	口径 5.2	高さ 4.5	中国産品、其産地不明
248	9-265	陶器・壺	良好	良好	白/白	白/白	白/白	T5-T8	5	(10.6)	口径 11.7	高さ —	中国産品か東清アシア産
249	9-261	陶器・瓦片蓋	良好	良好	白/白	白/白	白/白	T1-T8	5	—	口径 3.4	高さ 11.2	中国産品、其産地不明
250	9-252	陶器・台付甕	良好	良好	白/白	白/白	白/白	T5-T8	5	—	口径 11.7	高さ —	中国産品、其産地不明
251	9-221	白磁・甕	良好	良好	白/白	白/白	白/白	T5-T7	4	—	口径 7.5	高さ 10.0	東清アシア産？
252	9-263	白磁・甕	良好	良好	白/白	白/白	白/白	T5-T8	5	—	口径 3.6	高さ 3.6	中国産品、其産地不明
253	9-257	白磁・甕	良好	良好	白/白	白/白	白/白	T5-T8	5	—	口径 4.8	高さ —	中国産品、其産地不明
254	9-223	白磁・甕	良好	良好	白/白	白/白	白/白	T6-T7	2	—	口径 2.5	高さ —	中国産品、其産地不明
255	9-224	白磁・甕	良好	良好	白/白	白/白	白/白	T5-T8	5	—	口径 3.3	高さ —	中国産品、其産地不明
256	9-248	白磁・甕	良好	良好	白/白	白/白	白/白	T5-T8	5	(13.2)	口径 2.0	高さ —	中国産品、其産地不明
257	9-222	青磁・甕	良好	良好	青/青	青/青	青/青	T4-T8	5	(13.4)	口径 3.5	高さ (15.0)	中国産品、其産地不明
258	9-225	青磁・甕	良好	良好	青/青	青/青	青/青	T5-T8	6	—	口径 3.3	高さ (4.6)	中国産品、其産地不明
259	9-227	青磁・甕	良好	良好	青/青	青/青	青/青	T5-T7	4	—	口径 1.7	高さ 4.0	中国産品、其産地不明
260	9-227	青磁・甕	良好	良好	青/青	青/青	青/青	T5-T7	4	—	口径 1.7	高さ 4.0	中国産品、其産地不明
261	9-217	灰付・甕	良好	良好	灰/灰	灰/灰	灰/灰	T5-T7	4	—	口径 3.5	高さ (10.2)	中国産品、其産地不明
262	9-218	灰付・甕	良好	良好	灰/灰	灰/灰	灰/灰	T5-T8	5	—	口径 4.6	高さ —	中国産品、其産地不明
263	9-219	灰付・甕	良好	良好	灰/灰	灰/灰	灰/灰	T1-T8	5	—	口径 3.7	高さ —	中国産品、其産地不明
264	9-255	灰付・小杯	良好	良好	灰/灰	灰/灰	灰/灰	T1-T8	5	—	口径 2.6	高さ (4.6)	中国産品、其産地不明
265	9-256	灰付・小杯	良好	良好	灰/灰	灰/灰	灰/灰	T1-T8	5	—	口径 1.7	高さ 2.3	中国産品、其産地不明
266	9-216	灰付・甕	良好	良好	灰/灰	灰/灰	灰/灰	T5-T8	5	(12.7)	口径 2.1	高さ —	中国産品、其産地不明
267	9-220	灰付・甕	良好	良好	灰/灰	灰/灰	灰/灰	T5-T7	4	(10.6)	口径 3.6	高さ —	中国産品、其産地不明
268	9-258	灰付・甕	良好	良好	灰/灰	灰/灰	灰/灰	T5-T7	4	—	口径 3.5	高さ —	中国産品、其産地不明
269	9-259	灰付・甕	良好	良好	灰/灰	灰/灰	灰/灰	T5-T7	9	—	口径 3.5	高さ —	中国産品、其産地不明

第4節 小 結

9次調査は千畳敷を圍繞する横堀跡 SD02の保存整備に伴い、本遺構の1次調査の未掘部分を中心に実施した。その結果を以下に記す。

SD02の形状については、1次調査で把握された内容を大きく追加・変更するような知見は得られなかったが、千畳敷西側埋土において1次調査で確認された「黒褐色土に灰及び炭化物を含む層」に相当する堆積土を再確認し、堆積状況を詳細に観察することができた。

本層の形成状況は、千畳敷側から流れ込むように下層から中層にかけてレンズ状に堆積している特徴から、前章で指摘したように千畳敷で火災が発生したことは間違いないだろう。火災後、どれくらいの時期幅があるのか不明であるが、これらの灰や炭化物が土砂と混じった状態でSD02を意図的に埋めることによって本層が形成されたと考えられる。

また、この層に関する大きな特徴として遺物の豊富な出土があげられる。本調査の出土遺物のうち、本層出土のものが多くを占めていることは、当時の生活面を削平してSD02を埋め戻したことに起因する可能性が極めて高い。

堆積した時期については、比較的古い時期の陶磁器も含むものの、その下限は16世紀後半～17世紀初頭とみてよく、本調査では261、266、269が該当する。小西行長が新城の建設に着手し、西岡台の宇土城が廃城になったと推定される16世紀末と重なることは、宇土城の使用下限を検討するうえで極めて重要な成果といえよう。

SD02の出土遺物に関しては、土師質土器の坏の大量出土や瓦質土器、備前焼や瀬戸・美濃産などの日本製の土器・陶磁器、中国製の白磁・青磁・染付に代表される貿易陶磁器などの出土があげられる。

このうち後者に関しては、中世後期が大半であり、龍泉窯系の青磁や景德鎮窯系の白磁・染付が主体を占めるが、なかには福建産の白磁や青磁も若干含まれる。また、割合的には少ないものと同じく福建省の漳州窯系染付も出土した。それ以外の陶磁器に関しては、出土点数は少ないが、焼締陶器や施軸陶器のうち東南アジア産と認定できるものが含まれることは注目すべきであろう。以上の産地ごとにおける陶磁器の出土傾向は、1次調査と共通する特徴といえる。

中世以外では、古墳時代の首長居館の塚跡 SD01の千畳敷西側における配置状況を改めて把握することができたが、本調査は宇土城跡の保存整備に伴う調査であることから、ごく一部を除いて埋土の掘削は行わなかったため、遺物の出土はごくわずかであった。

第5章 第10次発掘調査

第1節 調査の概要

(1) 調査の概要 (図43・44)

10次調査は平成10年8月から平成11年3月の期間で実施し、9次調査に引き続き千疊敷を圍繞する横堀跡(SD02)を中心とする調査を行った。また、SD02周辺についても調査を行い、後述するように新たな知見が得られた。その主な調査成果については、平成11年度に刊行した概要報告書(藤本2000)や記者発表、平成11年11月28日に実施した現地説明会などで公表している。

本調査は9次調査区と同様に、千疊敷を取り囲む一段下がった平坦面の北側、帯曲輪状の平坦地に調査区を設定した。これらの調査区においては、7次調査(平成5年度)で実施したトレンチ調査によって、SD02の存在を既に確認しており、本トレンチに基づいて西側から東側にかけて1～4区の調査区を設定した。1次調査区H-T6が10次調査区の1区と隣接する位置関係にある。

発掘調査は、まず千疊敷北西側に1区を設定し、セクションベルトを隔てて東隣に2区を設定した。



図43 10次調査区位置図 (1/1,000)

表土剥ぎ終了後、掘り下げを行ってSD02を検出し、埋土の掘り下げを行ったところ、SD02外側の底面付近の壁面から千疊敷側（内側）へ向けて突出する地山を掘り残した細長い高まり（突出部）や段差、井戸状遺構（SE01）、散在するピットを検出した。また、H-T6と1区のSD02外側壁面が存在しない部分において遺構の存在が想定されたため調査を行った。その結果、直交する細長い土坑を伴う開渠状遺構SD17を検出するとともに、北東側壁面でSD01の断面を確認した。このことから、古墳時代の首長居館に伴う断面Vの字形の壕路が北側にも遺存することが明らかになった。

続いて2区東側に3区と4区を設定、遺構検出作業を行ってSD02を検出した。SD02の検出作業時に3区北側において列状に配置された安山岩礫を確認するとともに、その北側の幅約5mは地山面が検出できなかったことから、何らかの遺構の存在が予測された。また、3・4区においてはSD02の底面の凹凸が著しく、一部の凹部で地山を掘削した土が堆積した状態を確認するとともに、1・2区と同様にSD02の底面付近の外側壁面より突出部を2箇所検出した。

SD02の調査がおおむね終了した後、1～4区の北側を拡張して平場の遺構検出作業に取りかかった。このうち、3区においては、先述した石組遺構の北側で竪堀跡SD18を検出、4区平場においては著しく重複する土坑やピット群を検出した。

各遺構からは多量の土師質土器や瓦質土器、青磁や染付などの陶磁器、鉄砲玉などの遺物が出土した。

(2) 調査日誌抄

平成10年

ンベルト写真撮影

7月23日 平成10年度第1回宇土城跡検討委員会開催

9月7日 1区SD02外側壁で突出部検出。2区において堀内部障壁状の高まりとピット検出

8月5日 調査予定地の草刈

8日 2区で井戸状遺構検出

7日 T1・2トレンチ（1区）設定、掘り下げ

10日 1・2区の写真撮影、2区北側掘り下げ

27日 1・2区の設定

（同月21日まで）

28日 1・2区の掘り下げ、1区南側セクショ

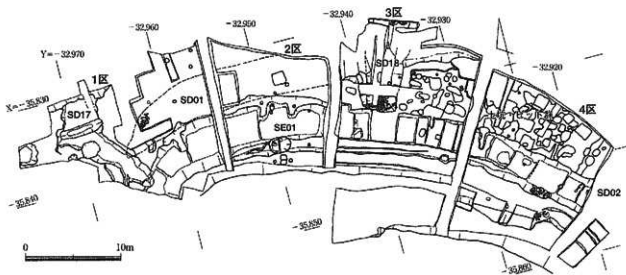


図44 10次調査区遺構配置図（1/400）

21日	3区の設定、掘り下げ	15日	第3回宇土城跡検討委開催。現場視察
25日	4区の設定		
29日	第2回宇土城跡検討委開催。発掘調査現場視察	平成11年	
10月2日	千畳敷北側斜路(3区)表土剥ぎ、掘り下げ	1月6日	3区平場の精査
19日	写真撮影(3区、斜路部分)	11日	1区平場で西岡台の調査で初めて鉄砲玉出土
20日	写真撮影(3・4区)	18日	千畳敷北西側 SD02隣接地の開渠状遺構(SD17)調査区設定、掘り下げ
22日	3区 SD02外側壁で突出部検出。文化庁調査官及び県文化課職員視察。	2月3日	3・4区のSD02に並行するセクションベルト突測
26日	3区南北方向に2箇所、東西方向に1箇所セクションベルト設定	5日	同上の写真撮影後、掘り下げ
27日	3区でSD18検出。堆積土上層で石組遺構検出	10日	SD17の平面プラン判明(水溜め状の掘り込み検出)
11月5日	宇上市文化財保護審議会視察	23日	SD17精査、写真撮影
6日	3区の精査、写真撮影	25日	4区北側掘り下げ
16日	4区 SD02埋土掘り下げ	3月9日	第4回宇土城跡検討委開催。発掘調査現場視察。
24日	4区 SD02で堀内部障壁遺構検出	12日	4区の清掃、写真撮影
27日	1区北側を拡張、掘り下げ	21日	3・4区の精査、遺構重複状況確認
12月8日	2区北側を拡張、掘り下げ	31日	10次調査区内の清掃、調査道具などの片付け
9日	3区北側を拡張、掘り下げ		

第2節 検出遺構

SD01 (図44～46)

断面Vの字形の塚跡である。第3・4章で報告したように、9次調査までは千畳敷北側に圍繞するかどうか不明であったが、開渠状遺構SD17を検出した際に本遺構の北東側壁面でSD01の下層付近の断面を確認するとともに、SD18検出後、周辺の平場の掘り下げ時に本遺構の埋土である硬質の黒褐色粘質土を確認し、古墳時代の土師器片が出土した。この結果、千畳敷北側においても首長居館に伴う塚跡がめぐることが判明した。

SD02 (図44～49、図版18～23)

千畳敷を圍繞する横堀跡である。10次調査における検出規模は、長さ約51m、幅約3.5～4.3m、深さ0.2～1.7mで、千畳敷と底面最深部の比高差は約6mである。千畳敷北西側から北側にかけての1・2区と同北側から北東側にかけての3・4区ではSD02の形状が異なるため、その詳細については以下のように2つ分けて記述する。

1・2区では突出部を4箇所、段差を2箇所、井戸状遺構SE01、ピットを検出した。

突出部は全て外側壁面から千畳敷側へ向けて配置されている。突出部1は長さ約1.8m、幅約1.2m、高さ約0.5mで、高さ10cm程度の段差が付随している。突出部2は長さ約1.5m、幅約1.0m、高さ約

0.4mで、突出部1と同様に段差が付随する。突出部3は長さ約1.3m、幅約1.0m、高さ約0.4m。堀底の凸部上にある突出部4は2区東セクションベルト下に位置する。堀底は東側から西側にかけて緩やかに下降している。このことは、9次調査で得られた知見と同様に、堀普請の段階から雨水を考慮し、このような傾斜をつけた施工方法が取られたと考えられる。

3・4区においては、堀底の凹凸が著しく、千疊敷南側や西側の断面逆台形の箱窟とは様相が異なる。一見すると畝堀（堀内部障壁遺構）状を呈する。凸部は計6箇所あり、このうち2箇所突出部を伴っている。また、4区において底面直上に拳大から人頭大の安山岩の石材を7個、列状に並べた配石遺構SX03を検出した。

凸部の規模は、幅約2.2～4.3m、高さ約0.3～1.0mで最も西側のものはほとんど掘り下げられておらず、平場の検出面とほぼ同じ高さである。一見すると土橋状を呈する。一方、凹部は計6箇所あり、幅約1.5～2.9m、検出面からの深さは約0.8～1.4mである。このうち2箇所の堀底でSD02掘削時に生じたとみられる地山掘削土の堆積を確認した。凹部においても一部に深い部分があるが、最も浅いところでは平場との比高差が約0.8m程しかない。また、凸部上に位置する突出部5は長さ約1.2m、幅約0.6m、高さ約0.2m、突出部6は長さ約1.9m、幅約0.9m、高さ約0.7mである。

10次調査では、千疊敷西側において1・9次調査で確認されたSD02の千疊敷側から流れ込むようにしてレンズ状に堆積した黒褐色土に灰及び炭化物を含む層は確認されていない。埋土より中世の土師質土器の皿や坏、瓦質土器の播鉢・火鉢・羽釜、備前焼の播鉢や大甕、中国製の青磁・白磁・染付の皿や碗、華南三彩、五輪塔の地輪などの石塔残欠が出土した。

SD17（図44・45、図版23）

SD02と交わる閉鎖状遺構である。検出規模は長さ12.3m、幅1.3～5.0m、底幅0.7～3.9m、深さ0.4～0.9m。本遺構とSD02の接点付近は、SD02の底面レベルが最も低くなっているため、SD17検出当初はSD02の排水溝を目的として掘削されたとみられた。しかし、その後の千疊敷周辺の調査で堅堀跡が次々に発見されたことから（藤本2005）、本遺構も堅堀としての機能を兼ねていたのかもしれない。SD02との接点から北西へ約9m付近にSD17に直交する幅約1.0m、長さ約4.6m、深さ約0.8mの細長い土坑状の掘り込みがあるが、SD17との重複関係は認められない。三城で検出されたような水溜め状遺構の可能性もある。

部分的な調査であり内容は不明であるが、遺構の状況から判断すれば、そのまま緩やかに傾斜しながら北側の急崖に延びているものと推察される。平成7年の集中豪雨の際に、本遺構が延びていると想定される北側崖面が崩れる災害が発生したが、その崩れた崖に断面逆台形を呈する溝状遺構が確認されており、これはSD17の末端部と推測される。

SD18（図44・46、図版20・21）

SD02と直交する堅堀跡である。検出規模は長さ約9m、幅約3.0～5.8m、底幅約0.8～1.9m、同深さ約2.0m、壁面の傾斜角度は約50°～60°。SD02との交点付近は、傾斜角度約55°で北側へ向って急激に落ち込んでいるが、それより北側は緩やかに下降する。SD01と重複しており、SD18の掘削に伴いSD01が破壊されている。本遺構の埋土中層から上層は、細かく分層できる土層が堆積しており、これらは比較的硬質であることから、意図的に版築状に突き固められて埋められたと推測される。また、底

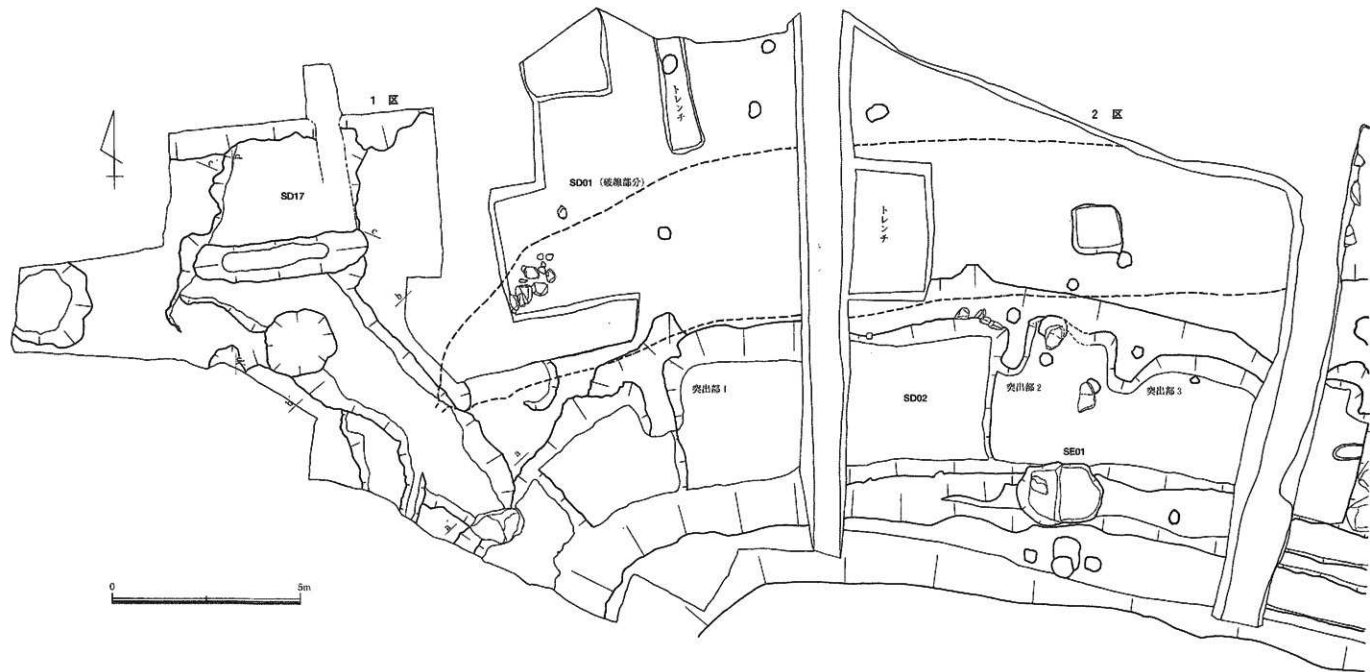


図45 10次調査区西側遺構配置図 (1/100)

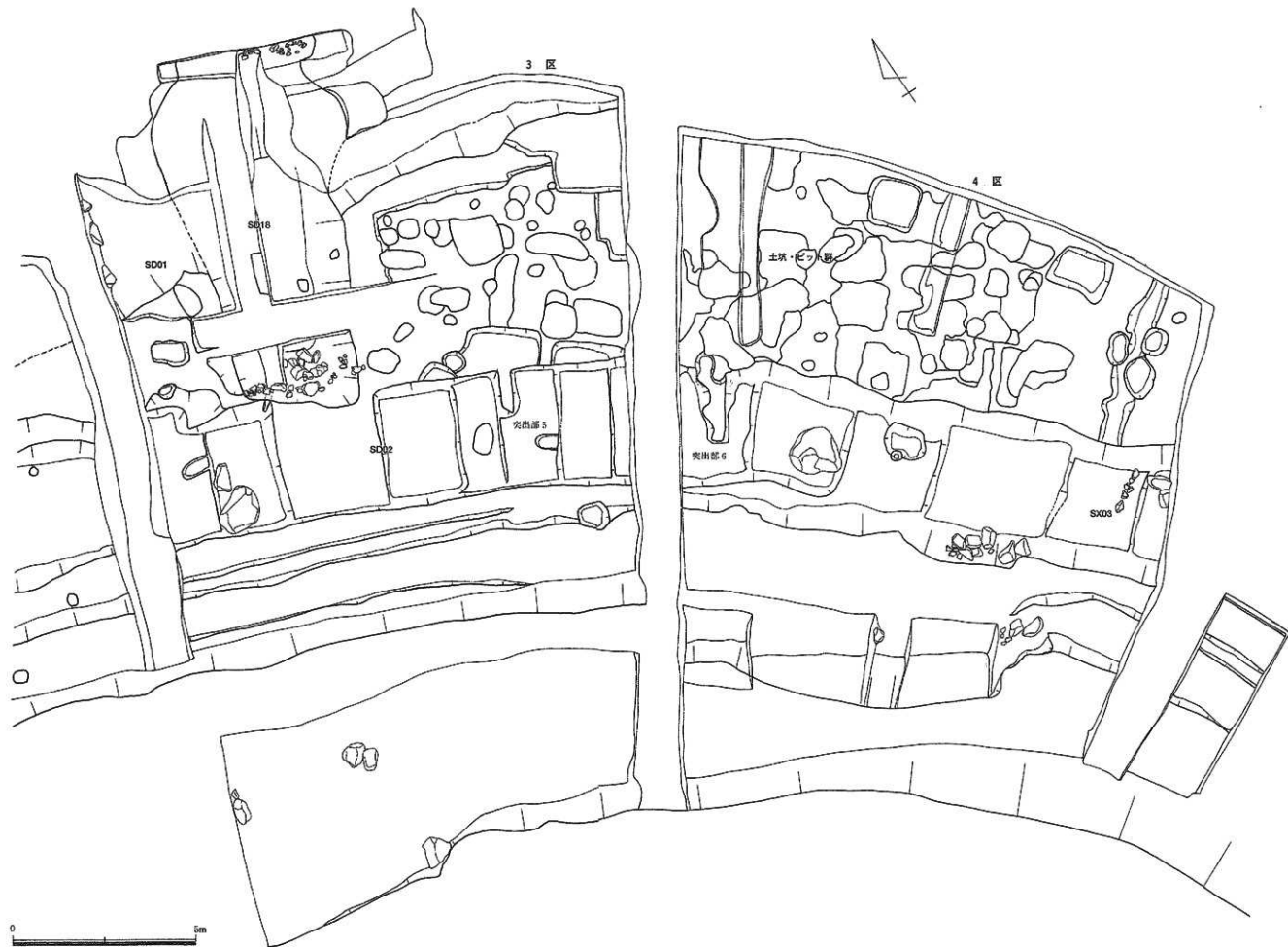
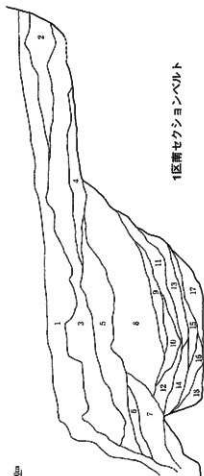


图46 10次調査区東側遺構配置図 (1/100)

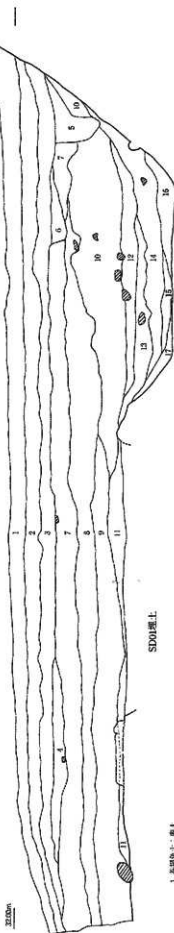
2500m



1区断セクションベルト

- 1 赤褐色土：表土
- 2 暗褐色土：土層は1層と断続的
- 3 灰褐色土：断面は1層と断続的、土層はあまり含まない
- 4 灰褐色土：断面は1層と断続的、土層はあまり含まない
- 5 灰褐色土：1～3cm前後の黒山アロクを少量含む
- 6 暗褐色土：断面は1層と断続的、土層はあまり含まない
- 7 暗褐色土：断面は1層と断続的、土層はあまり含まない
- 8 暗褐色土：断面は1層と断続的、土層はあまり含まない
- 9 暗褐色土：断面は1層と断続的、土層はあまり含まない
- 10 暗褐色土：断面は1層と断続的、土層はあまり含まない
- 11 暗褐色土：断面は1層と断続的、土層はあまり含まない
- 12 暗褐色土：断面は1層と断続的、土層はあまり含まない
- 13 暗褐色土：断面は1層と断続的、土層はあまり含まない
- 14 暗褐色土：断面は1層と断続的、土層はあまり含まない
- 15 暗褐色土：断面は1層と断続的、土層はあまり含まない
- 16 暗褐色土：断面は1層と断続的、土層はあまり含まない
- 17 暗褐色土：断面は1層と断続的、土層はあまり含まない

2500m

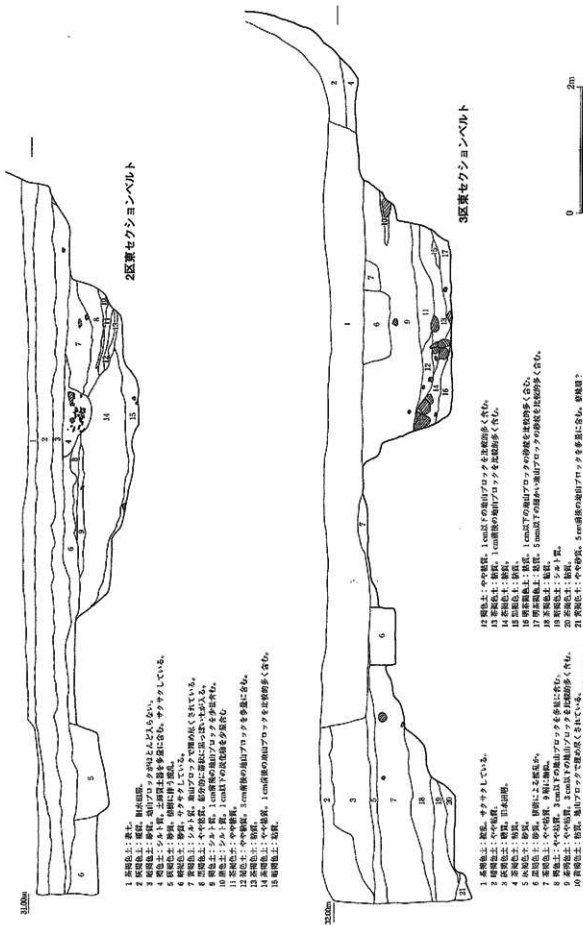


1区東セクションベルト

- 1 赤褐色土：表土
- 2 灰褐色土：断面、断面は1層と断続的
- 3 灰褐色土：断面、断面は1層と断続的
- 4 灰褐色土：断面、断面は1層と断続的
- 5 灰褐色土：断面、断面は1層と断続的
- 6 灰褐色土：断面、断面は1層と断続的
- 7 灰褐色土：断面、断面は1層と断続的
- 8 灰褐色土：断面、断面は1層と断続的
- 9 灰褐色土：断面、断面は1層と断続的
- 10 灰褐色土：断面、断面は1層と断続的
- 11 灰褐色土：断面、断面は1層と断続的
- 12 灰褐色土：断面、断面は1層と断続的
- 13 灰褐色土：断面、断面は1層と断続的
- 14 灰褐色土：断面、断面は1層と断続的
- 15 灰褐色土：断面、断面は1層と断続的
- 16 灰褐色土：断面、断面は1層と断続的
- 17 灰褐色土：断面、断面は1層と断続的

0 2m

図47 SD00土層断面図 1 (1/60)



2区東セグシヨシンベルト

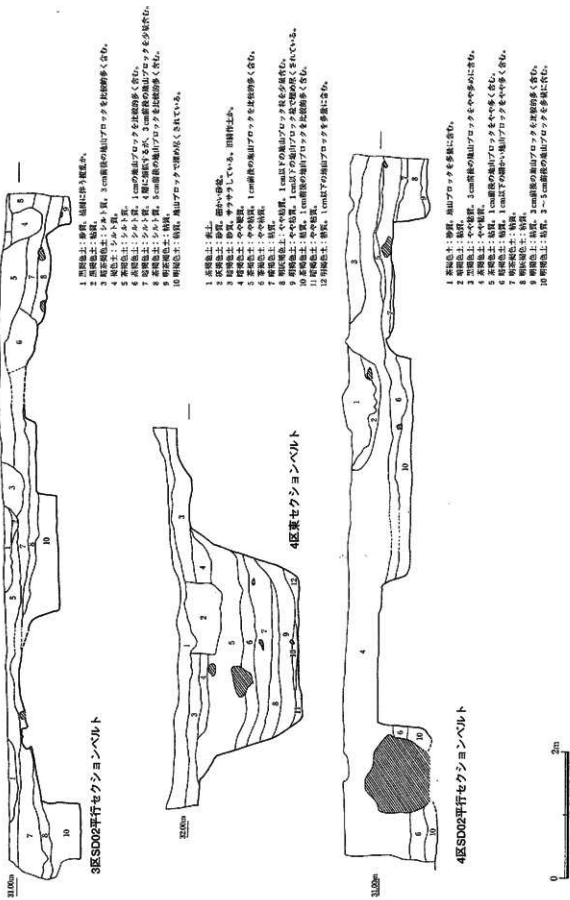
3区東セグシヨシンベルト

- 1 礫層上：礫土、礫土混成層。
- 2 礫層底上：礫土、礫山アロツタがほとんど入らない。
- 3 礫層底上：シルト層、土層質土層を多量に含む、ややカタしている。
- 4 礫層底上：砂質、礫山に伴う部。
- 5 礫層底上：砂質、ややカタしている。
- 6 礫層底上：砂質、礫山に伴う部。
- 7 礫層底上：砂質、礫山に伴う部。
- 8 礫層底上：砂質、礫山に伴う部。
- 9 礫層底上：砂質、礫山に伴う部。
- 10 礫層底上：シルト層、1cm程度の礫山アロツタを少量含む。
- 11 礫層底上：砂質、礫山に伴う部。
- 12 礫層底上：砂質、礫山に伴う部。
- 13 礫層底上：砂質、礫山に伴う部。
- 14 礫層底上：砂質、礫山に伴う部。
- 15 礫層底上：砂質、礫山に伴う部。

- 12 礫層底上：やや粘質、1cm以下の礫山アロツタを少量多く含む。
- 13 礫層底上：粘質、1cm程度の礫山アロツタを少量多く含む。
- 14 礫層底上：粘質、1cm程度の礫山アロツタを少量多く含む。
- 15 礫層底上：粘質、1cm程度の礫山アロツタを少量多く含む。
- 16 礫層底上：粘質、1cm程度の礫山アロツタを少量多く含む。
- 17 礫層底上：粘質、1cm程度の礫山アロツタを少量多く含む。
- 18 礫層底上：粘質、1cm程度の礫山アロツタを少量多く含む。
- 19 礫層底上：粘質、1cm程度の礫山アロツタを少量多く含む。
- 20 礫層底上：粘質、1cm程度の礫山アロツタを少量多く含む。
- 21 礫層底上：やや粘質、5cm程度の礫山アロツタを少量に含む、粘質土。

- 1 礫層底上：粘質、ややカタしている。
- 2 礫層底上：やや粘質。
- 3 礫層底上：粘質、日本出露。
- 4 礫層底上：粘質。
- 5 礫層底上：粘質。
- 6 礫層底上：粘質。
- 7 礫層底上：やや粘質、礫山に伴う部。
- 8 礫層底上：やや粘質、礫山に伴う部。
- 9 礫層底上：やや粘質、3cm以下の礫山アロツタを少量多く含む。
- 10 礫層底上：粘質、1cm程度の礫山アロツタを少量多く含む。
- 11 礫層底上：やや粘質、1cm以下の礫山アロツタを少量多く含む。

図48 SD02土層断面図 2 (1/60)



3E SD02 平行セクションベルト

4E 東セクションベルト

4E SD02 平行セクションベルト

- 1 階層色土：砂質、磁器に際り灰褐色。
- 2 灰層色土：砂質、磁器に際り灰褐色。
- 3 灰層色土：砂質、磁器に際り灰褐色。
- 4 灰層色土：砂質、磁器に際り灰褐色。
- 5 灰層色土：砂質、磁器に際り灰褐色。
- 6 灰層色土：砂質、磁器に際り灰褐色。
- 7 灰層色土：砂質、磁器に際り灰褐色。
- 8 灰層色土：砂質、磁器に際り灰褐色。
- 9 灰層色土：砂質、磁器に際り灰褐色。
- 10 灰層色土：砂質、磁器に際り灰褐色。

- 1 灰層色土：砂質、磁器に際り灰褐色。
- 2 灰層色土：砂質、磁器に際り灰褐色。
- 3 灰層色土：砂質、磁器に際り灰褐色。
- 4 灰層色土：砂質、磁器に際り灰褐色。
- 5 灰層色土：砂質、磁器に際り灰褐色。
- 6 灰層色土：砂質、磁器に際り灰褐色。
- 7 灰層色土：砂質、磁器に際り灰褐色。
- 8 灰層色土：砂質、磁器に際り灰褐色。
- 9 灰層色土：砂質、磁器に際り灰褐色。
- 10 灰層色土：砂質、磁器に際り灰褐色。
- 11 灰層色土：砂質、磁器に際り灰褐色。
- 12 灰層色土：砂質、磁器に際り灰褐色。

- 1 灰層色土：砂質、磁器に際り灰褐色。
- 2 灰層色土：砂質、磁器に際り灰褐色。
- 3 灰層色土：砂質、磁器に際り灰褐色。
- 4 灰層色土：砂質、磁器に際り灰褐色。
- 5 灰層色土：砂質、磁器に際り灰褐色。
- 6 灰層色土：砂質、磁器に際り灰褐色。
- 7 灰層色土：砂質、磁器に際り灰褐色。
- 8 灰層色土：砂質、磁器に際り灰褐色。
- 9 灰層色土：砂質、磁器に際り灰褐色。
- 10 灰層色土：砂質、磁器に際り灰褐色。

図49 SD02土層断面図 3 (1/60)

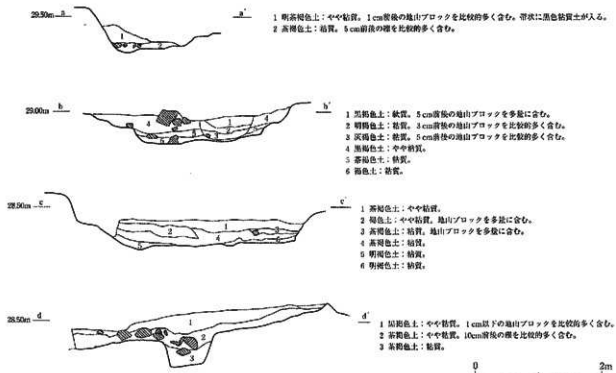


図50 開渠状遺構 S17土層断面図 (1/60)

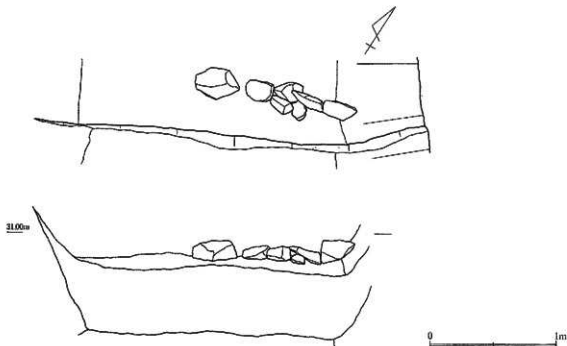


図51 配石遺構 SX03実測図 (1/30)

面や壁面、周辺からピットを検出しており、本遺構に伴う何らかの構築物があった可能性もあるが、明らかにし得なかった。

なお、本調査段階では不明であったが、平成15年度の16次調査で、北に約15m離れた帯曲輪でも検出したことから、千畳敷北側の急崖に向かって延びることが判明した(藤本2004)。調査期間の関係から、

本遺構の調査を終了できなかったことから、平成12年度の12次調査で実施した。調査の詳細については19年度刊行予定の調査報告書に譲りたい。

本遺構の埋土のSD02との交点付近で、安山岩の自然石が大量に投げ込まれた状態で出土した。遺物は土師質土器、青磁、染付などがある。

SE01 (図44・45、図版18・19)

SD02内で検出した蓋掘りの井戸跡である。SD02の千畳敷側壁面の犬走り状に掘り残された段差上に位置する。検出規模は長径約2.2m、短径約1.4m、深さ4.0m以上で、ほぼ垂直に掘り込まれている。

埋土上層より安山岩の巨石が投棄された状態で出土した。本巨石の上位は地山掘削土で満たされており、巨石下位も同様の掘削土が堆積していた。このことは、井戸を廃絶するときに地山掘削土や巨石を投棄することで一気に埋められたことを示唆し、明確な重複関係は認められないものの、SD02掘削時に生じたとみられる排土が、本遺構の埋め戻しに利用された可能性が高い。

埋土より土師質土器や青白磁の梅瓶片が出土した。なお、SD18と同様に調査期間の関係から、本調査では上記の巨石の取り上げや巨石以下の埋土の掘り下げは行わず、平成11年度の11次調査で実施した。詳細については19年度刊行予定の調査報告に譲る。

SX03 (図44・46・51、図版22)

SD02の堀底の凸部上で検出した配石遺構である。拳大から人頭大の安山岩塊石を7個並べており、長さは約1.3mでSD02壁面外側と接している。これらは堀底の直上から数cm程度、土が堆積している上に置かれていることから、本遺構下の凸部の掘削前後、間もなく配置されたと推測される。配置状況がSD02の突出部と類似しており、同様の性格を有していたと推測される。

第3節 出土遺物

SD02 (図52～56、図版24・25)

1は片圓穿孔の滑石製紡錘車で、淡灰白色を呈する。かつて千畳敷に所在した古墳時代の遺構に伴うものとみられる。

2～90は土師質土器で、2は壺形土製品、3～87・89は坏、88は皿、90は耳皿である。2の壺形土製品は筒抜け状を呈し、筒部中央付近に1条の突帯が廻る。

3～87・89の坏は、全て回転台を用いて製作されており、内・外面とも回転ナデの痕跡が残る。底部には糸切り痕や指頭押圧痕が残るものもある。大半が供器具として使用されたとみられるが、9や12、19のように口縁部周辺に油裏が残るものがあり、灯明具として使用されたものや、77や89のように見込に穿孔や円形状の線刻を施す特殊なものもある。

上記の土師質土器は、1・9次調査出土品と同様に法量から大きく2群に分類される。法量や形態の相違から細分可能であるものの、総じて等質的といえる。3～23は口径が4～7cm台の一群である。特に口径が小さい3や4は齧口と呼ぶべきかもしれないが、これらを除けば7cm前後に集中する。器高は1.7～2.4cmで2cm前後、底径は3.1～4.4cmで4cm前後のものが多い。24～87は8～11cm台のもので、前者にくらべて一回り大きい一群である。このうち、8cm代の24・25や11cm台の87を除いて9～10cm台に収まり、9.5cm前後のものが多い。器高は2.1～3.7cmで2cm後半台、底径は4.1～

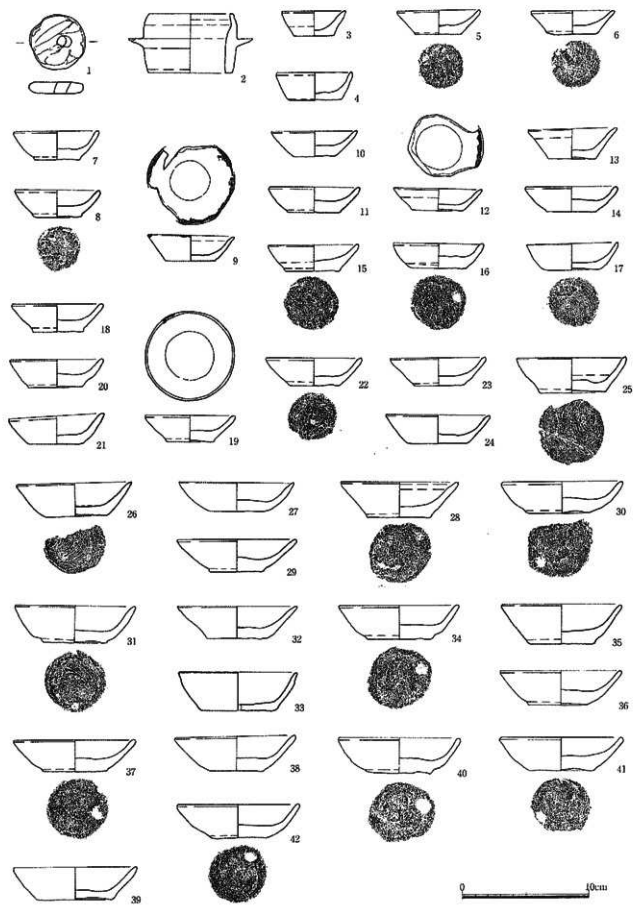


图52 SD02出土遺物1 (1/3)

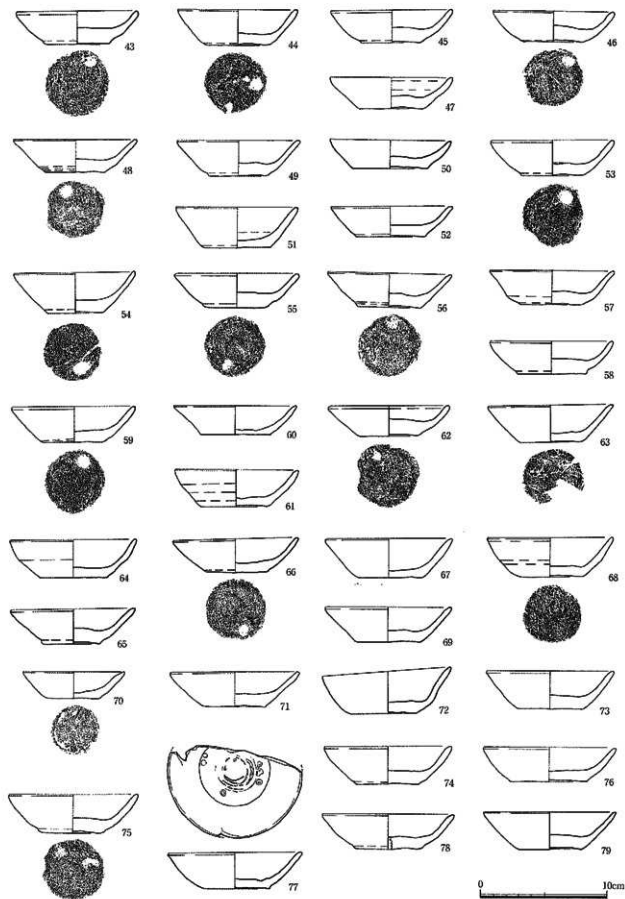


図53 SD02出土遺物2 (1/3)

7.0cm とやや開きがあるが、5 cm 前後のものが多い。

88の皿は復元口径14.0cm と一般的な坏にくらべてかなり大きい、器高は3.1cm とそれほど高くなく、体部があまり開かない。90の耳皿は、一般的な坏を完成した状態まで仕上げた後、口縁部を指で両側から揃んで成形する。

91~99は瓦質土器で、91~94は播鉢、95・96は火鉢、97は香炉、98は埴塀、99は大甍である。

91~94は外面に指オサエヤナデ、内面に播目を施す。内面底部から体部の境周辺は使用による播目の磨耗がみられる。95は深鉢型の火鉢の胸部から胴部にかけての破片で、胴部下位に一条の突帯が通る。96も深鉢型の火鉢で、全形が復元できる。底部に3つの脚が付き、胴部はバケツ形を呈する。胴部下位に1条、胴部上位に2条の突帯が廻り、口縁部外面に菊文のスタンプを施す。97の香炉は平底で、口縁部が内湾する。98の埴塀は丸底で器壁が厚い。皿状を呈し、内面や口縁部外面にかけて地金を強熱融解した際に生じた不純物が付着する。99の大甍は口縁部が短く外反し、内・外面ともナデを施す。

100は焼締陶器、101~105は施釉陶器である。100は備前焼の播鉢で、口縁部は鋭い断面三角形を呈する。内・外面とも横ナデし、内面に播目を施す。色調は灰赤色 (2.5YR5/2, 2.5YR4/2) で、真壁Ⅳ期に位置付けられる。101は16世紀末~17世紀初頭の唐津焼の碗で、やや低い高台が付き、内面及び外面体部に暗オリーブ色 (7.5YR4/3) の灰釉が掛かる。見込に目跡の痕跡はない。

102・103は華南三彩とみられる甗である。102は中国南部産の底部から体部の立ち上がり付近の破片で、内面に3本の沈線を施す。外面はヘラ削りやナデ調整を施し、外面にエメラルドグリーン色 (3G5/9)、内面にオリーブ色 (5Y5/4) の釉が掛かり底面は露胎。13~14世紀代。103は宋代のものともみられ、外面の口縁部と体部下位に1条の沈線を施し、体部下位の沈線上に1 cm 弱の楕円形の粘土塊を貼り付ける。内面の口縁部にも1条の沈線、体部に文様を施す。これらの調整の後、マラカイトグリーン色 (3G4/8.5) の釉が掛けられる。底面は露胎である。104は17世紀前半~中頃の唐津焼の鉄軸台付甗とみられ、部分的に白化粧土を施す。105も唐津焼の鉢で、外面と口縁部内面に鉄釉を施す。17世紀後半頃。

106は13世紀~14世紀後半頃の中国製青白磁梅目文梅瓶の体部片である。外面に片切彫で劃花文系の文様を表現し、内面にはロクロによる横ナデが施される。釉は灰白色 (5GY8/1) を呈する。

107・108は龍泉窯系青磁である。107は碗B-I類の口縁部片で、外面に片切彫で銘進弁文を表現し、オリーブ灰色 (10Y6/2) の釉が掛かる。108は棧花皿で全形が復元できる。内面に3条単位の線彫りを口縁部から体部に施す。高台内を除いて暗オリーブ色 (7.5Y4/3) の釉で施釉し、後に疊付を釉剥ぎする。15世紀第2四半期~16世紀初頭。

109~114は染付で、109~112は碗、113・114は皿。112は漳州窯系で、それ以外は景德鎮窯系である。109は碗C群で、見込に法螺貝文が描かれる。灰白色 (7.5Y8/1) の釉が全面に掛けられるが、疊付は釉剥ぎする。16世紀前半~中頃。110は口縁部片で外面に波濤文帯が描かれていることから、碗C群もしくは碗D群であろう。明オリーブ灰色 (2.5GY7/1) の釉が掛けられる。111は碗C群とみられる腰部以下の破片である。外面に唐草文、見込に花卉文とみられる文様が描かれ、明青灰色 (5B7/1) の釉で全面施釉の後、疊付が釉剥ぎされる。16世紀後半~17世紀初頭。112は16世紀後半頃のもので、口縁部外面に唐草文状の文様帯を有し、灰白色 (2.5GY8/1) の釉が掛けられる。

113は16世紀後半頃の皿B2群で、全形が復元可能である。口縁部は端反りで、口縁部と高台との境の外面に1条ずつの界線、口縁部内面に四方棒文、見込に2重の界線と同中心部に「平」の字が描かれることから、「天下太平」の文字が描かれていた可能性が高い。高台内にも2重界線の内部に「下」の

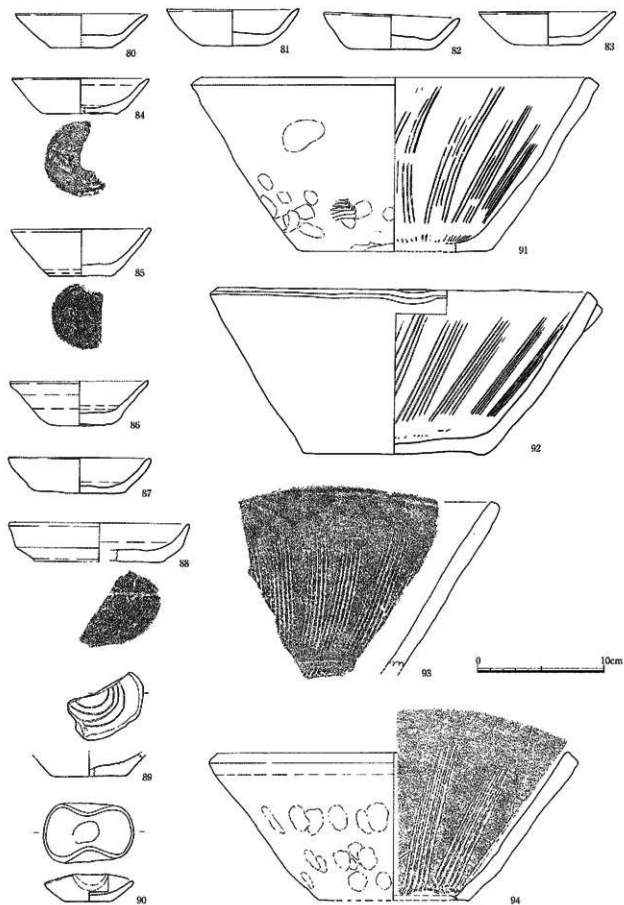


图54 SD02出土遺物3 (1/3)

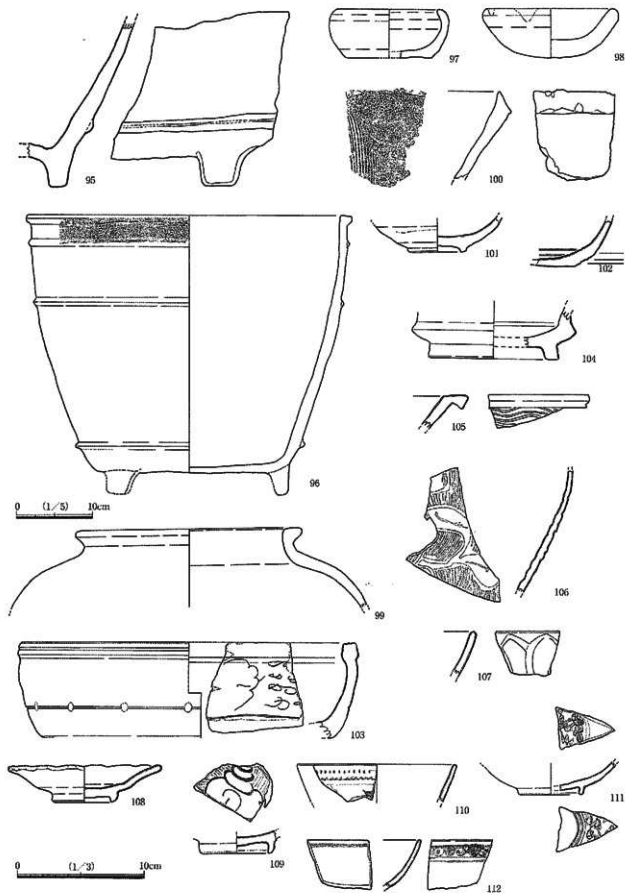


図55 SD02出土遺物4 (96のみ1/5、その他は1/3)

字がみえることから、見込と同様に「天下太平」の文字が表現されたとみてよい。明青灰色（5B7/1）の釉で全面施釉の後、壺付は釉剥ぎされる。114は見込の2重界線の内部に文様が描かれる。明青灰色（5B7/1）の釉で全面施釉の後、壺付は釉剥ぎされる。16世紀後半。

115・116は景德鎮窯系の赤絵。115は16世紀前半～中頃の端反りの碗の口縁部片で、釉は灰白色（5Y8/1）で、焼成後、モチーフは不明であるが外面と内面に赤色と緑色の顔料が用いられて文様が表現されている。116は皿で灰白色（2.5Y8/2）の釉を全面施釉して壺付を釉剥ぎする。焼成後、見込の2重界線内部に赤色の顔料で草花文と高台上部に1重の界線が描かれる。16世紀前半～中頃。

SD18（図56、図版26）

117～120は土師質土器の坏である。内・外面は回転ナデ調整を施し、底部は糸切り離しである。120は見込に同心円状の沈線を施す。

121は16世紀後半頃の朝鮮王朝陶磁の白磁碗で、内・外面に灰白色（5Y8/2）の釉が掛けられる。122は13～14世紀代の中国製の青白磁瓶とみられる破片である。獅子面？が表現されており、内・外面ともに明緑灰色（10GY8/1）の釉が掛けられている。

123・124は龍泉窯系青磁。123は碗の口縁部片で外面に片切彫で鑄連弁文を表現し、灰オリーブ色（5

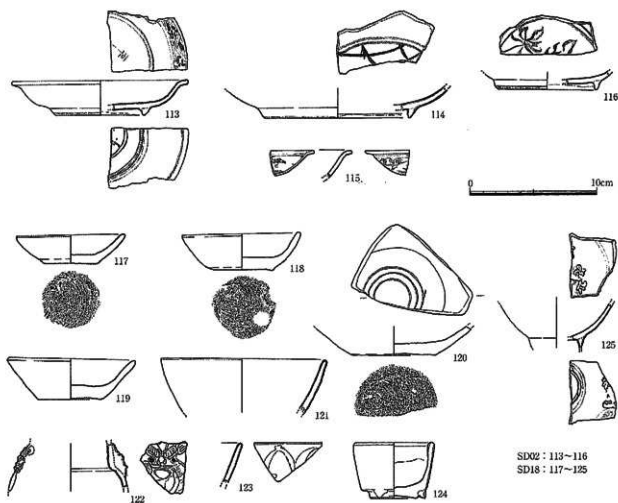


図56 SD02、SD18出土遺物（1/3）

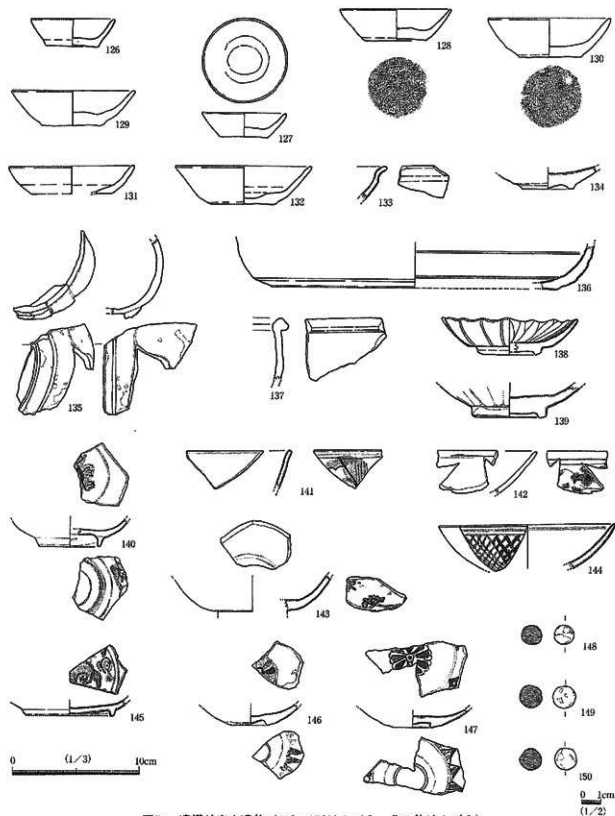


図57 遺構外出土遺物 (148~150は1/2、その他は1/3)

Y5/2)の釉が掛けられる。碗B-I類。124は14世紀後半~15世紀の香炉である。高台状の平底の台が付き、台の外面には3方向に脚の表現がある。外面と口縁部内面にオリブ灰色(10Y6/2)の釉が掛けられている。それ以外の部分は露胎であるが、焼成によって赤褐色を呈する。

125は景徳鎮窯系染付碗で、外面に花付唐草文、おそらく見込にも同様の文様が描かれ、前面に明青

灰色(5B7/1)が掛けられた後、畳付を釉剥ぎする。碗C群で16世紀前半から中頃。

遺構外出土遺物(図57、図版26)

126~132は回転台を用いて製作された土師質土器の坏である。126・127は小型の坏で、127は口縁部に油痕が残ることから、灯火具としての使用が想定される。これらの小型の坏に対し、128~132は上述した一回り大きな坏である。130の底部には指頭押痕、132の見込には指で押し付けたような窪みがある。

133~137は施釉陶器である。133は肥前産の可能性のある鉄釉の碗で、口縁部は強く外反し、黒褐色(2.5Y3/2)の釉薬が掛けられる。134は1580~1610年代の唐津焼の灰釉碗で、体部下半部以下が残存する。削り出しのやや低い高台が付き、内面及び外面体部にオリブ灰色(2.5YR6/1)の釉が掛かる。見込に日跡の痕跡はない。135は景德鎮窯系の法花か磁州窯系の騎翠釉の扁壺とみられる陶器で、白色の良質な胎土を用いる。中央部縁辺から外側にかけての破片とみられ、本来は低い幅広の突帯内に透かしのある装飾が施されていたと推測されるが、剝離しており残存しない。この突帯上部に紫色(ペルフラワー、3P3.5/11.5)の釉が施され、それ以外には水色(スペクトルブルー、3PB3.5/11.5)の釉が掛けられる。15~16世紀代のものであろう。136は華南三彩の盤の底部片である。外面と内面体部に濃緑色(エメラルドグリーン、3G5/9)、内面底部にオリブ色(5Y5/4)の釉が掛けられる。底面は露胎であるが、外面の釉だれで一部に釉の痕跡が残る。13~14世紀代。137も華南三彩の盤で、体部は内湾状に立ち上がり、口縁部は玉縁状を呈する。内・外面に濃緑色(エメラルドグリーン、3G5/9)の釉が掛けられる。136とは同一個体の可能性が高い。

138・139は青磁。138は16世紀後半の福建産の菊皿で、外面にはほぼ一定間隔で沈線、内面には放射状に凹部を作り出す。内面及び外面体部まで灰白色(10Y7/2)の釉が掛かり、高台外面及び高台内は露胎。139は龍泉窯系の碗B-I類で、内面に片切彫で鎗蓮弁文を表現する。内・外面はオリブ色(5Y5/4)の釉が掛けられる。畳付や高台内は露胎である。13世紀~14世紀中頃。

140~147は柴付。140~143は碗、144~147は皿で、144のみ漳州窯系、その他は景德鎮窯系である。140は16世紀第4四半期~17世紀初頭に位置付けられる。高台内に1重の界線、見込みに花卉文、外面にもモチーフは判然としないが文様が描かれる。全面施釉後、畳付は釉剥ぎを施す。内面は灰白色(7.5Y8/2)、外面は明青灰色(5B7/1)を呈する。141は口縁部片で、外面に呉須の発色が悪く、モチーフが不明な文様が描かれた後、灰白色(5Y8/2)の釉が掛けられる。142は体部外面に磨崖文、口縁部内面に1重の界線が描かれる。釉は灰白色(2.5GY8/1)を呈する。16世紀中頃~後半。143も16世紀中頃~後半で、外面にアラベスク文が描かれることから碗D群の可能性が高く、見込には2重の界線が描かれる。灰白色(2.5GY8/1)の釉が掛けられる。144は16世紀後半のもので、外面に格子文、口縁部内外に1重の界線を描き、灰白色(2.5GY8/1)の釉が掛けられる。145は底部片で1/6程度が残存する。見込に玉取獅子文が描かれる。灰白色(N8/)の釉で全面施釉後、畳付を釉剥ぎする。皿B1群の可能性が高く、16世紀前半~中頃。146・147は碁箱底の皿C群で、外面に芭蕉葉文、捺花文が描かれる。灰白色(2.5GY8/1)の釉が全面に施釉された後、畳付部分を釉剥ぎする。16世紀前半~中頃。

148~150は鉛玉(鉄砲玉)である。これらはややいびつな円球状を呈し、直径約1.0~1.2cmとほぼ同じ大きさである。表面には極めて薄い白い膜状のものが付着する。

表5 10次調査出土文物観察表 (カッコ内は復元値を示す)

検出 番号	調査 番号	器種	石 材	色調	調査 地点	層位	法 量 (cm)		備 考
							直径	高さ	
1	10-75	勃拉草	滑石製	源白石	3区	上海	4.2	1.0	片断穿孔
SD 02 (石製品)									
1	10-75	勃拉草	滑石製	源白石	3区	上海	4.2	1.0	片断穿孔
SD 02 (土器)									
検出 番号	調査 番号	器種	胎 土	施 色 (内/外)	器型圖説 (内/外)	調査 地点	層位	法 量 (cm)	備 考
2	10-85	土師瓦土器・ミ ニエムア土器	1~2 mmの砂粒、雲母、角閃石、長 石を含む	良好 浅黄橙/浅黄橙	回転ナデ/ナデ	2区	下層	6.4 4.2 6.6	最大径9.2cm
3	10-82	土師瓦土器	1 mm程度の砂粒、雲母を含む	良好 橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し?	4区	上層	4.9 2.0 3.1	
4	10-77	土師瓦土器・坏	1 mm程度の砂粒、雲母を少量含む	良好 橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し?	4区	下層	(5.9) 2.2 4.0	
5	10-20	土師瓦土器・坏	1~3 mmの砂粒、雲母を含む	良好 橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上層	6.3 1.9 3.6	
6	10-92	土師瓦土器・坏	1~2 mmの砂粒、雲母、長石を含む	良好 橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上層	(6.4) 1.9 4.0	
7	10-17	土師瓦土器・坏	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好 濃い黄、 黄、黄緑	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し?	2区	上層	6.5 2.3 3.5	
8	10-14	土師瓦土器・坏	1~2 mmの砂粒を含む	良好 橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上層	6.6 2.2 3.7	
9	10-108	土師瓦土器・坏	1~2 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好 橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上層	6.6 2.1 3.9	
10	10-91	土師瓦土器・坏	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好 橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上層	(6.7) 3.2 2.0	
11	10-61	土師瓦土器・坏	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好 橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し?	3区	上層	(6.9) 2.0 4.1	
12	10-80	土師瓦土器・坏	1 mm程度の砂粒を少量含む	良好 濃い黄、 黄、黄緑	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	4区	上層	6.9 1.7 3.8	口縁部に油痕
13	10-25	土師瓦土器・坏	1 mm程度の砂粒、雲母、角閃石を少量含む	良好 橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	4区	下層	6.9 2.4 3.7	口縁部に油痕
14	10-109	土師瓦土器・坏	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好 橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し?	2区	上層	7.0 1.9 3.9	底部に指痕押圧痕
15	10-105	土師瓦土器・坏	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好 橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上層	7.0 2.1 4.4	
16	10-74	土師瓦土器・坏	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好 橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	3区	上層	(7.0) 2.0 4.3	底部に指痕押圧痕
17	10-3	土師瓦土器・坏	1 mm以下の細かい砂粒を含む	良好 浅黄橙/浅黄橙	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上層	7.0 2.1 4.0	
18	10-19	土師瓦土器・坏	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好 橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上層	7.0 2.2 3.9	
19	10-37	土師瓦土器・坏	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好 橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し?	2区	上層	7.0 2.1 3.7	底部に指痕押圧痕
20	10-103	土師瓦土器・坏	1~3 mmの砂粒、雲母を含む	良好 橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し?	2区	上層	(7.2) 2.2 4.2	底部に指痕押圧痕
21	10-48	土師瓦土器・坏	1~3 mmの砂粒、雲母を含む	良好 橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	下層	7.3 2.2 4.2	
22	10-81	土師瓦土器・坏	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好 橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	4区	上層	7.4 2.2 3.8	
23	10-94	土師瓦土器・坏	1 mm程度の砂粒、雲母を含む	良好 橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上層	(7.4) 2.2 3.8	底部に指痕押圧痕
24	10-107	土師瓦土器・坏	1~2 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好 橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し?	3区	上層	8.0 2.4 4.6	底部に指痕押圧痕
25	10-105	土師瓦土器・坏	1 mm程度の砂粒、雲母を少量含む	良好 橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上層	8.6 2.8 5.2	
26	10-97	土師瓦土器・坏	1 mm程度の砂粒、雲母を少量含む	良好 浅黄橙/浅黄橙	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上層	(9.0) 2.6 4.7	
27	10-95	土師瓦土器・坏	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好 橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し?	2区	上層	(9.0) 2.3 4.2	底部に指痕押圧痕
28	10-4	土師瓦土器・坏	1~7 mmの砂粒、雲母を含む	良好 橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上層	(9.1) 2.8 5.0	底部に指痕押圧痕
29	10-54	土師瓦土器・坏	1~2 mmの砂粒、角閃石、雲母を含む	良好 橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し?	2区	上層	(9.2) 2.6 4.9	
30	10-49	土師瓦土器・坏	1~3 mmの砂粒、雲母を含む	良好 橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上層	(9.2) 2.5 4.9	底部に指痕押圧痕
31	10-5	土師瓦土器・坏	1~3 mmの砂粒、雲母、長石を含む	良好 橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上層	(9.3) 2.9 5.0	底部に指痕押圧痕
32	10-41	土師瓦土器・坏	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好 橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し?	2区	上層	(9.3) 2.6 4.7	
33	10-45	土師瓦土器・坏	1 mm以下の砂粒、雲母を少量含む	良好 橙/橙	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上層	9.3 3.1 5.6	

洋館 番号	実測 番号	器種	胎土	地産	色調(内/外)	器面調整(内/外)	調査 地点	法 量 (cm)			備 考	
								口径	器高	底径		
34	10-40	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、赤土、角閃石を含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し?	2区	上唇	(9.3)	2.7	4.9	底部に指痕押圧痕
35	10-52	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、赤土、角閃石を含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上唇	(9.3)	3.1	5.0	底部に指痕押圧痕
36	10-78	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、赤土、角閃石を含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	4区	壺土	9.3	2.7	4.6	
37	10-101	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、赤土を含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上唇	(9.3)	2.5	5.1	底部に指痕押圧痕
38	10-1	土師質土器・杯	1~4 mmの砂粒、赤土、角閃石を含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上唇	(9.4)	2.8	4.3	
39	10-2	土師質土器・杯	1 mm程度の砂粒、赤土を含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上唇	(9.4)	2.7	4.9	
40	10-21	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、赤土を含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上唇	(9.4)	2.6	5.0	底部に指痕押圧痕
41	10-31	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、赤土を含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上唇	(9.4)	2.7	4.7	底部に指痕押圧痕
42	10-55	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、赤土を含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上唇	(9.4)	2.6	5.1	底部に指痕押圧痕
43	10-58	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、赤土を含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上唇	(9.4)	2.6	5.1	底部に指痕押圧痕
44	10-78	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、赤土を含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	3区	上唇	(9.4)	2.8	4.7	底部に指痕押圧痕
45	10-100	土師質土器・杯	1 mm程度の砂粒、赤土を含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上唇	(9.4)	2.6	4.8	底部に指痕押圧痕
46	10-102	土師質土器・杯	1 mm程度の砂粒、赤土を含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上唇	(9.4)	2.4	4.8	底部に指痕押圧痕
47	10-18	土師質土器・杯	1 mm程度の砂粒、赤土を少量含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上唇	(9.5)	2.5	5.0	
48	10-35	土師質土器・杯	1~3 mmの角閃石を含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上唇	9.5	2.6	4.6	
49	10-46	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、赤土を含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上唇	(9.5)	2.8	4.4	
50	10-53	土師質土器・杯	1 mm程度の砂粒、赤土を少量含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上唇	9.5	2.3	5.7	
51	10-71	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、赤土、角閃石を含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	3区	上唇	(9.5)	3.2	5.2	
52	10-87	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、赤土を含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上唇	(9.5)	2.4	5.3	底部に指痕押圧痕
53	10-89	土師質土器・杯	1~4 mmの砂粒、赤土を含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上唇	(9.5)	2.8	4.9	底部に指痕押圧痕
54	10-90	土師質土器・杯	1~10mmの砂粒、赤土を含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上唇	(9.5)	3.2	4.4	底部に指痕押圧痕
55	10-96	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、赤土を含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上唇	9.5	2.7	5.0	底部に指痕押圧痕
56	10-36	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、赤土を含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上唇	(9.6)	2.7	5.0	底部に指痕押圧痕
57	10-38	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、赤土を含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上唇	(9.6)	2.7	4.8	底部に指痕押圧痕
58	10-42	土師質土器・杯	1~7 mmの砂粒、赤土を含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上唇	(9.6)	2.6	4.8	底部に指痕押圧痕
59	10-83	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、赤土を含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上唇	(9.6)	2.6	4.6	底部に指痕押圧痕
60	10-99	土師質土器・杯	1 mm程度の砂粒、赤土を少量含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上唇	9.6	2.8	5.2	
61	10-104	土師質土器・杯	1 mm程度の砂粒、赤土を含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上唇	9.6	3.0	5.3	
62	10-29	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、赤土を含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上唇	(9.2)	2.4	5.1	底部に指痕押圧痕
63	10-39	土師質土器・杯	1 mm程度の砂粒を少量含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上唇	(9.7)	2.9	4.6	
64	10-43	土師質土器・杯	1~4 mmの砂粒、赤土を含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上唇	(9.7)	3.0	5.2	
65	10-51	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、赤土を含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上唇	(9.7)	2.8	4.4	
66	10-98	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、赤土を含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上唇	9.7	2.7	4.8	底部に指痕押圧痕
67	10-16	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、赤土を含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上唇	9.8	3.1	5.1	底部に指痕押圧痕
68	10-24	土師質土器・杯	1 mm程度の砂粒、赤土を少量含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上唇	(9.8)	3.1	4.9	
69	10-54	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、赤土、角閃石を含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上唇	(9.8)	2.8	5.0	
70	10-22	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、赤土、長石を含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上唇	9.9	2.1	4.1	
71	10-66	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、赤土、角閃石を含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	下唇	9.9	4.9	2.8	4.7
72	10-66	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、赤土を含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	3区	上唇	9.9	3.3	5.2	
73	10-30	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、赤土を含む	良好	燈/燈	回転ナデ/回転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上唇	10.0	3.0	4.9	底部に指痕押圧痕

種類 番号	実測 番号	器種	胎	土	色澤 (内/外)	模様 (内/外)	器面調整 (内/外)	調査 地点	部位	法 量 (cm)	備 考	
										口径 器高 底径		
74	10-32	土師瓦土器・杯	1~4 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	灰/灰	同転ナデ/同転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上層	10.0	3	5.0	底部に指摺押正直
75	10-33	土師瓦土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	灰/灰	同転ナデ/同転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上層	10.0	3.1	5.2	底部に指摺押正直
76	10-34	土師瓦土器・杯	1 mm程度の砂粒、雲母を含む	良好	明褐色/明褐色	同転ナデ/同転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上層	10.3	2.7	5.8	
77	10-35	土師瓦土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	黒褐色/黒褐色	同転ナデ/同転ナデ、底部赤切り磨し	2区	下層	10.3	2.9	5.2	器口縁部が折れ壊
78	10-36	土師瓦土器・杯	1 mm程度の砂粒、雲母を含む	良好	黒褐色/黒褐色	同転ナデ/同転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上層	10.3	2.8	5.4	
79	10-47	土師瓦土器・杯	1~4 mmの砂粒、角閃石、雲母を含む	良好	灰/灰	同転ナデ/同転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上層	10.4	3.0	4.6	
80	10-86	土師瓦土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	灰/灰	同転ナデ/同転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上層	10.4	2.7	4.8	
81	10-56	土師瓦土器・杯	1~3 mmの砂粒、雲母を含む	良好	灰/灰	同転ナデ/同転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上層	10.4	2.9	5.0	底部に指摺押正直
82	10-59	土師瓦土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	灰/灰	同転ナデ/同転ナデ、底部赤切り磨し	3区	上層	10.5	2.7	6.4	
83	10-9	土師瓦土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母を少量含む	良好	灰/灰	同転ナデ/同転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上層	10.7	2.7	(5.2)	
84	10-28	土師瓦土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	灰/灰	同転ナデ/同転ナデ、底部赤切り磨し	2区	上層	10.8	2.8	5.8	
85	10-84	土師瓦土器・杯	1~2 mmの砂粒、雲母、角閃石を多く含む	良好	灰褐色/灰褐色	同転ナデ/同転ナデ、底部赤切り磨し	2区	F層	10.8	3.7	5.0	内面に油状の黒ずみ
86	10-72	土師瓦土器・杯	1~2 mmの砂粒、角閃石、雲母を含む	良好	灰/灰	同転ナデ/同転ナデ、底部赤切り磨し	3区	上層	10.8	3.5	4.5	
87	10-77	土師瓦土器・杯	1~3 mmの砂粒、雲母を含む	良好	灰/灰	同転ナデ/同転ナデ、底部赤切り磨し	3区	上層	11.0	2.8	7.0	
88	10-69	土師瓦土器・杯	1~3 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	灰/灰	同転ナデ/同転ナデ、底部赤切り磨し	3区	上層	(14.0)	3.1	(10.0)	
89	10-68	土師瓦土器・杯	1~4 mmの砂粒、雲母を含む	良好	灰/灰	同転ナデ/同転ナデ、底部赤切り磨し	3区	上層	—	残1.7	(6.0)	器口縁部に折れ壊
90	10-111	土師瓦土器・耳環	1~2 mmの砂粒、雲母を含む	良好	灰褐色/灰褐色	同転ナデ/同転ナデ、底部赤切り磨し	4区	上層	7.5	2.1	3.6	
91	10-112	瓦質土器・楕球	1~6 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	灰白、淡黄褐色	ナデ、楕目/楕目ナデ、ナデ	2区	上層	(30.4)	13.7	(15.4)	使用による器目の磨耗
92	10-115	瓦質土器・楕球	1~2 mmの砂粒、雲母、角閃石を多く含む	良好	灰白、淡黄褐色	ナデ、楕目/楕目ナデ	2・3区	上層	28.7	12.9	14.3	器目による器目の磨耗
93	10-161	瓦質土器・楕球	1~2 mm程度の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	灰褐色/灰褐色	ナデ、楕目/楕目ナデ	2区	上層	—	残13.0	—	使用による器目の磨耗
94	10-162	瓦質土器・楕球	1 mm程度の砂粒、角閃石を含む	良好	灰赤/灰赤	ナデ、楕目/楕目ナデ	2区	上層	(28.0)	11.7	11.8	
95	10-164	瓦質土器・火鉢	1 mm前後の砂粒、雲母を含む	良好	灰白/灰赤	ナデ/ナデ	2区	上層	—	残12.7	—	漆塗型
96	10-165	瓦質土器・火鉢	1 mm前後の砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	黒褐色/黒褐色	ナデ/ナデ	2区	上層	(43.9)	36.9	26.1	漆塗型
97	10-73	瓦質土器・香炉	1~2 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	黒褐色/黒褐色	ナデ/ナデ	2区	上層	(7.9)	3.9	(6.7)	
98	10-110	瓦質土器・埴輪	1~2 mmの砂粒、雲母、角閃石を含む	良好	灰白/灰白	ナデ/ナデ	2区	上層	10.0	4.0	—	器蓋の不純物付着
99	10-163	瓦質土器・大甕	1 mm前後の砂粒、角閃石を含む	良好	灰赤褐色/灰赤	ナデ/ナデ、ヨコナデ	2区	上層	(29.9)	4.0	—	

S D 02 (陶磁器)

種類 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色澤 (内面/外面もしくは土)	器面調整 (内/外)	調査 地点	部位	法 量 (cm)	備 考		
									口径 器高 底径			
100	10-114	硬質陶器・椀鉢	細砂	良好	内：灰赤/外：灰赤	ナデ、楕目/ナデ	2区	上層	残7.0	—	—	磨損後、灰黒着削
101	10-119	陶器・甕	細砂	良好	黒オリーブ/黒	漆塗/ロタクロズリ、黒油	1区	器土	残2.6	4.5	呼津燒	
102	10-151	陶器・甕	細砂	良好	黒オリーブ/黒	漆塗/ロタクロズリ、黒油	3区	器土	残3.6	(31.1)	赤附三彩	
103	10-152	陶器・甕	細砂	良好	黒オリーブ/黒	漆塗/黒油	3区	下層	(26.4)	残7.6	—	赤附三彩
104	10-157	陶器・内付蓋	細砂	良好	黒/黒	漆塗/黒油	1区	下層	—	残4.4	(11.2)	呼津燒
105	10-158	陶器・鉢	細砂	良好	黒/黒	漆塗/黒油	1区	上層	—	残2.5	—	呼津燒
106	10-125	甕白磁・楕球	細砂	良好	灰白/灰白	漆塗/黒油、片切彫、黒油	2区	下層	残9.9	—	—	器蓋赤系、器口支持痕
107	10-147	青磁・楕球	細砂	良好	黒オリーブ/黒	漆塗/黒油、片切彫、黒油	2区	下層	(16.5)	残3.3	—	器蓋赤系、器B-1磨
108	10-116	青磁・梅花皿	細砂	良好	黒オリーブ/黒	漆塗/黒油、片切彫、黒油	2区	上層	(12.1)	2.9	5.1	器蓋赤系
109	10-126	赤付・甕	細砂	良好	灰白/灰白	漆塗/黒油、片切彫、黒油	4区	上層	—	残1.8	(6.5)	器蓋黒系、黒C磨
110	10-146	赤付・甕	細砂	良好	黒オリーブ/黒	漆塗/黒油、片切彫、黒油	2区	上層	(12.2)	残3.0	—	器蓋黒系、黒C磨もしくはD磨

標頭 番号	家測 番号	精礎	粘土	焼成	色調		調整 (内/外)	調整 地点	部位	法量 (cm)			備 考
					(内面/外面もしくは軸源/軸土)	色調				焼成	面調整 (内/外)	口徑	
111	10-132	条付・縦	赤褐色	良好	赤褐色	灰白	花弁文、鳥輪/草文、鳥輪	2区	上層	—	残2.5	(5.0)	高塚遺跡系、磯C群小
112	10-143	条付・縦	赤褐色	良好	灰白/赤	灰白	鳥輪/草文文?、鳥輪	4区	上層	(12.6)	残3.6	—	高塚遺跡系、磯C群小
113	10-123	条付・横	赤褐色	良好	赤褐色	灰白	四方律文、鳥輪/鳥輪	2区	下層	(4.0)	2.8	(7.0)	高塚遺跡系、磯C群小
114	10-129	条付・横	赤褐色	良好	赤褐色	灰白	龍文、雲輪/龍輪、龍文	3区	上層	—	残2.2	(11.4)	高塚遺跡系
115	10-131	条付・縦	赤褐色	良好	赤褐色	灰白	龍文、雲輪/龍輪、龍文	4区	上層	(14.6)	残2.4	—	高塚遺跡系
116	10-121	赤褐色・横	赤褐色	良好	赤褐色	灰白/赤	鳥輪、草花文/鳥輪	3区	上層	—	残1.4	(7.8)	高塚遺跡系

S D 18 (土器)

標頭 番号	家測 番号	器種	粘土	焼成	色調		調整 (内/外)	調整 地点	部位	法量 (cm)			備 考
					(内面/外面もしくは軸源/軸土)	色調				焼成	面調整 (内/外)	口徑	
117	10-69	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、赤褐色	良好	赤褐色	灰白	鳥輪/鳥輪	3区	下層	8.3	2.3	4.4	高塚遺跡系、磯C群小
118	10-62	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、赤褐色	良好	赤褐色	灰白	鳥輪/鳥輪	3区	下層	9.3	2.9	5.2	高塚遺跡系、磯C群小
119	10-60	土師質土器・杯	1~7 mmの砂粒、赤褐色	良好	赤褐色	灰白	鳥輪/鳥輪	3区	下層	9.8	3.2	5.1	高塚遺跡系、磯C群小
120	10-70	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、赤褐色	良好	赤褐色	灰白	鳥輪/鳥輪	3区	上層	—	残2.3	6.6	高塚遺跡系、磯C群小

S D 18 (陶磁器)

標頭 番号	家測 番号	器種	粘土	焼成	色調		調整 (内/外)	調整 地点	部位	法量 (cm)			備 考
					(内面/外面もしくは軸源/軸土)	色調				焼成	面調整 (内/外)	口徑	
121	10-159	白磁・横	赤褐色	良好	赤褐色	灰白	鳥輪/鳥輪	3区	上層	(13.0)	残4.2	—	高塚遺跡系、磯C群小
122	10-135	青磁・縦	赤褐色	良好	赤褐色	灰白	鳥輪/鳥輪	3区	上層	—	残3.6	—	高塚遺跡系、磯C群小
123	10-148	青磁・縦	赤褐色	良好	赤褐色	灰白	鳥輪/鳥輪	3区	下層	(17.4)	残2.9	—	高塚遺跡系、磯C群小
124	10-122	青磁、各戸	赤褐色	良好	赤褐色	灰白	鳥輪/鳥輪	3区	下層	(6.4)	4.4	3.8	高塚遺跡系、磯C群小
125	10-124	条付・縦	赤褐色	良好	赤褐色	灰白	鳥輪/鳥輪	3区	埋土	—	残3.5	(4.1)	高塚遺跡系、磯C群小

遺構外出土遺物 (土器)

標頭 番号	家測 番号	器種	粘土	焼成	色調		調整 (内/外)	調整 地点	部位	法量 (cm)			備 考
					(内面/外面もしくは軸源/軸土)	色調				焼成	面調整 (内/外)	口徑	
126	10-107	土師質土器・杯	1 mm程度の砂粒、赤褐色	良好	赤褐色	灰白	鳥輪/鳥輪	3区	埋土	6.5	2.2	4.1	高塚遺跡系、磯C群小
127	10-65	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、赤褐色	良好	赤褐色	灰白	鳥輪/鳥輪	2区	埋土	6.6	1.9	3.8	高塚遺跡系、磯C群小
128	10-64	土師質土器・杯	1~2 mm程度の砂粒、赤褐色	良好	赤褐色	灰白	鳥輪/鳥輪	3区	埋土	(8.7)	2.5	4.8	高塚遺跡系、磯C群小
129	10-66	土師質土器・杯	1~2 mm程度の砂粒、赤褐色	良好	赤褐色	灰白	鳥輪/鳥輪	2区	埋土	(9.4)	2.1	4.9	高塚遺跡系、磯C群小
130	10-27	土師質土器・杯	1~3 mmの砂粒、赤褐色	良好	赤褐色	灰白	鳥輪/鳥輪	2区	埋土	(9.6)	3.1	4.9	高塚遺跡系、磯C群小
131	10-64	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、赤褐色	良好	赤褐色	灰白	鳥輪/鳥輪	3区	埋土	(9.7)	2.3	6.1	高塚遺跡系、磯C群小
132	10-63	土師質土器・杯	1~2 mmの砂粒、赤褐色	良好	赤褐色	灰白	鳥輪/鳥輪	3区	埋土	(10.7)	3.0	5.0	高塚遺跡系、磯C群小

遺構外出土遺物 (陶磁器)

標頭 番号	家測 番号	器種	粘土	焼成	色調		調整 (内/外)	調整 地点	部位	法量 (cm)			備 考
					(内面/外面もしくは軸源/軸土)	色調				焼成	面調整 (内/外)	口徑	
133	10-153	陶器・灰	赤褐色	良好	赤褐色	灰白	鳥輪/鳥輪	1区	埋土	(14.2)	残2.2	—	高塚遺跡系、磯C群小
134	10-118	陶器・横	赤褐色	良好	赤褐色	灰白	鳥輪/鳥輪	2区	埋土	—	残1.8	4.1	高塚遺跡系、磯C群小

種類 番号	発掘 番号	器種	出土 地	色調	表面/外面もしくは模様/胎土	装飾	内/外	調査 地点	法量 (cm)	備 考
135	10-152	胡瓶・豆盛?	麻密 良好	赤	胎土	胎土	胎土	3区	残5.6	宮後須賀赤の注花?
136	10-159	胡瓶・壺	麻密 良好	赤	胎土	胎土	胎土	3区	残3.6 (22.3)	津田三形
137	10-155	胡瓶・壺	麻密 良好	赤	胎土	胎土	胎土	3区	(35.0) 残4.9	津田三形
138	10-160	胡瓶・壺	麻密 良好	赤	胎土	胎土	胎土	4区	(10.0)	5.1 福屋
139	10-117	青磁・碗	麻密 良好	灰白	胎土	胎土	胎土	1区	残2.5	5.8 宮後須賀赤
140	10-137	赤付・碗	麻密 良好	灰白	胎土	胎土	胎土	3区	残2.3 (4.8)	宮後須賀赤
141	10-142	赤付・碗	麻密 良好	灰白	胎土	胎土	胎土	3区	残3.1	宮後須賀赤
142	10-150	赤付・碗	麻密 良好	灰白	胎土	胎土	胎土	3区	(13.5)	宮後須賀赤
143	10-158	赤付・碗	麻密 良好	灰白	胎土	胎土	胎土	3区	残2.8	宮後須賀赤、残D槽か
144	10-141	赤付・皿	麻密 良好	灰白	胎土	胎土	胎土	3区	(14.0)	津田三形
145	10-126	赤付・皿	麻密 良好	灰白	胎土	胎土	胎土	3区	残1.2 (6.7)	宮後須賀赤
146	10-127	赤付・皿	麻密 良好	灰白	胎土	胎土	胎土	3区	残1.7 (2.6)	宮後須賀赤、皿C群
147	10-128	赤付・皿	麻密 良好	灰白	胎土	胎土	胎土	T10	残1.5	3.2 宮後須賀赤、皿C群

遺構外出土遺物 (土器・陶器以外)

種類 番号	発掘 番号	種類	多量の種類	色調	調査 地点	法量 (cm)	備 考
148	10-166	鉄釘	灰白	4区	1.0	糸通に薄い膜状のものが付着	
149	10-167	鉄釘	灰白	1区	1.2	糸通に薄い膜状のものが付着	
150	10-168	鉄釘	灰白	4区	1.1	ほぼ糸通に薄い膜状のものが付着	

第4節 小 結

10次調査は千疊敷北側のSD02の状況を把握することを主な目的とした調査であったが、それ以外に開渠状遺構SD17や堅堀跡SD18、井戸状遺構SE01などの遺跡を検出した。SD02やSD04などの横堀跡や切岸以外でこれまで知られていなかった防御施設を新たに確認することができたことや、宇土城跡で初めて井戸状遺構を検出したことは重要な成果といえよう。

これらの相対的な時期関係については、遺構埋土の重複から前後関係が明確に決定できる遺構は無かったものの、SD02とSD17は遺構の配置状況から判断して、同時期に並存していたとみられる。これに対し、SD18やSE01はSD02に先行し、以下の根拠よりSD18ではSD02との隣接地点、SE01はSD02の形成に際して埋められたと推測される。

SD18の埋土上層から中層は、厚さが薄い土層が細かく堆積しており、これらは比較的硬質であることから、意図的に版築状に突き固められて埋められたとみられ、それはSD02の形成に関連した行為であるとみられる。ただし、堅堀としての機能が全く失われたわけではなく、この埋め立てはSD02との隣接部分に限られていたのではないかと推測される。また、SE01についても基盤層の掘削土で内部が満たされた状態であることから、SD02の掘削に起因すると考えられる。

千疊敷北側のSD02に関しては、底面に凹凸や突出部を有しており、1・9次調査が行われた千疊敷南側、同西側のあり方とかなり異なることが判明した。また、検出遺構に関して最も大きな成果は、SD02が未完成だった可能性が高いことがあげられる。未完成と考えられる最大の理由として、基盤層を掘削した際に生じた土砂が堀底の凹部に厚く堆積しており、これは掘削土が排出されないまま残された可能性が極めて高いといえる（巻頭図版3参照）。

なお、堀底面の凹凸は、堀内部に仕切り状の施設を設けて堀底を移動する敵兵の侵攻阻止をねらった「敵堀」と類似する形状を呈するが、本遺構はいくつかの点で敵堀とは認定し難い特徴があることから、掘削が途中で中止された結果として残された掘削単位（いわゆる小間割）の痕跡と想定される。そのより詳細な根拠については次章でふれたい。

出土遺物に関しては、土師質土器や瓦質土器などの土器、備前焼などの国産陶磁器、白磁・青磁・染付などの貿易陶磁器が出土した。土師質土器の坏が大量に出土することや、15～16世紀代を中心とする陶磁器の出土というこれまでの調査と同様の傾向を指摘できる。また、陶磁器の産地についても、青磁は龍泉窯系、染付は景徳鎮窯系が大半を占めており、同安窯系の青磁や漳州窯系の染付はほとんど出土していない点も共通する。

出土遺物のうち、明代の景徳鎮産の可能性ある法花磁州窯系の磁州軸陶器の出土は特筆される。器種は扁壺と推定され、青色・紫色の釉薬が施されている。剥離しており残存しないが、低い幅広の突帯内に透かしのある装飾が施されていたのであろう。もし、法花であれば発掘調査で出上かつ報告されたものは日本国内では極めて少なく、管見の限り大分県久住町の小路遺跡出土品（後藤・吉田ほか2000）や、沖縄県那覇市首里城跡出土品が知られている程度である。

引用・参考文献

- 藤本貴仁 2000『宇土城跡（西岡台）』Ⅲ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第21集 宇土市教育委員会
 藤本貴仁 2004『宇土城跡（西岡台）』Ⅳ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第25集 同上
 藤本貴仁 2005『宇土城跡（西岡台）』Ⅴ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第26集 同上
 後藤一重・吉田寛ほか 2000『小路遺跡 上屋敷遺跡』久住町教育委員会

第6章 まとめ

第1節 横堀跡 SD02について

(1) SD02の掘削過程

1・9・10次調査において、千疊敷を囲む横堀跡 SD02の南・西・北側の様相が明らかとなった。先述のように千疊敷南・西側では、整形された断面逆台形のいわゆる箱堀で、ほぼ一定の深さがあるのに対し、北側では堀底に凹凸を有しており、深さも場所によってかなりのばらつきがあることが判明した。

千疊敷北側では突出部を6箇所、段差を2箇所、凸部を6箇所、凹部を6箇所検出し、突出部は全て外側壁面から千疊敷側へ向けて配置されている。また、突出部と配置状況が極めて類似する、拳大から人頭大の安山岩塊石を列状に並べた配石遺構 SX03を検出した。

6箇所の凹部のうち、2箇所の堀底直上でSD02掘削時に生じたとみられる地山の掘削土を確認した。このことは、SD02掘削時に生じた地山掘削土が排出されず、そのまま堀底に残されたことと想定できる。この2箇所の凹部内の堀底直上において黒色系の粘土層が形成されていないことは、掘削後ほとんど時間をおかず掘削が埋まったことを傍証する。つまり、何らかの理由で千疊敷北側では堀普請が中止された可能性が高く、SD02は未完成の横堀跡と評価することができよう。

上記の堀底面の凹凸は、一見すると堀内部に仕切り状の施設を設ける「畝堀」と類似する形状を呈するが、本遺構はいくつかの点で畝堀とは認定し難い特徴がある。まず、堀底に残された凸部の形態は「幅広で低い土手状の高まり」といった形状を呈し、他地域の障子堀のように「幅が狭い高い土の壁が堀内部を仕切る」というような形態ではない(池田1998、井上1998など)。さらに、凸部が存在する区間約20mの深さは、その他の区間にくらべて極めて浅く、防御施設としては貧弱な印象を受ける。これらの理由より、堀底の凹凸は堀普請の途中で中止された結果として残された掘削単位(小間割)の痕跡と想定できよう。また、突出部やSX03も堀普請に関連する造作であろう。

以上の遺構の残存状況より、SD02の掘削過程を推定すると、堀をある区間ごとに区画して掘削を進め、この区間ごとの進捗状況が堀底の凸凹に現れており、最終的にはこの凸部も掘削されて千疊敷南・西側のような状態に仕上げる予定だったと推察される。つまり、断面逆台形の箱堀を成形する工事のある段階を示しているのであろう。おそらく凹部区間で見本形を造った後、その形に基づいて隣接する凸部をこの見本形のかたちに合わせて掘削する。これを数回繰り返すことによって完成形である断面逆台形に仕上げたと考えられる。

小間割に関しては、群馬県の未完成中世水路「女堀」が著名である。幅約30m、深さ約5mと大規模で、掘削範囲を設定して掘削を行っている。中世城郭の堀と用水路という性格の違いから、同系列には語れないとはいえ、規模が大きな土木工事を行う場合は、掘削する範囲などを設定して計画的・能率的に工事を進めたとみて間違いない¹¹⁾。

管見の限り、発掘調査で未完成と認定される中世城郭の堀跡が確認されたのは、全国的でも初めてとみられ、歴史学や土壌学的観点からみても極めて重要な発見といえよう。

(2) 千疊敷西側の灰や炭化物を含む層について

1次調査報告では、千疊敷西側 SD02の埋土において「黒褐色土に灰や炭化物を含む層」が確認され、『八代日記』に記載された天文7年(1538)と11年(1542)の2度の火災との関係を指摘し、この層が

ら出土した柴付の時期である嘉靖期と一致するとしたが、この層自体が天文年間の堆積かどうかは断言しかねると報告した（平山・高木ほか1977）。

1次調査H地区の一部と重複する9次調査においても、同様の層を確認し、土師質土器を中心とする多くの遺物が出土した。これらの遺物の年代をもとに、本層の堆積時期を想定すれば、比較的古い時期の陶磁器を含むものの、その下限は16世紀後半～17世紀初頭とみてよい。このことから、当初想定された嘉靖年間より新しい時期の遺物を含むことが明らかとなった。

一方、遺構の状況からみると「黒褐色土に灰や炭化物を含む層」は千畳敷側から急激にSD02に流入し、あたかも掻き入れたような堆積状況を呈する。SD02を意図的に埋め戻す意図があったとまでは断言できないものの、千畳敷の当時の生活面が削平されて段下のSD02側へ土砂を流入させたものとみてよい。千畳敷周辺では城郭の生命を断ち切る儀礼的行為である「城破り」が行われたことが、12次調査や14次調査で明らかになっており（藤本2001・2002）、本堀跡の埋め立ても城破りに伴う行為であった可能性を指摘しておきたい。

なお、豊臣秀吉の九州平定に伴い名和顯孝が宇土城を退去した天正15年（1587）から小西行長が宇土に入り、新城（宇土城跡城山）の築城を開始したとされる天正16年（1588）の16世紀末と、前述した層中出土の最も新しい時期の陶磁器の年代がほぼ合致することは注目される。

第2節 宇土城跡出土の土器・陶磁器について

（1）土器

土器は土師質土器や瓦質土器などが出土し、特に前者は出土遺物の90%以上の割合を占める。これらは在地産の土器で、特に土師質土器は大量生産・大量消費されたものと考えられる。

土師質土器の器種は坏が大半を占め、火鉢も出土している。また、坏とくらべて器高が低く、底径と口径の差があまりない通有の皿と認定できるものは未報告のものも含めてほとんど出土していない特徴がある。法量の大小はあるものの、総じて極めて近似したプロポーションを呈し、製作技法も共通する。これらは回転台を使用して製作されており、底部は糸切り離し技法が用いられる。糸切り離し技法が登場する前段階の底部ヘラ切り技法のものは皆無と見てよい。熊本県北部から中央部ではこの転換が12世紀前半～後半の間とされており（美濃口1994）、この時期にはまだ千畳敷周辺において城郭及び厩館は形成されてはいなかった可能性が高い。また、底部縁辺部に指で強くつまんで持ち上げた際に生じたとみられる指頭押圧痕が残るものもある。

坏の分類については、法量より大小2つに分けられる。SX02出土遺物を例にとれば、小型の一群（I類）は口径が6 cm 半ばから後半台に集中する。器高は1 cm 後半台のものが多く、底径は4 cm 前半台のものが多数を占める。底部と体部の境は明瞭である一方、内面に関しては見込から体部に明確な屈曲がないものがごく一部にある。

一方、大型の一群（II類）は、口径がおおむね8 cm 半ば～9 cm 後半台の範疇におさまる。器高は2 cm 半ばのもの、底径はおおむね4 cm 後半から5 cm 半ばまでのものが主体である。プロポーションはI類を一回り大きくしたような形状を呈する。体部から口縁部まで斜め上方にはほぼ直線に延びるものがほとんどであるが、体部から口縁部にかけて緩やかに外反したり、内面に関しては見込から体部に明確な屈曲がないものがごく一部ある。

なお、土師質土器（カワラケ）の大量出土の要因として、この種の土器が日常食器としての側面も有

しながらも、当地が城の主郭という権力表象の場であることを考慮すれば、饗宴や儀礼の器として非日常的機会に多量に消費されたと想定できよう。なお、一部に油痕が残る灯明皿として使用された土師質土器が出土しているが、数は極めて少ない。

瓦質土器には播鉢、火鉢、羽釜などの雑器類がある。出土量は土師質土器に次いで多く、青灰色で焼きが良く硬質なもの、白灰色を呈し前者にくらべて低温で焼かれた軟質のものがある。

播鉢は内面ナテ調整の後に播目が施されており、ほぼ例外なく内面には使用による磨耗がみられる。特に底部内面が顕著である。外面には指オサエやナテ調整が施される。火鉢は土師質と瓦質のものがあり、脚台は3脚で、ごく一部を除き外面に断面三角形や断面Uの字形の突帯が数条通り、口縁部外面にスタンプの文様を有する。外面に器高の高低より浅鉢形と深鉢形の2類に分類できる。その他、大甕や出土量は少ないが握鉢や羽釜、香炉、坩堝なども出土している。

(2) 国産陶磁器

出土陶磁器には、備前焼や瀬戸・美濃産などの国産陶磁器と、白磁や青磁、染付などの貿易陶磁器があり、後者の出土量が多い。国産陶磁器は中世のものが多いが、近世の肥前陶磁器も若干含まれている。近世陶磁器は基本的にはSD02の埴土上層や遺構外から出土している。

種類や器種としては、備前焼の播鉢や甕、瀬戸・美濃産の天目茶碗、唐津焼の碗や皿、肥前の白磁や染付や施釉陶器がある。このうち、中世のものは備前焼と瀬戸・美濃産のものを基本とするが、唐津焼の古相のものは廃城前後の時期に該当するものも含まれる。それ以外の肥前系の白磁や染付などの近世陶磁器は、廃城後に持ち込まれたものであろう。

(3) 貿易陶磁器

貿易陶磁器は焼締陶器、施釉陶器、白磁、青磁、染付、赤絵などが出土しており、種類や器種、産地、年代など多種多様である。

焼締陶器は中国南部産とみられる壺が出土している。施釉陶器では緑色や黄色の釉薬を用いた華南三彩やタイ産の壺など、中国南部から東南アジアにかけての広範囲にわたる陶器が出土した。このなかには法花やベトナム産の可能性もあるものも含まれている。しかし、出土量としては中国産の青磁や染付にくらべると圧倒的に少ない。時期は15～16世紀代とみられる。

白磁は景德鎮窯系や福建産などの中国製がほとんどであるが、朝鮮王朝系白磁が数点出土している。器種は碗や皿であり、15～16世紀代が主体で、特に16世紀代の福建産の端反り皿が比較的多く出土している。なお、青白磁では13～14世紀後半頃の梅瓶が出土している。

青磁の器種は碗や皿が大半で、その他に香炉や壺がある。青磁碗は外面に片切彫の鑄蓮弁文やヘラ先による細線蓮弁文を施文しているものが多く、その他、當文が施されているものがある。青磁皿には稜花風や菊風がある。産地は龍泉窯系が9割以上を占めるが、小片のため図化していない青磁のなかに色調が黄緑色で御描文が施された、龍泉窯系より時期的に先行する同安窯系青磁がごく僅かに出土している。時期は13～16世紀代と比較的時代幅がある。

染付は碗および皿、甕が出土した。染付碗は外面に唐草文を描くものが多く、見込部に法螺貝文や玉取獅子文が描かれたものなどがある。染付皿は高台がつくものと高台が付かない蕃笥底のものが出土しており、胴部外面に芭蕉葉文、内面に四方禪文などが描かれている。見込部や高台内に「福」や「大明

年造」などの銘を有するものもごく一部出土している。産地は景德鎮窯系が9割以上を占めるが、これとは異なり呉須の発色が悪く、胎土が淡黄色を呈する福建省漳州窯系染付を僅かに含む。時期は15世紀後半から17世紀初頭までであるが、特に16世紀後半～17世紀初頭の廃城前後のものを比較的多く含む傾向がある。内面に宝文、外面に唐草文が描かれ、口縁部が外側に屈曲するいわゆる「口折れ」の皿（小野分類ⅢF群）や漳州窯系染付などがこの時期に該当する。おそらくこの時期まで城として機能していたと想定される。その他の陶磁器として、わずかであるが景德鎮窯系の赤絵が出土している。

以上の上器・陶磁器については、破片数のカウントによる細かな組成の検討は行っていないが、出土量や産地、時期などの大まかな傾向をつかむことができた。組成の分析については今後の課題であるが、これによって出土遺物からみた宇土城跡の特質がより明確になるものと考えられる。

註

- 1) 作業単位を示す事例として、時代を大雑にさかのぼるが、弥生時代の環壕に掘削単位が認められる。

引用・参考文献

- 平山修一・高木恭二ほか 1977『宇土城跡（西岡台）』本文編 宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集 宇土市教育委員会
 森田 勉 1982「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
 上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」同上
 小野正敏 1982「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」同上
 小笠原 清 1988「障子屋・堀障子および堀底特殊構造について」上『小田原』－歴史と文化－2 小田原市
 小笠原 清 1989「障子屋・堀障子および堀底特殊構造について」下『小田原』－歴史と文化－3 同上
 池田 光雄 1989「堀内部障壁の一形態について」『中世城郭研究』3 中世城郭研究会
 岡田忠彦 1991『橋前境』ニューサイエンス社
 美濃口雅則 1994「熊本県における中世前期の土師器について」『中世土器の基礎研究』X 日本中世土器研究会
 中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
 池田 光雄 1998「障子堀について」第15回全国城郭研究者セミナー資料
 井上 哲朗 1998「堀内障壁の分類と編年試案」同上
 青山洋治 1999『南海の陶磁貿易』『季刊考古学』第66号 雄山閣出版
 手塚直樹 1999「東アジアの陶磁器生産」『考古学ジャーナル』No.448 ニューサイエンス社
 藤本貴仁 2000『宇土城跡（西岡台）』Ⅲ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第21集 宇土市教育委員会
 藤本貴仁 2001『宇土城跡（西岡台）』Ⅳ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第22集 同上
 藤本貴仁 2002『宇土城跡（西岡台）』Ⅴ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第23集 同上

図 版

PLATES

図版 1～10：第 1 次発掘調査

図版 11～17：第 9 次発掘調査

図版 18～26：第 10 次発掘調査

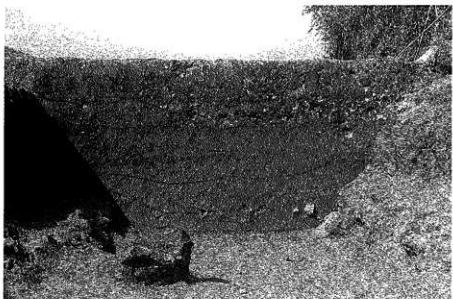
宇土城跡遺景（北西より）



千畳敷南西側コーナー調査状況
(H-T 3、南より)



同上南側 SD02土層断面（東より）



図版 2

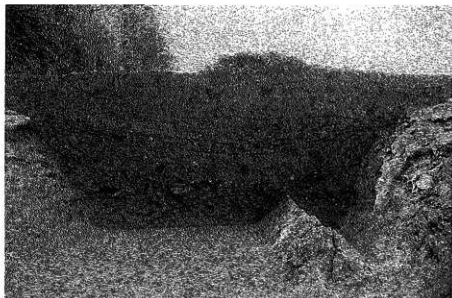


千畳敷南西側コーナー SD01とSD02の重複状況 (H-T3、西より)



同上西側 SD01とSD02の重複状況 (H-T4、北より)

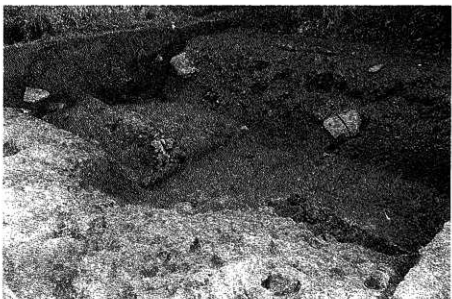
千畳敷西側 SD01と SD02の土層
断面 (H-T6 南セクションベ
ルト、北より)



同上 SD01の土師器出土状況
(H-T8、南より)



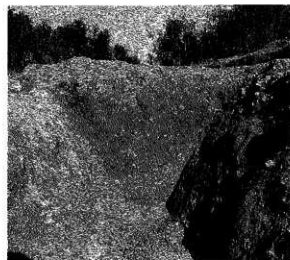
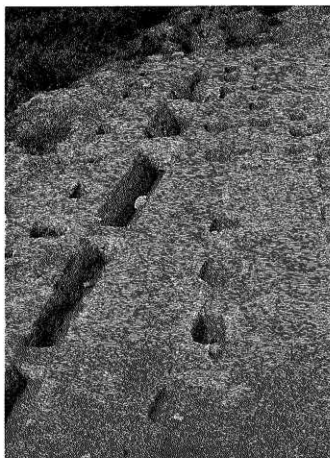
千畳敷北西側コーナー付近の堀
底の段差 (H-T6、西より)



図版 4



三城西側遺構調査状況 (B地区、東より)



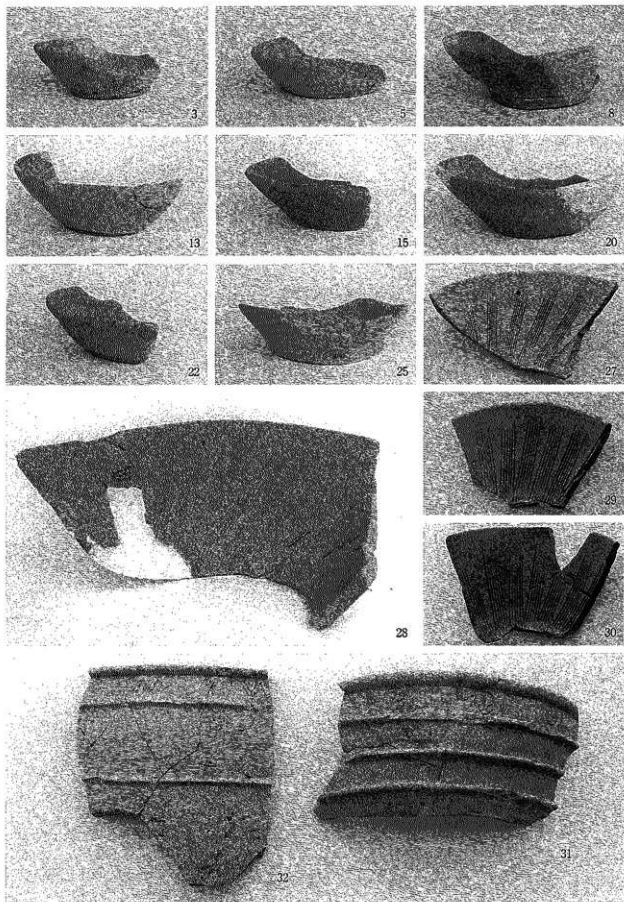
SD07土層断面 (西より)

三城南側 SD07・SD08調査状況 (東より)

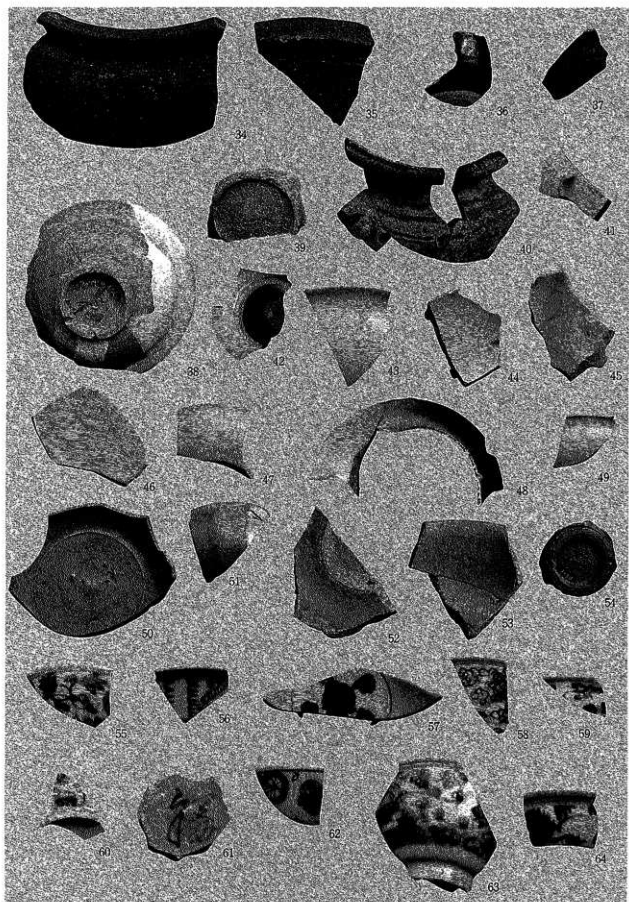


C地区 SX02土師質土器出土状況(北より)

图版 6

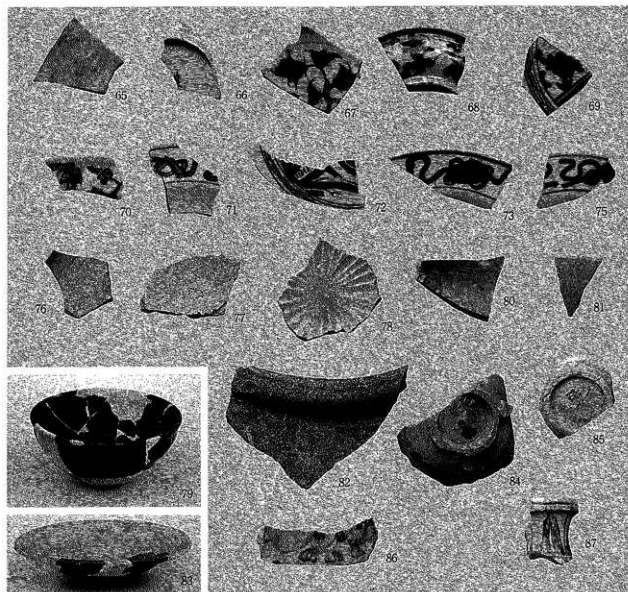


SD02出土遺物 1

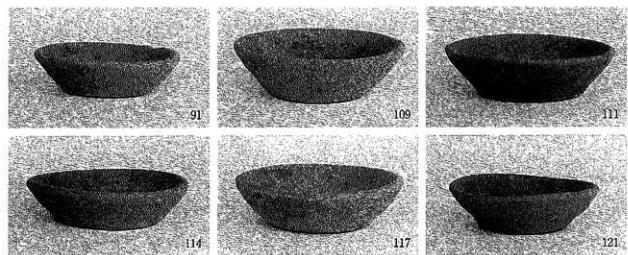


SD02出土遺物 2

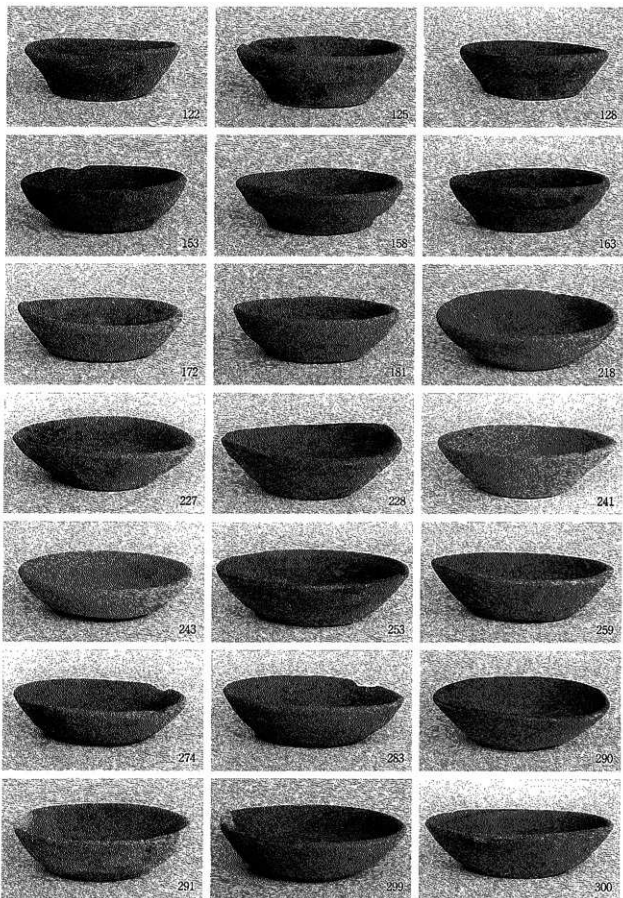
図版 8



SD02出土遺物 3、SD05～SD07・SX01出土遺物

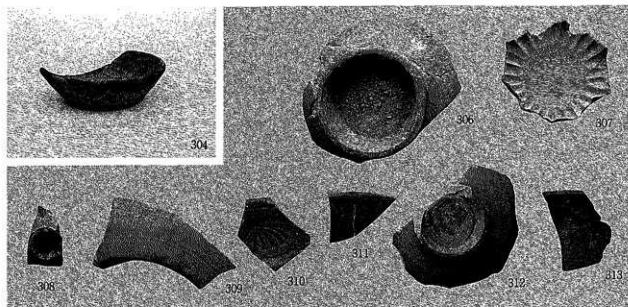


SX02出土遺物 1

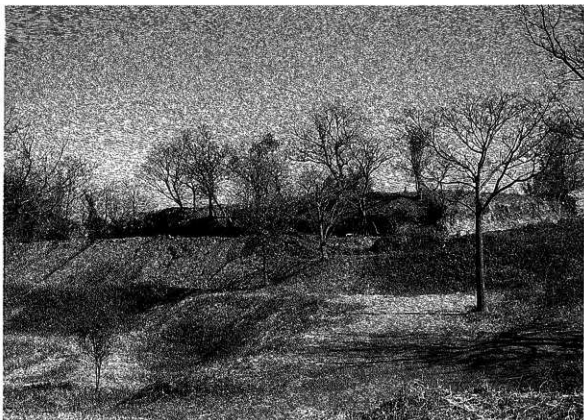


SX02出土遺物 2

图版10



遺構外出土遺物



千畳敷近景 (西より)



千畳敷南・西側発掘調査空中写真 (南西より)

図版12



千畳敷南側 SD02完掘状況（東より）



同上完掘状況（西より）



千畳敷西側 SD01・SD02セクション
ベルト調査前状況（北より）

千疊敷南西側コーナー付近調査状況
(南より)



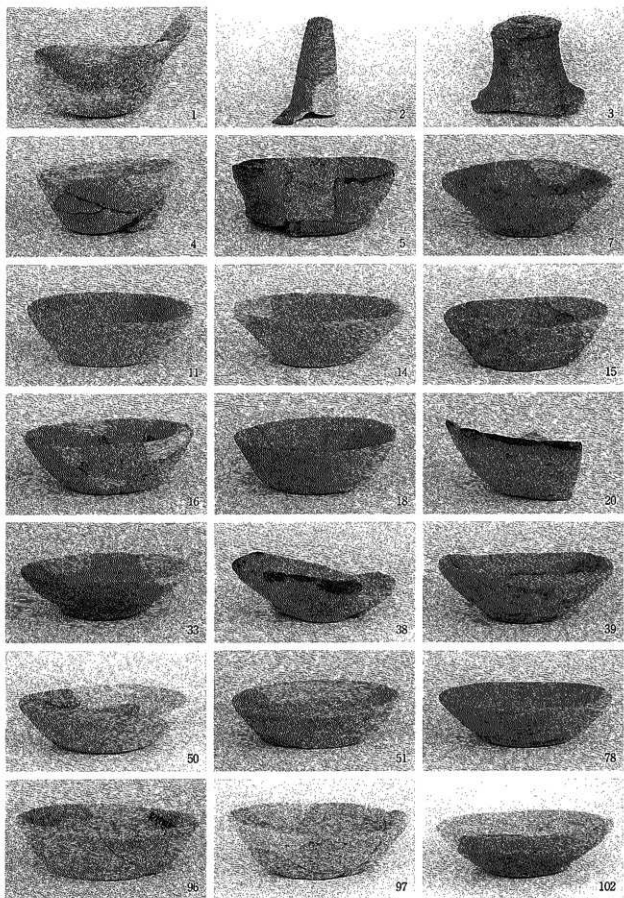
千疊敷西側完掘状況 (北より)



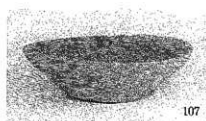
同上完掘状況 (南より)



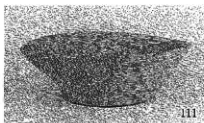
图版14



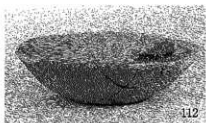
SD02出土遺物 1



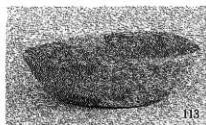
107



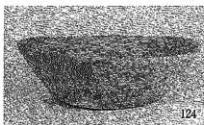
111



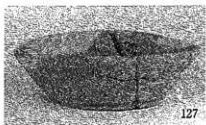
112



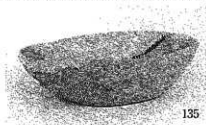
113



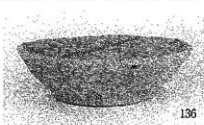
124



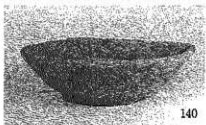
127



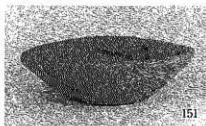
135



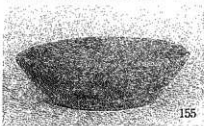
136



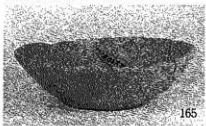
140



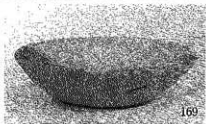
151



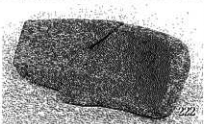
155



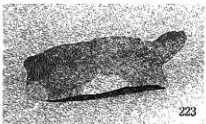
165



169



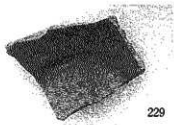
222



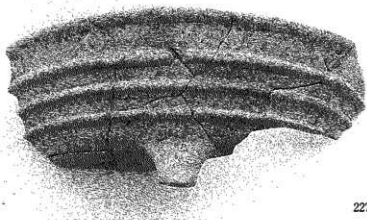
223



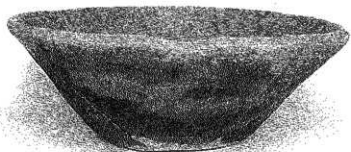
226



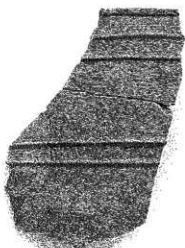
229



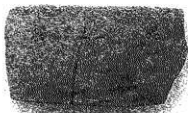
227



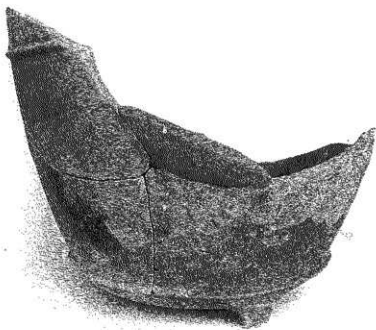
232



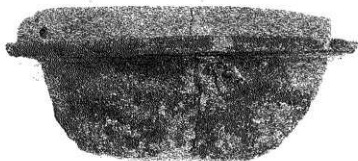
235



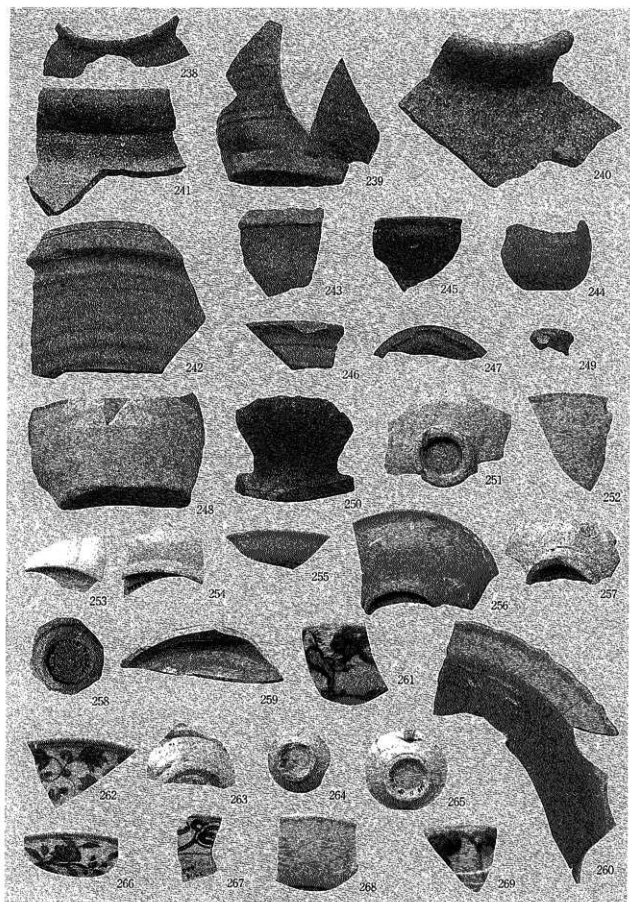
233



236



237

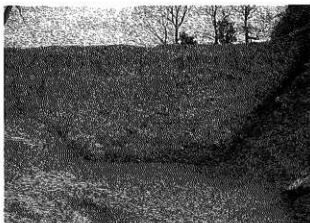


SD02出土遺物 4

図版18



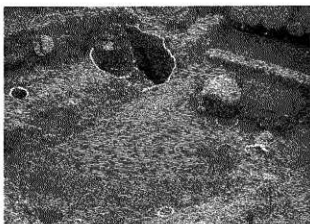
10次調査区空中写真(上が北)



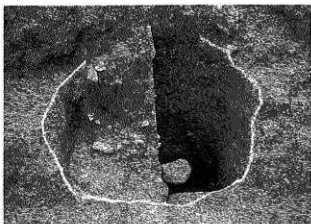
千畳敷北西側 SD02土層断面(1区、西より)



SD02上層遺物出土状況(2区、北より)



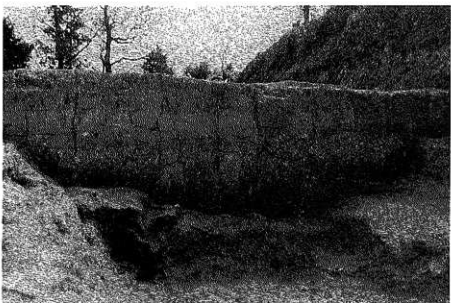
SD02、井戸跡 SE01調査状況(2区、東より)



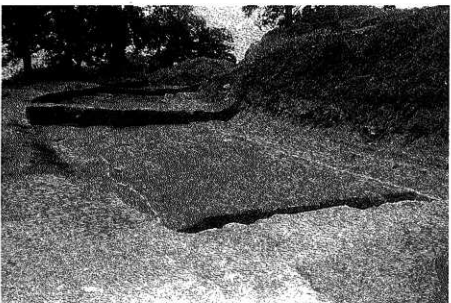
SE01埋土半截状況(北より)



SD02突出部2・3検出状況
(2区、南より)



千畳敷北側SD02土層断面(2
区、西より)



SD02検出状況(3・4区、西
より)



千疊敷北側 SD02及び平場調査状況 (3区、南より)



SD02、竪堀跡 SD18埋土掘り下げ状況 (3区、西より)



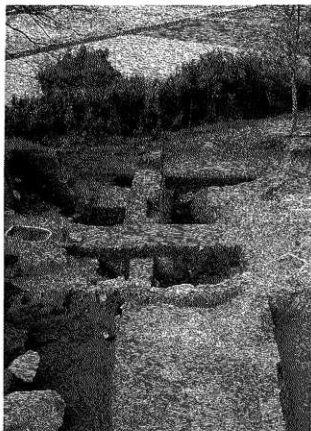
SD02底面検出のピット (3区、北より)



SD02、SD18調査状況 (3区、西より)



SD18及び平場検出のピット群 (西より)



SD02、SD18調査状況（南より）



SD18埋土掘り下げ状況（東より）

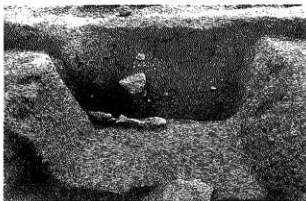


SD18南側の投棄された安山岩塊石（東より）



SD18調査状況（南より）

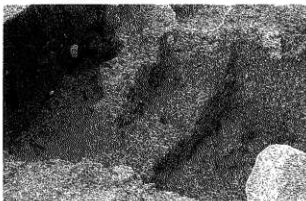
図版22



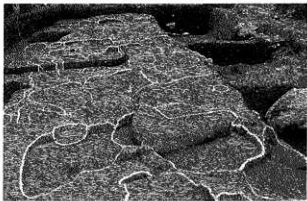
千疊敷北東側 SD02土層断面及び SX03
(4区、西より)



SX03 (東より)



SD02突出部6 検出状況 (4区、南より)



千疊敷北東側平場検出のピット及び土坑群
(4区、西より)



千疊敷北東側 SD02及び平場調査状況 (4区、南より)

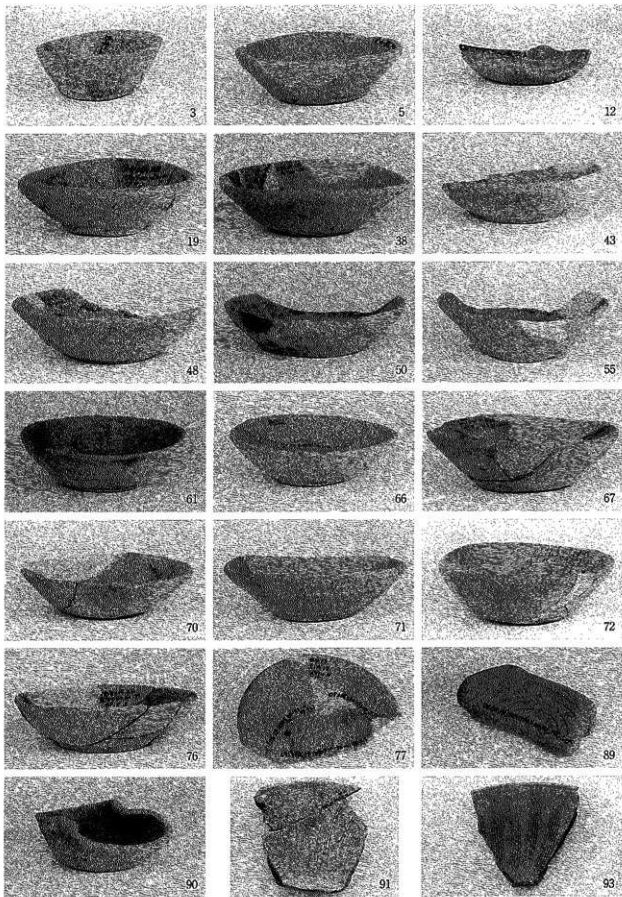


千畳敷北西側 SD02、開渠伏道構 SD17調査状況（1区、南より）

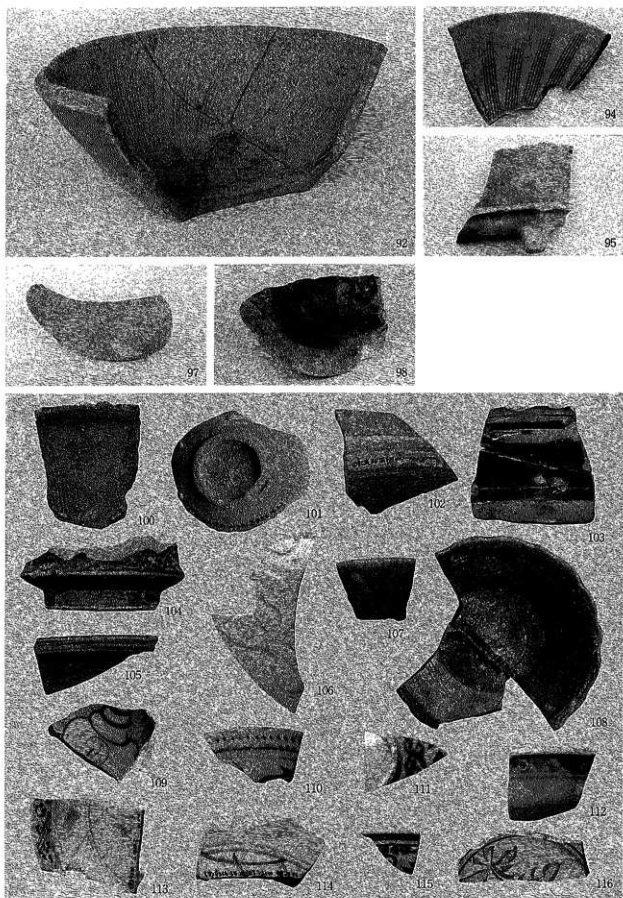


SD17調査状況（北西より）

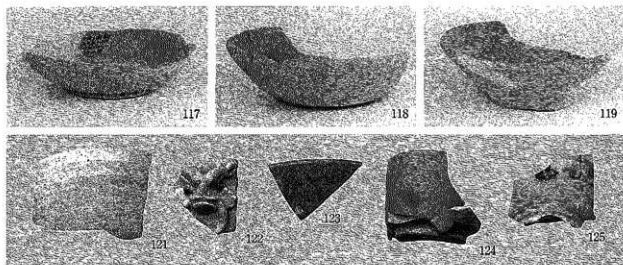
图版24



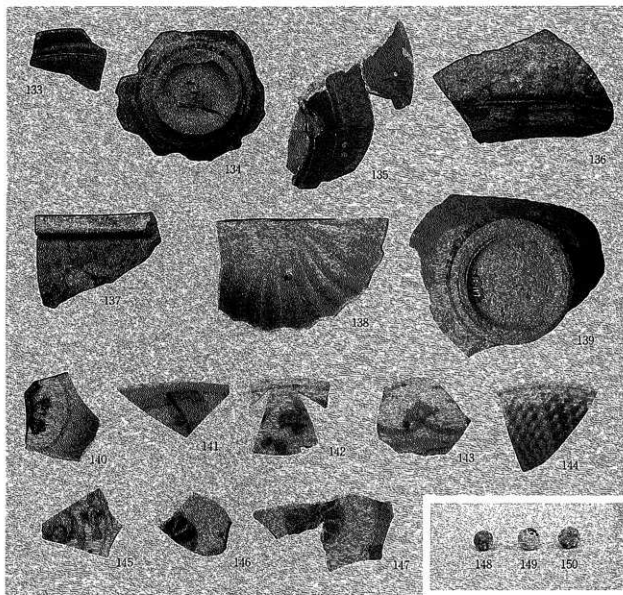
SD02出土遺物 1



SD02出土遺物 2



SD18出土遺物



遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	うとじょうあと (にしおかだい)						
書名	宇土城跡 (西岡台)						
副書名	史跡宇土城跡保存修理事業に伴う発掘調査報告書						
シリーズ名	宇土市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ号	第29集						
編著者名	藤本貴仁						
編集機関	宇土市教育委員会						
所在地	〒869-0433 熊本県宇土市新小路町95						
発行年月日	2007年3月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村(遺跡番号)	北緯※	東経※	調査 回数	調査 面積	調査 事由
うとじょうあと 宇土城跡	くまもとけんうとじょうし 熊本県宇土市神馬町 あびのきじょうじ 宇土聖敷	43211	32° 40' 46"	130° 38' 46"	1次 9次 10次	5,380㎡ 1,420㎡ 810㎡	緊急調査 (1次)、保 存整備に伴 う調査(9・ 10次)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		
宇土城跡	中世城	古墳時代 中世	壕跡(古墳時代)、横堀跡、堅堀 跡、掘立柱建物跡、門跡、開渠状 遺構、欄跡、井戸跡(中世)		土師器、土師質土器(カワラケ)、 瓦質土器、備前焼・唐津焼などの 陶産陶磁器、白磁・青磁・染付な どの貿易陶磁器、石塔、鉄砲玉		
特記事項							
【1次調査】主郭・千畳敷を圍繞する横堀跡や掘立柱建物跡、千畳敷西側の曲輪・三城で掘立柱建物跡や門跡など多数の城郭遺構を検出するとともに、土師質土器や瓦質土器、陶磁器など大量の遺物が出土。城郭築城以前に千畳敷に存在した古墳時代の首長居館を圍繞する断面V字形の壕跡を検出。							
【9次調査】千畳敷を囲む横堀跡の南・西側の1次調査未掘範囲を調査。本遺構の南・西側の全容が明らかになる。							
【10次調査】千畳敷北側横堀跡で掘削単位(小間割)とみられる凹凸を検出。本遺構が未完成であったことが判明。中世城郭において未完成の横堀跡が発見されたのは全四初。千畳敷北側で堅堀跡を検出。							

※北緯及び東経は世界測地系を使用。

宇土城跡（西岡台）Ⅸ

—史跡宇土城跡保存修理事業に伴う発掘調査報告書—
宇土市埋蔵文化財調査報告書 第29集

発行年月日 平成19（2007）年3月30日

編集・発行 熊本県宇土市教育委員会
〒869-0433 宇土市新小路町95
TEL 0964-22-6500代 FAX 0964-58-1005

印刷 シモダ印刷株式会社
〒869-0511 熊本県宇城市松橋町曲野2437-1
TEL 0964-32-3131代 FAX 0964-33-1598

The Report of The Research of
Burial Cultural Properties
Uto City Vol.29

Ruins of Uto Castle (Nishiokadai) Ⅸ

March, 2007

**Kumamoto Prefecture Uto City
Board of Education**